るなり、第一句は春の夢は暮春に至るも尙心に殘れるを謂ひ、第二句は心に傷みある身は曉の寒さにすら耐へずして少しく瘦するを覺ゆとの意なり。】

〔刷子序犯〕〔旦低唱す〕 春歸りて恁く寒峭、都來幾日意懶く心喬れ、竟に妝成り香を薰じ獨り坐して無聊、逍遙して、怎で助愁の芳草を剗盡さん、甚の法兒か心苗を點活せん、眞情强ひて笑ふも、誰が爲に嬌かん、淚花兒夢魂に打迸著て飄ふ。

【解說 「春歸り」とは、春の去れるを謂ふ、「甚の法兒」云云は、氣力を振起すべき方法無しとの意なり、「淚花兒」云云は、淚滴は夢魂に隨ひてはふり落つるの意なり。】

〔朱奴兒犯〕〔貼〕 小姐よ、爾、熱き性兒怎で氷著ざる、冷き淚兒幾んど曾て乾燥かんや、這の兩度の春遊忒だ分曉す、是れ燕抄り鶯鬧ぐに禁不的して、爾自ら(五)寧約す、敢夫人見て焦ち、再に愁煩せん、十分の容貌怕らくは九分の憔に上らず。

【解說 「這の兩度の」云云は、二回の春遊に於ける汝(小姐)が心は我(春香)よく之を知れりとの意なり、「是れ燕抄り」以下「寧約す」迄は、酣なる春に逢ひて小姐が心も亦自から春を感じ、暗に期待する何物かを有するならん」との意なり、「十分の」云云は、完全なる容

【五】寧約。心の中にひそかに約するなり。

色は憂愁の爲に多少の美を損じたりとの意なり。】

〔旦驚く介を作す〕 咳、春香の言話を聽けば、俺麗娘瘦せて九分九に到了と、俺且つ鏡前に一照せん、委是に如何ならん、〔照す介〕〔悲しむ介〕 哎也、俺往日は(六)豔冶輕盈、奈何せん一瘦して此に至りぬ、若し此時を趁うて自ら描畫を行ひ、人間に流在せずんば、一旦無常、誰か西蜀の杜麗娘が此の如きの美貌有りしを知らん乎、春香よ、素絹と丹青とを取れ、待我描畫せん。

〔貼下り絹筆を取りて上る〕 三分の春色は描來くこと易く、一段の傷心は畫出すること難し、絹幅丹青、俱に已に齊備せり。

〔旦泣く介〕 杜麗娘の二八の春容、怎生でか便是杜麗娘自手生描せん也。

【解說 「瘦せて九分九に到了」とは、甚だしく瘦せたりとの意なり、此の上更に瘦する餘地無き程に瘦せたるなり、「三分の春色」云云二句は、對句にして、外面の美は多少其の形を描くことを得れども、心中の惱は描くに難しとの意なり。】

〔普天樂〕〔旦〕 這些時少年の人花の如き貌をば、多時ならずして憔悴了めぬ、他が福分銷し難きに因らずんば、可甚的紅顏老い易からん、人間の絕色を論せば偏に少からず、第風光を把つて丟

【六】豔冶輕盈。なまめかしく美くしきこと。

抹すること早し、離魂舍を打滅起欲火三焦、(七)昭容閣に擺列著文房の四寶、畫出せんと待す、(八)西子湖眉月雙び高し。

【解說　「少年の人」とは小姐が自ら指せる語なり、「他が福分」云云の「他」とは夢に見たる青年をいふ「福分銷し難き」とは、幸福を享受し得ざることを謂ふ、此の二句の意は、彼(青年、卽ち柳生)が我(小姐)と夫妻と爲るの幸福を有せざるに因らずんば、我の容貌何ぞ衰へんやとなり、換言せば、我の容貌が斯く衰へたるは(是れ生命の長からざる意)、すなはち彼に我と結婚し得るの幸福無きなりとの意なり、「紅顏老い易し」は容色の減ずるに喩へたる語なり、「人間の」云云二句は、美人は世に多けれど、何れも皆光陰の爲に其の美を漸漸減損せらるとの意なり、「離魂舍」とは小姐の身に喩へたるなり、もと唐の張鎰が女倩娘の故事に出づ、三焦とは三業の熱火なり、三業は貪瞋癡なり、此の句は戀愛の爲に身を亡すことに譬へたり、「昭容閣」は小姐の居室に喩へたり、西湖は其の美古の美人西子に比べらる、故に西子湖といふ、今此の末句は小姐の美貌に喩へたるなり。】

【七】昭容。漢の孝武の時に於ける女官の名なり。
四寶は筆紙墨硯。
【八】西子湖。西湖なり杭州に在り美景を以て著はる、蘇東坡の詩に欲把西湖比西子の句あり。

〔雁過聲〕〔鏡に照らし歎く介〕(九)輕綃にて鏡兒をば擘掠し、筆花尖にて淡く掃き輕く描く、影兒呵。

儞が和に細に評度せん、儞が(一〇)腮斗兒恁く喜謔す、則櫻桃を(一一)注し柳條を染めんと待す、雲鬟を渲り煙靄飄蕭す、眉梢青未だ了せずして、箇中の人全く秋波の妙に在り、可可的春山を淡くし鈿翠小なり。

【解說　右「儞が和に」以下は、小姐が鏡に對し自らその容貌を評しつつ描くなり、「喜謔」とは愛嬌あることを謂ふ、「櫻桃」云云の句は、紅綠の色を配することを謂ふ、「眉梢」以下二句は、眉未だ描き了らざるに、すでに眼の美くしさ紙面にあらはれたりとの意なり、「春山」とは眉なり、眉の色と翠色の小鈿との調和宜しとなり。】

〔傾盃序〕〔貼〕　笑ふに宜し、淡き東風に細腰を立て、又春の被に愁著せらるるに似たり。

〔旦〕

謝す半點の江山、三分の門戶、一種の人才、小小に、行樂青梅を撚り閑に廝調ぶ、湖山に倚り夢曉め、垂楊に對し風裊なり、忒だ苗條、斜に他(畫中の像)に添ふ幾葉の翠芭蕉。

【九】輕綃。輕き絹片。
擘掠は拭ふこと。
【一〇】腮斗兒。腮のあたり。
【一一】注、染、渲等は皆畫法なり。

春香よ、幢起來よ、可に廝像たる也。

【解說　「笑ふに宜し」より「似たり」までは春香が小姐の像を評したるなり、「謝す」以下「翠芭蕉」までは、小姐自らその畫を評するなり、「半點の江山」とは背景として描ける景色を謂ふ、「三分の門戶」とは、畫像の傍に描き添へたる屋門なり、「一種の人才」とは畫像を指す、「小小」は可憐なる姿態の意なり、以下その姿態を評する句なり。】

〔玉芙蓉〕〔貼〕　丹青の女は描き易く、眞色の人は學び難し、空花水月に似て影兒相照す。

〔旦喜ぶ介〕　畫的來り可愛き人なる也。

咳。

情知畫きて中間に到つて好く、再に別樣の嬌を生成するが似き有り。

〔貼〕　只少く箇の姐夫の身傍に在るを。

若是姻緣早く、風流の壻をば招かば、(三)什麼の美夫妻の圖畫碧雲の高きに在るを少かんや。

【解說　「空花水月」は孰れも其の影看るべくして其の體は握むべからず、畫像も亦斯の如し、「情知」云云は、描きたる畫は內面の精神までも寫し出だせりとの意、「什麼の美夫妻」云云は、若し此の畫像に一人の男子を描き添ふれば、此の美夫妻の像は麒麟閣上に掲ぐるに足る

【三】漢時功臣の像を描きて麒麟閣上に掲げたることあり、上文は其の故事を引く。

や必せりとの意、卽ち畫像に崇高なる品格有るを謂へり、原文「少什麼」は、「何の……を少かんや」との反語にして「充分なり」の意を有す。】

〔旦〕　春香よ、(三)咱儞を瞞かず、花園遊玩の時、咱に也箇の人兒有りき。

〔貼驚く介〕　小姐よ、怎的で這等の方便有りし呵。

〔旦〕　夢哩や。

〔山桃犯〕　一箇有りて曾て同笑せり、想像して生描著んと待し、再に(四)消詳して其中の妙に邈入す、則女孩家は怕る風情の稿を漏泄せんことを。

這の春容呵。

孤秋片月雲嶠を離るるに似、甚の(五)蟾宮の貴客か雲霄に傍的。

【解說　「再に消詳」云云は、再に仔細に其人(夢中の男)の姿を思ひ看るに、わが心は其人の妙なる姿の中に溶け込むやうなりとの意、「風情の稿」云云は、情事が他に漏れんことを恐るとなり、「孤秋」云云は一人の姿のみ描ける寂しき畫像に喩へたり、「甚の蟾宮」云云は反語にして、其の意は狀元に及第せるが如き佳壻の像を傍に描かんやとなり、卽ち「我には雙び

【三】咱不瞞儞。眞實を汝に告げんとの意。

【四】消詳。仔細に觀察するなり。

【五】蟾宮貴客。狀元及第の人に喩ふ、(第二齣參照)。

畫くべき人も有らねば、獨りの姿のみ描くとの意なり、（夢中の人は之を描かんも卻つて人の知るを怕るる故描くに由無し）。】

春香よ、記起來了、那の夢裏の書生は、曾て柳一枝を折りて我に贈りぬ、此れ他日適く所の夫姓柳に非ざる莫き乎、故に此の警報有る耳、偶ま一詩を成し、暗に春色を藏せり、（一六）幀首の上に題するは何如。

〔貼〕卻つて好からん。

〔旦・題し吟ずる介〕近く視て分明儼然たるに似たり、遠く觀て自在飛仙の若し、他年蟾宮の客に傍ふを得るは、梅邊に在らずんば柳邊に在らん。

〔筆を放ちて歎く介〕春香よ、也は古今の美女早く丈夫に嫁了相愛し、他が替に模を描き樣を畫ける有り、也は美人自家寫照して情人に寄與せる有り、我杜麗娘の似きは誰に寄せん呵。

【解說　「近く視て」より「柳邊に在らん」までは、小姐が題せる詩なり、「模を描き樣を畫く」とは像を描くなり。】

〔尾犯序〕〔旦〕心喜轉じて心焦、喜的は明妝の儼雅、仙珮の飄颻。

【一六】幀首。表裝の上部。

則怕るる呵。

俺をば年深く色淺く、（一七）箇の金屋藏嬌と當了、虛勞し、春容を寄するも誰をして淚落ちしめん、眞眞を做すも人の喚叫無からん、〔淚する介〕天を愁ふるに堪へんや、精神出現して後人に標を留與せん。

【解說　「俺をば」云云の「俺」は自像を指す、自像は年經れば必ず色褪せん、若し此のままに室內に深く藏せば、折角我が心を盡して描きたる像も、何等他人の同情を牽くこと無かるべしとの意なり、「金屋藏嬌」とは、ここにては大切に奧深く保存するの意に用ゐたり、「眞眞を做す」とは畫中の人活けるが如く眞に逼れるを謂ふ。】

春香よ、悄悄に那の花郎を喚び他に分付けん。〔貼叫ぶ介〕

〔丑・花郎に扮して上る〕（一八）秦宮一生花裏に活き、（一九）崔徽卷中の人に似ず、小姐何の分付有りや。

〔旦〕這の一幅の行樂の圖、（二〇）行家に向て裱し去り、人家（行家）をして好些收拾せしめよ。

【一七】漢の武帝太子たる時、長公主その女を以て帝に配せんと欲し、かつて帝に問ひて曰く阿嬌を好めるか否かと、帝曰く若し阿嬌を得ば金屋を以て之を領へんと。

【一八】秦宮。後漢の監奴なり、梁冀の妻孫壽と私有り、當時大に威權ありしといふ、後世秦宮を蝶に喩ふ、李賀の詩に秦宮一生花裏活の句あり。

【一九】崔徽。唐の河中の娼なり裴敬中と相愛す、かつて人に託し像を描きて敬中に贈り崔徽一旦不及卷中人、徽且爲卿死矣の語あり。

【二〇】行家。專門の職人をいふ。

【解說　「秦宮」云云二句は、花郎之を吟するなり、第一句は自己に譬へ、第二句は畫像に喩へたるなり。】

〔鮑老催〕　這の本色人兒妙なり、助美的は誰が家の裱ぞ、(二二)練花綃簾兒瑩き、邊闌小なるを要す、他をして人の問著有るも(二三)狐嘌すること休らしめよ、日炙風吹懸襯的ことを好くせよ、好物は堅牢ならざるを怕る、咱が巧丹青をば涴了こと休れ。

〔丑〕　小姐よ、裱し完了ば、安奉して那裏に在くか。

【解說　「這の本色」云云は、此の畫はありのままにして裝飾を加へずも大に可なりとの意なり、「邊闌」は畫の周圍を裝飾する絹片なり、「他をして」の他は裱具師を指す、此の畫に關して人が裱具師に何事か問ふことありとも決して人に語らしむ可からずとなり、「日炙」云云は裱裝の際はよく注意して日にさらされ風に吹かれざるやうにせよとの意なり、「好物は堅牢ならず」とは一般の諺にして、此の畫も好物なるが故に破れ易し、注意を要すとの意なり、「巧丹青」とは善き畫の意なり。】

〔尾聲〕〔旦〕　儘ら香閨に賞玩して人の到る無けん。

【二二】練花綃。絹布の名なり。簾兒は裱裝用の紙なり。
【二三】狐嘌。胡嘌なり、濫りに話すこと。

〔貼〕　這の形模は則合に　(二四)巫山の廟に挂くべし。

〔合〕　又怕る雨と爲り雲と爲りて飛去了ことを。

【解說　右の尾聲の大意は、此の畫を我が室内に掛け置くも我より他に見る人無からん、若し他の場所に掛くるとせば巫山の神廟に掛くるを適當とすれど、若し斯くすれば、巫山の女神の如く雲雨と爲りて飛び去らんとなり。】

眼前の珠翠心と違ひ、
卻つて花前に向ひ痛哭して歸る、
好んで　(二四)妖嬈を寫し與に看せしむ。
人をして　(二五)評泊せしめ楊妃を畫く。

【二四】巫山廟。神女の廟なり。
【二四】妖嬈。あでやかに媚めけること。
【二五】評泊。批評すること。楊妃は唐玄宗の妃楊貴妃なり。

第十五齣　(一)虜諜

〔一枝花〕〔淨、番王に扮し衆を引て上る〕天心(二)遼を起滅了、世界(三)趙を平分了、(四)靜鞭兒替了胡笳の哨るに、鼓を擂ち鐘を鳴らす、看るに文武の班齊しく到れり、(五)骨碌碌と南人笑はん、則箇の鼻凹兒蹻く、臉皮兒黧く、毛梢兒皺る。

【解說　「天心」云云は、天の心を以て遼國を起しまた之を滅したりとの意、卽ち遼の興亡も天意に因れるを謂ふ、「世界」云云は、趙氏（宋）の世が分裂したる意なり、「靜鞭兒」云云は、今日までは毎日胡笳を軍中に聽きしが、今日は頗る太平の趣有りとの意なり、「則箇の」以下三句は金人の容貌の醜なるを謂ふ、容貌醜なるが故に南人（宋人）之を笑ふなり。】

萬里の江山萬里の塵、一朝の天子一朝の臣、俺が北地怎で日月を禁沙し、南人偏に占めん錦乾坤、自家は大金皇帝(六)完顏亮是れ也、

【一】虜。えびすなり、金人を稱す、諜は偵察なり、金主が宋の狀を偵察せしむること。
【二】遼。國名なり、金に滅ぼさる。
【三】宋の姓は趙なり。
【四】靜鞭兒。儀仗に用ゐるものなり、又鳴鞭といふ、之を響かせて人に靜肅を示す。
【五】骨碌碌。笑ふ聲。
【六】完顏。姓にして亮は名なり。
夷虜は外國人、卽ち異民族。

身夷虜と爲り、性(七)風騷を愛す、俺が祖公阿骨都南朝の天下を搶了、(八)趙の康王走つて杭州に去り、今又二十餘年矣、聽得ならく他杭州を粧點し、(九)汴梁の風景に勝似と、一座の西湖、朝歡暮樂、箇の曲兒他（西湖）を說へる有り、「三秋の桂子十里の荷花」と、便ち兵百萬を起さんと待す、呑取何ぞ難からん、兵法は虛虛實實、俺箇の南人を用ゐて我が爲に鄉導せしめんと待す、喜に他(一〇)淮揚の賊漢李全は、萬夫不當の勇有り、他心俺に順溜せり、俺先づ他を封じて溜金王の職となし、他に三年の內を限り、兵を招き馬を買ひ、淮揚地方を騷擾せしめ、機を相して行き以て征進の路を開かん、哎喲、俺西湖の上に散悶兒するの巴不到也。

【解說　「俺が北地」云云は、我が領土たる北方は何故に天惠の薄きやとて慨歎するなり、「禁沙」とは禁殺なり、止め阻むことを意味す、「南人」は宋人を指す、「錦乾坤」とは華麗なる天地の意にして、南方繁華の地を謂ふ、是れ北方索莫の地に居て南方の華麗を羨むなり、「他杭州を粧點し」は、宋の高宗が抗州の景致に人工を加へたるをいふ。】

〔北二犯江兒水〕〔淨〕天道を平分す、是れ天道を平分すと雖則、高頭は俺に偏りて照らす、俺が

【七】風騷。風流文雅の事。
【八】南宋の高宗帝はもと康王なりき、趙は宋の姓。
杭州は今の浙江省に在り。
【九】汴梁。今の河南省開封なり、宋もと此處に都す。
【一〇】淮揚。今の江蘇省南部地方。
【一一】順溜。服從するなり。

(二)司天臺那の南朝を標著、他那答兒の好きを標著。

〔衆〕　那答裏か好き。〔淨笑ふ介〕

(三)儞說ふ　西子怎に嬌嬈なると、西湖上に向つて笑つて蘭橈に倚著。

〔衆〕　西湖は俺が這の(四)南海子北海子の大有る麽。

〔淨〕　周圍三百里。

波上に花搖れ、雲外に香飄ひ、明夜と無く錦笙歌園り醉遶る。

【解說　「天道を平分す」とは天下を分有することを謂ふ、「高頭」とは太陽を謂ふ、此句は、天は多く余に幸運を授くとの意なり、「儞說ふ」以下二句は、西湖の美くしさを述べたるなり、古の美人西施は汝等も如何にその美なりしかを知らん、その美なる西子が欄杆に倚りて眺めたりといふ西湖は何ぞ佳ならざらんやとて、西湖を有する南朝を羨めるなり、金主の部下は西湖の大さを知らざる故、之を宮中の小湖に比して問ひたるを以て金主は西湖は周圍三百里ありと答へたるなり、「波上に」以下は西湖に於ける行樂を叙したり。】

〔衆〕　(五)萬歲爺他を借り來つて要要。

【三】司天臺。天文臺。
【三】西子。越の美人、吳王の妾と爲る。
【四】南海子北海子。孰れも宮城内の湖名なり、此の時金主は汴京に在り。
【五】萬歲爺。天子に對する稱呼なり。他は西湖を指す。

〔淨〕　已に潛れて畫工を遣はし偷に他の全景を將ち來了、那の湖上に吳山第一峰有り、俺馬を其上に立つるを畫けり、俺好に狠らざらん也。

吳山の最高、俺馬を立てて吳山の最高に在らん、江南低小、看見了江南低小なるを。〔舞ふ介〕

俺怕る場兒を占めて一箇錦西湖に(六)上馬嬌を砌かざるを。

【解說　「俺怕る」云云は、余は其地(杭州)を占領して美くしき西湖の畔に余が騎馬せる像を建て得ざらんことを怕るとなり、卽ち早く杭州を占めんとの志を謂へり。】

〔衆〕　萬歲爺に奏す、怕らくは急に西湖に到ること能勾はざらん、何方に駐駕するか。

〔北尾〕〔淨〕　呀、急切に畫圖中の匹馬西湖を把つて哨くを要す、且つ迤邐的花を看て洛陽の道に向はん。

我呵。

少不的趙の康王の剩水殘山をば都て占了。

【解說　「急切に」云云は、余が豫め描かしめたる畫が速かに實現せんことを要すとの意、卽ち西湖に至らんとの意なり、「剩水殘山」とは、南方に僅かに殘れる宋の領土を謂ふ。】

【六】上馬嬌。もと婦人の裝飾の名なるが、上文にては騎馬せる美くしき像の意。

線大の長江扇大の天、
旌旗蕩拂して雁行偏なり、
勝ふ可し江南の酒を飲み盡すに、
山川を交割して直に燕に到る。

第十六齣　(一)詰病

〔三登樂〕〔老旦上る〕　今生怎生なれば、偏則に是れ紅顏薄命ならん、眼見的に(二)孤苦伶仃。

〔泣く介〕

掌上の珍、心頭の肉、淚珠兒暗に傾る。天呵。

偏に人家は(三)七子團圓し、一箇の女孩兒は廝病む。

【解說　「今生」云云は、人世は何故に紅顏の美女薄命ならんとて、杜寶の妻が小姐の病に罹れるを悲しめるなり、「掌上の珍」とは手の中の珠にして、「心頭の肉」とは胸の肉なり、是れ孰れも熱愛せる小姐に喩へたり、「偏に」云云二句は、昔は七人の孝子を有てる人さへありしを、我は一人の女のみにして、それさへ今は病めりとて悲める意なり。】

〔清平樂〕　花の如く嬌怯し、合に天の饒借を得べきに、風雨花に於て生分劣しく、作意に十分凌藉す。止だ堪ふ深閣重簾、誰か月榭風簷を敎へん、我髮短く廻腸寸斷し、眼昏み眵淚雙淹

【一】詰病。病の原因を詢問するなり。
【二】孤苦伶仃。孤獨にて寂しきこと。
【三】七子。詩經の凱風に出づ七人の孝子なり。

す、老身年將に(四)半百ならんとし、單一女麗娘を生めり、何に因りてか一たび病みて、起倒半年、他が舉止容談を看るに、風寒暑淫に似ず、中間の緣故は、春香必ず知らん、則他に問はば便了、春香(五)賤才那裏ぞや。

【解說　「風雨」云云二句は、風と雨とは元來の性質惡劣なるに因りて、花に對して暴虐なる振舞を爲すとの意なり、玆に花と謂へるは小姐にして、風雨は病に喩へたるなり、「止だ堪ふ」以下二句は、やうやく深閨の內に起居するに堪ふる程のか弱き女なるに、室外月照り風吹く場所に出でしめたるは果して誰の業ぞやとて、小姐が花園に遊びて病を得たるを悲しむ意なり、「髮短く」「眼昏み」等は年老いたる意なり、此の二句は、身老い悲みに遭へるを叙べたるなり、「起倒半年」とは病に因りて起臥すること半歲に迨べるの意なり、「風寒」云云は、感冒暑氣中り等の病とは異なるとの意なり。】

〔貼上る〕　有哩、我眼裏に(六)乖小使に逢はず、掌中に箇の病多嬌を擎著、知るを得たり堂上夫人の召すは、賸酒殘脂咱が(七)消するを要するを、春香叩頭す。

【四】半百。五十なり。
【五】賤才。人を罵る語、上文は立腹して春香を罵り呼ぶなり。
【六】乖小使。美男子の意。病多嬌は病める美女卽ち小姐なり。
【七】消。受くるの意。

〔老旦〕　小姐は(八)閑常好好的に、纔かに儞賤才をして他に伏侍せしめ、半年に上らずして、偏是病害ふ、惱む可し惱む可し、且つ問ふ近日茶飯多少ぞや。

【解說　「我眼裏」以下二句は、我は一の美男子さへ見ずして、常に病女にのみ附添へりとの意、「賸酒」云云は、夫人の我を呼べるは、お餘りの食事を我に與へん爲ならむとの意なり、「春香叩頭す」とは春香が老夫人に對し敬禮しつつ云ふ挨拶の語なり、「閑常」云云より「病害ふ」までは、小姐は平素健康なりしが、儞が小姐に附添ひ、やうやく半年になるやならずして病に罹れりとて不平を叙ぶるなり。】

〔駐馬聽〕〔貼〕　他茶飯何ぞ曾てせんや、所事兒は休提叫べども譬ふるに懶し、他を看るに嬌啼隱忍し、笑譫迷厮し、睡眼懵憧す。

〔老旦〕　早早に(九)太醫に禀請了。〔貼〕則除是れ(一〇)八法針にて、輭緜の情を針斷せん、怕らくは(一一)九還丹も、腌臜の證を丹不的。

〔老旦〕　是れ什麼の病ぞや。

〔貼〕　春香は知らず。

【八】閑常。平素なり。
【九】太醫。官醫なり。
【一〇】八法針。針醫術の一種。
【一一】九還丹。九轉金丹なり、貴重なる仙藥なり。

他一枕秋清しと道へど、卻るに怎生還是れ春前の病を害的ぞ。

【解說　「所事兒」云云は、小姐は仕事等（手に著かざるは）は勿論、呼びて答ふることすら厭へりとの意、「嬌啼」云云三句は、泣く時すら聲をしのび、物言ひ笑ふ時すら心はうつとりとして取止めなきが如く、氣力なき眼光またぼんやりとせりとの意なり、「則除是」以下四句は、彼女（小姐）の病を醫せんとせば、或る方法を以てその病の原因を除去すべく、藥にては如何なる良きものも此の病を治する能はずとの意なり、「八法針」とは針術の名なれども茲にては最も良き方法との意に喩ふ、而して「針」字は直ちに次句の「針斷」に於ける「針」字を引き出だし、「九還丹」の「丹」字はまた次句の丹不的の「丹」字を引き出だせり、「輭緜の情」とは弱弱しき心、戀になやめる心を謂ひ、「腌臜の證」とは穢らはしき病、邪病を謂ふ、「針斷」の二字は、「輭緜」の二字に因りて妙深く、「丹不的」の三字は、「腌臜」の二字に因りて巧なり、要するに醫師の手にては戀の病は癒らぬとの意を表はしたるなり、「一枕」云云以下は、小姐は此の秋季に枕に伏しながら、何故に春の病をわづらへるかとの意なり。】

〔老旦哭く介〕　怎生了。

〔前腔〕　他一搦の身形、瘦的麗兒は（一三）四星沒了。

【一三】四星。秤の目もりの第四星、秤の最端に在り、故に四星は全部の意なり。

都是（一四）小奴才の他を逗へるなり。

大古より（一五）是れ煙花事を惹し、（一六）鶯燕招を成し、雲月情を知る。

賤才還跪かず、家法を取來。

〔貼跪く介〕　春香實に知らず。〔老旦〕何に因り玉娉婷を瘦壞了か、爾怎生して他が嬌情性を觸損了か。

〔貼〕　小姐好好的花を拈み柳を弄べり、甚に因りて病了かを知らず。

〔老旦惱み貼を打つ介〕　爾這の（一七）牢承背骨稜的して狐に遮映するを打たん。

【解說　「一搦の身形」とは、すらりとしたる身體なり、「麗兒四星沒了」とは、容姿全然見るかげも無しとの意なり、「大古より」以下は、古來無恥なる女子が不吉なる事の原因を爲すこと多しとの意、是れたしなみ無き春香が小姐を誘惑せるを恨みたる語なり、「賤才」云云は、汝此の下司め、尙起立のまま我に答ふるは横著なり、家法によりて呵責せんとの意なり、「玉娉婷」とは、美人の意にして小姐に喩ふ、何故美人を瘦せ細らしめたるかとて恨むなり、「嬌情性」とは、素直にして愉快なる性質の意なり、此句、何故に小姐が心をくらく不愉快な

【一三】小奴才。小なる僕婢なり春香を指せり。
【一四】煙花。花柳界なり。
【一五】鶯燕。娼妓なり。
【一六】牢承。强く抗辯して下らざること。
遮映。掩ひかくすこと、秘密を自白せざるなり。

らしめたるかとなり。】

〔貼〕 夫人よ手を閃了を休めて、春香の訴來を容せ、便是那一日花園に遊び回り來り、夫人の(一七)掃到せる時節、說く箇の秀才手裏に柳枝兒を拈り、小姐の題詩を要めぬ、小姐說ふ「這の秀才素平生に昧し、也他の和に題了せず」と。

〔老旦〕 題せずば罷了、後來は。

〔貼〕 後來那の那の、秀才は就ち一拍手して小姐をば(一八)端端正正に牡丹亭上に抱在去了。

〔老旦〕 去きて怎的せしか。

〔貼〕 春香怎でか知るを得ん、小姐夢を做哩。

〔老旦驚く介〕 是れ夢麼。

〔貼〕 是れ夢なり。

〔老旦〕 這等ならば著鬼了、快く老爺を請じて商議せん。

〔貼請ふ介〕 老爺有請。

〔外上る〕 (一九)肘後の印・金帶の重きを嫌ひ、掌中の珠・玉盤の輕きを怕る。

【一七】 撞到。訪ひ來る（小姐の室へ）なり。

【一八】 端端正正。整然たること。

【一九】 古時の官人は印を手頸に掛けたり、是れ隨時用ゐるに便ならしめんが爲なり、然るに之を肘後に掛くるは印の不用なる時なり、乃ち辭職の意なり。

夫人よ、女兒の病體何に因れるか。

【解說 「肘後」云云二句は對句にして、第一句は官を辭し度きの希望を叙ぶ、高官の正裝は金帶を用ゐるものなるが、その重きを嫌ふは乃ち辭意あるなり、「掌中の珠」は小姐に喩ふ、「玉盤の輕きを怕る」とは、小姐の瘦せて病深きを憂ふとの意なり。】

〔老旦泣く介〕 老爺講ふことを聽け。

〔前腔〕 說起めて心疼む、這の病は是れ怎生なるを知他んや、看るに他長眠短起し、笑ふが似く嗔くが如く、影有りて形無し。

原來女兒は後花園に到りて遊了、夢に一人手に柳枝を執り、他を閃了去るを見たりと。〔歎く介を作す〕

怕らくは腰身柳の精靈に觸汚了、虛囂花の神聖を側犯了ならん。

老爺呵。

急に與に(二〇)禳星せん、流星月を趕うて相刑逆するを怕る。

【解說 「長眠短起」は多く臥床して起き出づること少きなり、「腰身」云云は、身は柳樹の妖精に汚されたるならんとの意、「虛囂」はかしましきこと、淫聲が花の神聖を犯したるならん

【二〇】 禳星。凶星を祀り拂ふこと。

との意なり、卽ち小姐の耳に淫りなる聲の入りたるを謂ふ、「流星」は凶星なり、「刑迸」は傷害するの意、卽ち凶星の來りて害を與へんことを怕るるなり。】

〔外〕 卻つて還來れり、我陳齋長を請じて書を敎へしめたるは、他が身心を拘束せんと要せしなり、儞爲母親的が、倒つて他の閑游を縱せり。

〔笑ふ介〕 則是些日炎風吹き、傷寒流轉す、便や(二二)禳解を要すとも、師巫を用ゐず、則(二三)紫陽宮の石道婆を叫び、些の經卷を誦せしめば可矣、古語に云ふ、巫を信じて醫を信ぜずんば一に治せざる也と、我已に陳齋長を(二四)請過して他(小姐)が脈息を看に去了。

【解說 「卻つて還來れり」とは、またもや斯樣なことに爲つたとの意なり、「炎風」云云二句は、氣候不順にて熱風吹き或は感冒流行すとの意なり、女の病も是れ實は天氣不順の爲にして別に惡妖に觸れたるものに非ざるべければ、敢て大袈裟に祈禱者を招かずとも石道婆に祈禱せしめば可ならんとの意なり。】

〔老旦〕 甚の脈息をか看ん、若し早く人家有了、敢這の病氣沒からん。

【二二】 禳解。祈りて邪氣を拂ふこと。
師巫は祈禱者。
【二三】 紫陽宮。道敎寺院の名。石は姓にして道婆は道敎の女道士なり。
【二四】 請過。請は呼び來ること過は動詞に屬する助字なり、通常過去の意を有す。

〔外〕 咳、古者は男子三十にして娶り、女子二十にして嫁せり、女兒點點の年紀にて什麼を知道んの呢。

〔前腔〕 忒だ恁なる憨生、一箇の哇兒甚の(二五)七情ぞ、則往來の(二六)潮熱、大小の傷寒、急慢の風驚に過ぎじ。

則是儞爲母的呵。眞珠を掌中に放在て擎げず、此に因りて嬌花這の心頭の病を奈んともせず。〔泣く介〕〔合〕

(二六) 兩口丁零。天天に告ぐ。半邊兒は是れ咱が全家の命なり。

【解說 「若し早く」云云以下は、若し早く小姐の爲に良人を定め結婚せしめ置きしならば、今日此病に罹らざりしならんとの意なり、「忒だ」云云は、何といふ馬鹿者ぞやの意、「一箇の」云云は、一箇の幼女たる者何ぞ一人前の情(戀愛)を解せんやとの意なり、「則往來の」云云以下は、杜寶想ふに小姐の病は、普通の微恙に過ぎずとなり、熱にさしひき有り之を「往

【二四】 七情。喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲を謂ふ、上文にては戀愛の情を意味す。
【二五】 潮熱、傷寒、風驚。孰れも病名なり。
【二六】 兩口。夫妻なり、杜寶夫婦を指す。

來」といふ、「傷寒」に重きと輕きとあり、是れ「大小」と謂ふ所以なり、「風驚」は驚風なり急性と慢性とあり、故に「急慢」といふ、往來大小急慢等の文字は殆んど文飾に過ぎず、是を以つて曲詞に合せたるものなれば深く字義に拘泥せずして可ならん、「眞珠を」云云は、汝(妻)が彼女を注意深く養育せざりしため彼女は遂に心の中に病を得たりとの意なり、「雨口丁零」とは杜寶夫婦の寂寞なることを謂ふ、「半邊兒」は半面なり、一家の半面は父母にして他の半面は兒なり、小姐は卽ち半面にして且つ全家の性命は託して彼女の上に在り、小姐無くんば杜家は斷絶すべし。【二七】

【丑】(二八)院公に扮して上る」　人來る(二八)大庾嶺、船去る(二九)鬱孤臺、老爺に稟す、使客の到れる有り。

【尾聲】【外】俺官爲り、公事は期程有り、夫人よ。好く女兒の身命を看惜せよ、少不的人秋風に向はば病骨輕からん。

【二七】院公。執事なり。
【二八】大庾嶺。江西と廣東の境なる山にして又梅嶺といふ。
【二九】鬱孤臺。江西の賀蘭山に在り。

柳東風を起して病身を惹き、
擧家相對して卻つて巾を沾す、
徧く仙法に依り多く藥を求め、

會まま(三〇)蓬山不死の人に見ゆ。

【外丑下る】

【解說　「人來る」云云二句の對句は、院公が使者の來れるを主人に報ずるが爲登場する際に吟む句にして、「人來る」と云はんが爲の句なり、深き意義なし、然れども後に柳生の來ることと、杜寶の去ることとに多少の關する所無きに非ず、「人秋風」云云は秋深くならば病も快癒せんとの意なり、下場の詩は杜寶の下場するに當りて之を吟ず、本齣の如く下場の詩有りて後にまた白あるは稀なる形式とす。】

【老旦貼弔場の介】　官無ければ一身輕く、子有れば萬事足る、我看るに(三一)老相公は則往來使客の爲に、女兒の病をば都て瞧ず、好に懷を傷ましむる也。【泣く介】　想起來、(三二)一邊に石道婆を叫びて禳解せしめ、一邊に陳教授をして下藥せしめん、效驗如何を知他んや、正に是れ、世間只有り娘の女を憐むを、天下能く卜と醫と無からんや。【下る】

【解說　「官無く」云云の對句は、官たるの煩累多きを嫌ひ、子孫有ることの幸福なるを羨む

【三〇】蓬山。蓬萊山なり、仙人の居る處といふ。
【三一】老相公。杜寶のこと、相公は敬稱なり。
【三二】一邊。「一方に於て」との意。
下藥とは投藥なり。

意なり、終末の對句「世間」云云は、女を憐れむ母（我）ここに在れば、女の病を治すべき卜（祈禱者）と醫と無きことはあらじとなり。】

第十七齣　(一)道　覡

〔風入松〕〔淨　(二)老道姑に扮して上る〕　人間嫁娶奔忙に苦しむは、只陰陽有るが爲のみ、天天に問はん、從來人身の相を具せず、只得道に來りて男妝に扮す、屈指すれば四句の上に有り、人生に當り夢一場。

【解說　「人間」云云二句は、世に陰陽あるが爲、人間は結婚問題にその一生を勞すとの意なり、「天天に問はん」は天を怨む意なり、「天天」と重ねたるは曲の形式に因れるものにして別に深き意義無し、「從來」云云二句は、普通の婦人の身體を具へざるが故に已むを得ず男子の如く裝ひて道士と爲れりとの意なり、「屈指」以下二句は、四十年の歲月夢の如く過ぎたりとの意なり。】

〔集唐〕　(三)紫府空歌碧落寒し、竹石山の如くして敢て安かず、長恨す人心石に如かず、佳處に逢ふ毎に便ち開看す。貧道は紫陽宮の石仙姑是れ也、俗家は原姓石ならず、則生れて(四)石女爲

【一】道士の祈禱なり。
【二】老道姑。老いたる女道士。
【三】紫府。紫宮なり、道教に謂ふ所の神仙の宮殿なり。碧落は天空なり。
【四】石女。婦女たる身體の完全ならざる者なり。

り、人の棄つる所と爲れるに因り、故に石姑と號す、思想起來、還俗せんと要せば、百家姓上に俺が一家有り、出身を論せば、千字文中に俺が數句有り。

【解說　「紫府」より「開看す」迄は唐人の詩句を集めて一絕句と爲したるものにして、道姑が白の前に之を吟ずるなり、「竹石」云云は、園中竹石の佈置優雅にして俗人の敢て佈置し得ざるの意なり、卽ち此の二句は道觀の森嚴なるさまを叙したり、「俗家は」云云は、俗人なりし時の姓は石と呼べるに非ずとの意なり、「還俗」云云二句は、我若し還俗すれば、百家姓中にも我が姓（石）は列記しありとの意、百家姓とは支那に於て村塾等にて先づ童子に文字を敎ふる時に用ゐるものにして、支那人の姓を集めたる書なり、「出身」とは身の經歷を謂ふ、千字文の中に我が經歷ありとの意なり、以下は專ら千字文中の句を用ゐて、其の經歷を叙す。】

【五】是れ千字文の句なり、以下千字文の句はすべて『』を附して之を明かにせり。

天呵、是れ俺(五)「求古尋論」するに非ず、恰も正に是れ『史魚秉直』なり、俺何に因りて這の『樓觀飛驚』に住在し、打併的『勞謙謹敕』なるか、脩行を看るに『福緣善慶』に似、因果を論ずれば是れ『禍因惡積』にして、甚麼の『榮業所基』有らんや。

【解說　右の白は前に續ける白にして、此の一段より後は隨處に千字文の句を用ゐて、道姑

が經歷を述ぶ、此の一節に用ゐたる千字文の句は一氣に百十句に及び、後に又六句あり、卽ち千字文の總句數の約半數は之を玆に引用したるなり、是れ一種の文字の遊戯に過ぎざれど、また以て作者が文才を見る可し、但し玆に引く所の千字文句は主として文句中の或る意味を假用したるものなれば、千字文の原意とは其の解釋を異にするもの多しと知るべし、「天呵」とは、天に對して歎息するなり、「是れ俺」云云は、昔の事を云ふわけではないがとの意、「正に是れ」云云は、正直に飾無く述べんとの意なり、「樓觀」云云は、道觀(道敎の寺院)を謂ふ、「勞謙」云云は、眞面目に修行せること、「修行」云云は、修行して幸福あるが如しとの意、「因果」云云は、因果より言はば我には惡因緣ありとの意、「甚麼の」云云は、毫も光榮とすべきもの無きを云ふ。】

〔譯者曰、これより以下原文にて八百十七字は、石女にして歸嫁せしが交合不能なる爲め、止むなく夫に蓄妾を勸めたることを寫せり。文中往往褻意ある爲め遺憾ながら之を省けり。因て以下は直に妾を置きたる後の事なり。〕

後來當眞に一箇を討了、多時沒くして做小的は『寵增抗極』し、反つて俺爲正的を撚去りて『率賓歸王』す、他を怨まざらんや、只『省躬譏誡』して、家を出了罷と、俺則『垂拱平章』せり。

【解說　「寵增」云云は、寵を恃んで正妻に抗するの意、「率賓」云云は、家中の人人を皆自己の味方として主人に歸屬し、正妻を他人扱ひすることなり、「省躬」云云は、自から觀念すること、「垂拱」云云は、その爲すがままに任すとの意なり。】

若し這の道院の裏を論せば、昔年也甚だ『宮殿盤鬱』ならざりき、老身に到り纔めて『宇宙洪荒』を開闢了、(六)眞武を畫き『劒號巨闕』、北斗を步み『珠稱夜光』、香を奉り『果珍李柰』を供し、齋素を把るも也是れ『菜重芥薑』なり、世間の味は『淫鹹河淡』を識得破、人中の網は逃得出『鱗潛羽翔』なり。

【解說　「昔年」云云は、以前には宮殿壯嚴ならざりしを謂ふ、「老身に到り」云云は、我此の道院に來りてより後、整頓して面目を改めたりとの意、「眞武」云云以下二句は、道院の神像を壯美にしたることを謂ふ、「果珍」云云は各種の果實に喩へ、「菜重」云云は、各種の蔬菜に喩ふ、「世間の味」云云は、世情の辛酸を嘗めつくせりとの意、「人中の」云云は、俗世間を脫出するの意なり。】

俺這に家を出了呵、那の幾年前の做新郎的の臭黏涎をば『骸垢想浴』し、俺卽世裏に做老婆的の(七)乾柴火をば『執熱願涼』せり、則惜む

【六】眞武。玄武なり、北方の神の名。
【七】乾柴火。情慾に喩ふ、火を移し易きなり。

可し(八)觀主と做るもの『遊鵾獨運』し、也(九)知觀的の『顧答審詳』を要し、(一〇)赴會的は都て『具膳餐飯』を要め、(一一)行脚的は『老少異糧』を要む、怎生觀中再に箇の人兒沒く、也都て則是『沈默寂寥』にして、全く『牋牒簡要』を會くせず。

【解說　「骸垢」云云は、不潔を除去せんと欲すること、「執熱」云云は、熱を冷ますこと、卽ち情火を滅する意なり、「遊鵾」云云は廟中の事を處理せずして悠遊するの意、「顧答」云云は、諸事に當るの意、「具膳」云云は、食事に喩へ、「老少」云云も亦是れ食事に喩ふ、「沈默」云云は、さびしきこと、「牋牒」云云は、文筆の意なり。】

俺老將來『年矢每催』し、鏡兒の裏『晦魄環照』す、硬ひても(一二)仕女の圖『馳譽丹青』に配不上、也仙眞の傳を接得著と要し『堅持雅操』す、『東西二京』に雲遊することを懶り、端一味『坐朝問道』す、(一三)女冠子幾箇の『同氣連枝』有れど、(一四)騷道士他と與に『工顰妍笑』せず、他暗地の虎『布射遼丸』を怕了、則寒水の魚を守著『釣巧任釣』す、使喚的は只一箇の『猶子比兒』にして(一五)癩

【八】觀主。道廟の住持なり。
【九】知觀的。道廟の執事職。
【一〇】赴會的。俗家に讀經に行く者。
【一一】行脚的。各地を遊行する道士。
【一二】昔唐の周昉は士女の圖を畫きたり、士女は官人の女子なり、士女は仕女に同じ。
【一三】女冠子。女道士。
【一四】騷道士。破戒の道士。
【一五】癩頭黿。鼈の一種なり、上文にては人の綽名。

頭鼈と叫做、『愚蒙等誚』なり。

【解說　「年矢」云云は年老いて便所に通ふこと度度なること、「晦魄」云云は老姿の映ずる意、「馳譽」云云は、光榮ある繪畫なり、「堅持」云云は道心を堅固に持すること、「坐朝」云云は、廟内に在りて道を修むる意、「同氣」云云は共に道士たるものを謂ふ、「工顰」云云は嬌態を作すの意、「暗地の虎」は暗暗の中に人を害するの意、「布射」云云も亦暗に人を指彈するの意なり、此の句にて「他」とは暗に人を傷くる者（騷道士）を指せり、「則寒水の」一句は、他は他の爲すに任せ我は道を守らんとの意なり、「猶子」云云は茲にて甥を謂ふ、「愚蒙」云云は、愚鈍なりとの意なり。】

【内】　姑娘俺を罵哩、俺は是れ箇の妙人兒なり。

【淨】　好に羞ぢざらんや、『殆辱近恥』、到つて誇奬す儞『並皆佳妙』なりと。

【内】　杜大爺の皁隷姑、娘を拏哩。

【淨】　爲甚麼か。

【内】　說ふ儞は是れ箇の賊道なりと。

【淨】　咳、便や那の（一六）府牌來り、『杜藁鐘隷』、俺をば女妖と做して看、『誅斬賊盜』すとは道へ、

【一六】府牌。府署にて發する拘引狀。

俺可も也『散慮逍遙』す、儞の這般なる『虛輝朗耀』を用ゐず。

【解說　「殆辱」云云は恥づ可しとの意なり、「並皆」云云は、すべて賢明なりとの意なり、「賊道」とは邪惡なる道士を謂ふ、「杜藁」云云は府牌の上に書せる威嚴ある文字に喩ふ、（漢の杜度の草書と晉の鐘繇の隷書）「誅斬」云云は賊を斬るの意なり、「散慮」云云は、掛念せざること、「虛輝」云云は、虛言を以て人を赫すこと、「便や那の」以下の意は、假に拘引狀の文字に我を惡人なりとし我を斬罪に處すと書きありと汝云ふとも、我は怖れず、汝は我を嚇す勿れとの意なり。】

【丑】（一七）府差に扮して上る」　差を承く府堂の上、名を提す仙觀の中。

【見ゆる介】

【淨】　（一八）府牌哥何の爲に來れるか。

【大迓鼓】【丑】　府主黃堂に坐し、夫人傳示し、衙内梆を敲く、小姐年多長なるを知他んや、一疾に染むこと半年光なり。

【淨】　俺は（一九）女科に不是。【丑】

請ふ儞齋を修し、一會（二〇）祈禳せよ。

【一七】府差。府署の役人。
【一八】府牌哥。府牌を持ち來れる者に對する稱呼、哥は若者に對する低級なる敬稱。
【一九】女科。婦人科の醫師。
【二〇】祈禳。祈りて邪氣を拂ふなり。

【解說　「名を提す」云云は、道觀中より人を呼び出すとの意なり、「府主」は太守を謂ふ、黃堂は太守の府署なり、「夫人」云云は、夫人が太守の言を傳ふるの意なり、「梆を敲く」は拍子木を敲くなり、「半年光」は、半年なり。】

〔前腔〕〔淨〕　俺仙家に禁方有り、小小の靈符、帶びて身傍に在り、他をして刻下に人恙無からしめん。

〔丑〕　這等なる靈符有らば、快く些しく行動せよ。〔行く介〕

〔淨〕　童兒を叫ばん。

〔內應ふる介〕〔淨〕

好く(二二)臥雲房を看守せよ、殿上人無し、鐙香を仔細にせよ。

〔內〕　知道了。

(二三)紫微宮女夜香を焚き、
古觀雲根路已に荒る、
猶(二四)眞妃(二四)長命の縷有り、
九天事無し推忙する莫かれ。

【二二】臥雲房。淫姑の居室の名なり。
【二三】紫微宮。天帝の座なり、上文にては道觀を謂ふ。
【二三】眞妃。道教の一女神也。
【二四】長命縷。五月五日に五色の絲を臂に繫きて病を避くるものなり。

【解說　「人恙無からしめん」とは小姐の病を癒やさんとの意、「鐙香」云云は、燈香等に注意せよとの意なり。】

第十八齣　(一)診祟

〔一江風〕〔貼、病旦を扶けて上る〕　病みて迷厮す、爲甚に輕く憔悴するか、愁魂謎を打不破して夢初めて回り、燕尾風に翻りて湘簾の翠を亂颯起す、春去りて若多時、春去りて若多時、花容只顧衰へ、井梧の聲我が心兒を刮的て碎く。

〔行春子〕〔旦〕　春香呵、我が楚楚たる精神、葉葉たる腰身、能く多病逡巡に禁へんや。

〔貼〕　儞星星の措與、種種の生成、許多の嬌、許多の韻、許多の情有り。

〔旦〕　咳、這の弄梅の心事、那の折柳の情人、夢淹漸り暗に殘春に老ゆ。

〔貼〕　正好篁爐香午にして、枕扇風清し、誰が爲に顰し、誰が爲に瘦せ、誰が爲に疼むを知らんや。

【解說　「行春子」は詞の名なり、「星星」は種種なり、「措與」は賦與なり、小姐の身には天より種種の特別のものが與へられ居るの意なり、卽ち普通の女子と異なるなり、「種種の生成」

【一】診祟。邪病を診察すること。

は上句と其の意畧同じ、「弄梅の心事」とは、春間梅花を手にして起したるの情なり、梅は暗に柳夢梅に關す、「篁爐」云云二句は、眞晝に枕許の香煙けぶり、臥して用ゐる扇の風涼しきを謂ふ。】

〔旦〕　春香よ、我春遊一夢してより、病に臥し、如今は癢からず疼からず、癡の如く醉へるが如く、怎生すべきを知他んや。

〔貼〕　小姐よ、夢兒の裏の事、(二)他を想ふも則甚ん。

〔旦〕　儞我をして怎生してか想はしめざらん呵。

〔金落索〕　(三)他を貪りて半晌癡に、多情を(四)賺了泥、思量せざらんと待するも怎で思量せずして得んや、(五)就裏暗に肌を銷し、人の知るを怕る、嗽腔腔と嫩喘微かなり。

哎喲。

我が這の慣に淹煎的樣子は誰か憐惜せん、自ら噤窄的春心は怎的して支へん。心兒悔ゆ、悔ゆ當初一覺春を留めて睡りしを。

〔貼〕　老夫人小姐の替に沖喜せん。

【二】他。夢中の男を指す。
【三】他。夢中の男を指す。
【四】貪はむさぼり思ふこと。
【五】泥。助字なり、呢に同じ。就裏。內部の意。

〔旦〕

他が箇の甚の喜を沖的を信せんや、年時に到的らば、敢花園内を(六)犯殺せん。

【解說　「一覺は」一度の睡眠なり、「沖喜」とは病人が婚を爲すことなり、是に因りて病を除かんとするなり、「年時」云云以下は、我が婚するに適當なる齡に於て、花園内はすべて方角が惡しとして我を止め我が好事を破らんとの意、卽ち母は我が爲に壻を求むる等の事につき目下何の考ふる所だに無し、むしろ我が花園に到りて情を起すを恐れ極力之を防止せんとせりとの意なり。】

〔前腔〕〔貼〕　看るに他春歸るも何處にか歸らん、春睡るも何ぞ曾て睡らん、氣一絲兒怎でか長天日を度的、心兒をば捧げて眉を湊む、(七)病西施。

小姐よ。

夢去つて實實なるを知他んや、誰か病み來つて只箇の虛虛的に送的や、儞行雲と做り先づ渴し倒つて(八)巫陽に在つて會すとは、全く謂れ無し、單相思をば害得て忒だ(九)明昧、又人を困ましむる

【六】犯。星命家の語にして、惡き星に値ることをいふ、殺は助字、笑殺、閑殺等の殺に同じ。

【七】西施。古の越の美人なり、西施かつて心を病み其里に矉す、其里の醜人見て之を美なりとし、歸りて亦心を捧げて其里に矉せりとの故事あり。

【八】巫陽。巫山陽臺。

【九】明昧。曖昧なること。

の天氣酒に中るの心期に不是して、魅魅地と常に醉へるが如し。

【解說　「看るに他」云云は、春は歸り來ることあれど夢中の人は歸り來ること無かるべしとの意なり、「氣一絲兒」云云は、一縷の生命は到底長く持續し得ずとなり、「夢去つて」云云は、すでに夢は過去のものとして消滅したる上は、夢中の事は實際となりて現はることなしとの意、「誰か病み來つて」云云は、元來夢中の事は虛事なるに、誰か虛事の爲に病みて生命をその虛事に捧ぐるものあらんやとて戒しむるの意なり、「儞行雲」云云は楚王夢に巫山の神女と會するの故事を引き、汝(小姐)は楚王(夢中の男に喩ふ)の汝を想ふこと無きに、自れのみ先づ巫陽に在りて楚王を待つも效無からんとの意、傳說の楚王は夢に神女に會したれど今小姐は是と反對に夢に楚王と會したるなり、「又人を困ましむる」云云は、今は人を倦怠せしむる春に非ず、また汝は酒に醉ひしにも非ざるに、何故に醉へるが如く無氣力なるかとの意なり。】

〔末上る〕　日下に書を曬して(一〇)鳥跡を嫌ひ、月中に藥を搗きて(一一)蟾酥を要む、我陳最良、公相の命を承け、來りて小姐の脈息を診視せんとし、此の後堂に到れり、打叫一聲せでは不免、(一二)春香賢弟有

【一〇】鳥跡。文字に喩ふ。

【一一】蟾酥。蟇の腦より取りたる藥なり。

り麼。

〔貼見ゆる介〕是れ陳師父なり、小姐は睡哩。

〔末〕他を驚動すること免れ、我自ら進み去かん、〔見ゆる介〕小姐よ。

〔旦驚く介を作す〕誰ぞや。

〔貼〕陳師父哩。〔旦扶起する介〕

〔旦〕師父よ我學生病を患へ、久しく失敬了。

〔末〕學生よ學生よ、古書に云へる有り、(一三)學は勤むるに精しく、嬉るに荒ぶと、儞後花園にて風に蕩り日を冒びたるに因爲、這の疾に感下て、(一四)書工を荒廢せり。我爲師的外に在りて、寢食安んせず、幸喜に老公相請ひ來りて病を看しむ、也料らざりき儞(一五)清減して此に至らんとは、這般樣の似くんば、幾時か起來て讀書し能勾はんや、早則(一六)端陽節哩。

〔貼〕師父よ端節には儞の的有り。

〔末〕我端陽を說へども、儞の(一七)粽子を要むとは難道、小姐よ(一八)望聞問切せん、我且つ儞に

【一三】春香賢弟。春香は弟子なる故賢弟と云へり。
【一四】書工。學問と女藝。
【一五】清減。瘦すること。
【一六】端陽節。端午なり、五月五日。
【一七】粽子。端陽に食するちまきなり。
【一八】望は目を以て察すること、聞は耳を以て音をきくこと、問は容體を問ふこと、切は指を以て診ること、此の四字は診察の意なり。

問ふ、病症何に因るか。

〔貼〕師父什麼を問ふか、只儞が毛詩を講ずるに因れり、這の病は便是君子好逑上に來的。

〔末〕是れ那一位の君子ぞや。

〔貼〕是れ那一位の君子なるを知他むや。

【解說　「日下に」云云二句は對句にして、第一句は學問に厭きたる意を寓し、第二句は醫藥を業とするの意を寓せり、貼の白「端節には儞の的有り」とは端午には汝は甘い事にありつくの意なり、端午には主家より敎師に謝儀其他の贈與あるが故なり、「我端陽を」云云は、余が端午の事を云ふとも、汝より物を貰はんとには非ずとの意なり、「君子好逑上に來的」とは毛詩の句を引きて、男子を求むるの心より起れりとの意を寓す。】

〔末〕這般に說はば毛詩の病は、毛詩を用ゐ去つて醫せん、那の(一九)頭一卷には就ち女科聖惠方裏に在る有り。

〔貼〕師父よ、可に毛詩上の(二〇)方兒を記的たるか。

〔末〕便ち他の處方に依るに、小姐君子の病を害了、(二一)史君子を用的ん、毛詩『既に君子を見る、云に胡ぞ瘳えざらん』と、這の病

【一九】頭一卷。第一卷なり。聖惠方は醫書なり、宋の太平興國三年大平聖惠方百卷を集む。
【二〇】方兒。藥の處方なり。

は君子の抽一抽する有らば、就ち抽好了。

〔旦羞づる介〕哎也。

〔貼〕還甚の藥有りや。

〔末〕酸梅十箇、詩に云ふ、『摽は有梅、其實七兮、』又說ふ『其實三兮』と、三箇に七箇を(二三)打す是れ十箇なり、此の方は單男女の時を過ぎ(二四)思酸の病を醫す。〔旦歎く介〕

【解說　「瘮」と「抽」は音相同じ、「男女の時を過ぎ」云云は、男女が適當なる結婚年齡を過ぐるも配遇無きときは情欲の病を得るものなるが、その病(思酸之病)は梅を以て治すべしとて詩經中より梅に關する語を引きたるなり(梅は音媒なれば、これにも關係ある語なり)。】

〔貼〕還有呢。

〔末〕(二四)天南星三箇。

〔貼〕可に少し。

〔末〕再に些の詩に云くを添へん、『三星天に在り』と、專ら男女時に及ぶの病を醫す。

〔貼〕還有呢。

【二一】史君子。藥名なり。
【二二】打。加ふるの意、算盤の珠を彈く意に出づ。
【二三】思酸の病。嫉妬の病なり。
【二四】天南星。藥名、やまごんにやく。

〔末〕俺小姐一肚子の火を看る、儞一箇の(二五)大馬桶を抹淨む可し、我(二六)梔子仁當歸を用ゐて他(小姐)が火を瀉下來と待す、這れ也是方に依れり、『之子于歸ぐ、言に其馬に秣はん』と。

〔貼〕師父よ、這の馬は那の『其馬』に同じからず。

〔末〕一樣の(二七)髀鞦窟洞の下。

〔旦〕好箇に傷風切藥の陳先生。

〔貼〕做的月に按じ經を通ず陳媽媽。

〔旦〕師父方を執る可からず、還是診脈を穩と爲す。〔末脈を看錯つて旦の手背を按ずる介〕

〔貼〕師父よ、箇の轉手を討む。

〔末〕女人は此の背を反して之を看るは、正に是れ(二八)王叔和の脈訣也、也罷、順手に看是、〔脈を診る介〕呀、小姐の脈息、這箇分際に到了。

【解說　末の白「再に些の詩に云くを添へん」とは、再に詩經より一語を引きて之に加へんとの意、「三星天に在り」の一句は婚姻の慶に喩ふる詩經中の句なり、「時に及ぶの病」とは婚姻

【二五】馬桶。大便の器なり。
【二六】梔子仁、當歸。孰れも藥名なり。
【二七】髀鞦。馬鞍の革帶なり、馬の尻に絡へり。窟洞は孔なり。
【二八】王叔和。晉の名醫なり、脈經十卷を著はす。也罷とはそれでもよからんとの意。

時期に達せる者の病なり、「一肚子の火」とは滿腹の熱氣を謂ふ、「他が火を」云云は、小姐の熱を下さんとの意なり、卽ち便を通ぜしめて熱を除くことなり、「方に依る」は處方に依るの意、「之子」云云二句は詩經の語なり、「秣」と「抹」と音同じきが故に、馬桶を抹淨することと、其馬に秣はんとを附會したるなり、貼の白「這の馬は」云云は、小姐と詩に云ふ所の「其馬」とは同一ならずとの意なり、「一樣に」云云は、小姐も詩經の馬も共に孔に絡へるものあるは同じなりとの意、「傷風」云云は、風俗壞亂の意と病氣に對して藥を下すとの雙方の意に掛けたる語なり、「倣的」云云は、毎月月經を通ずる陳最良の妻（陳媽媽）との意なり、「經を通ず」はまた經文（詩經等）に通ずるの意を兼ねたり、「診脈を」云云は、脈を診る方がたしかですとの意なり、「箇の轉手を討む」とは、手を翻したまへとの意、「這箇分際に到了」とは、斯程までになりけりとて脈の衰へたるに驚ける意なり。】

〔金索挂梧桐〕〔末〕　他人才忒だ整齊にして、脈息恁く微細なり、小小の香閨、爲甚憔悴を傷みたるか。

〔起つ介〕　春香呵。

他が似く這の傷春怯夏の肌は、好く扶持せよ、病煩人は容易に秋意に傷まん。

小姐よ、我去かん藥を咀來。

〔旦歎く介〕　師父よ。

少不得情・竅髓に栽了鍼も入り難し、病・煙花に躲在儞が藥怎で知らん。

〔泣く介〕

尊覷を承け、何れの時何れの日、來りて這の(二九)女顏回を看ん。〔合〕

病中の身怕的は是れ驚疑、且つ將息して煩絮すること休れ。

〔旦〕　師父且つ自在なれ、儞を送不得了、可に曾て俺が(三〇)八字をば推算ひたる麼。

〔末〕　算來に中秋を過ぎて好からんと要す、當世止有り八箇の字、起死曾て無し(三一)三世の醫。

【解說　「人才整齊」とは才色共に備はれること、「小小の香閨」以下は、閨房の內に在る小女子にして何故に斯くの如き病を得たるかとて怪しむなり、（常に閨房に在る小女は、斯かる病を得べき原因無き筈なり）「傷春怯夏の肌」は、氣候に抵抗力無き身を謂ふ、「少不得」云云以下は、戀情骨髓に入りて、到底除き難しとの意、「病煙花に」云云

【二九】女顏回。小姐自ら指す、孔子の弟子顏回は蒲柳の質にして早く死せり、小姐と陳最良とは師弟の干係ある故之に喩ふ。

【三〇】八字。生時の年、月、日、時の干支なり、一生の運命之に因る。

【三一】三世。過去、現在、未來。

は、わが病は男女の情に原づけるものなれば、汝の藥にては治せずとなり、「尊覩」云云以下は、今日御診察を受けたれど、今後師の來れるとき我果して生命あるや疑はしとの意なり、「且つ將息」云云は、靜養して多く談話すべからずとなり、「師父且つ」云云は、師よ隨意に歸れ、我は師父の歸るを門前まで見送らず失禮せんとの意なり、「當世」云云の對句は、人生は只運命に因る、運命に因る病は醫も及ばずとの意なり。】

〔貼〕一箇の道姑走み來了。

〔淨上る〕聞かず(三三)弄玉簫を吹きて去るを、又見る(三三)嫦娥藥を竊みて來るを、自家は紫陽宮の石道姑便ち是なり、杜老夫人の呼喚を承け、小姐の替に禳解す。〔貼に見ゆる介〕

〔貼〕姑姑何が爲にして來れるか。

〔淨〕吾は乃ち紫陽宮の石道姑なり、夫人の命を承け、小姐の替に禳解せんとす、知らず害的は甚の病ぞや。

〔貼〕(三四)鱸鮞病なり。

【三三】弄玉。秦の穆公の女なり。時に蕭史といふ者あり善く簫を吹く、穆公弄玉を之に婚はす、後に弄玉は鳳に乘じ、蕭史は龍に乘じ共に簫を吹いて天に去れり。

【三三】嫦娥。西王母の不死の藥を竊みて月に奔るの說あるに出づ。

【三四】鱸鮞病。邪病なり。

〔淨〕誰が爲に來れるか。

〔貼〕後花園に耍來。

〔淨三指を擧ぐ貼頭を搖る介〕〔淨五指を擧ぐ貼又頭を搖る介〕

〔淨〕咳、儞是れ三是れ五と說へど、他が與に主を做せ。

〔貼〕儞自ら他に問ひに去け。

〔淨、旦に見ゆる介〕小姐小姐よ、道姑(三五)稽首那。

〔旦驚く介を作す〕那裏の道姑ぞや。

〔淨〕紫陽宮の石道姑なり、夫人召す有り、小姐の替に保禳す、聞說く小姐後花園に在りて(三六)著魅せりと、我信せず。

【解說　「聞かず弄玉」云云の對句は、小姐の未だ結婚せざることと、小姐が病めることとに意を寓せるなり、「三指を擧ぐる」は普通の診脈の意にして「頭を搖る」は、病普通より重きを示す、五指を擧げたるは再に病の重さを問へることにして、貼の又頭を搖りしは、尙更に病の重きを示したるなり、是は病人に聞えぬやうに無言にて語りたるなり、「保禳」とは禳解に同じ、邪氣を拂ひて其の身を保たしむるなり。】

【三五】稽首。敬禮すること。那は助字なり。

【三六】著魅。鬼憑きたること。

〔前腔〕〔淨〕 儞星星的怎で著迷し、設設的渾て魅せらるるが如きか。

〔旦、魘語を作す介〕 我の人那。

〔淨・貼・背く介〕

儞聽け他が(三七)唸唸呢呢、作的(三八)風風勢。

是了、身邊帶びて箇の小符兒有り。

〔旦の釵を取り小符を挂け咒を作す介〕 赫赫揚揚として、日東方に出づ、此符惡夢を屏卻し、不祥を辟除す、急急如律令敕。〔釵を挿す介〕

這の釵頭の小篆符を、眠坐離さしむる莫れ、閑神野夢をば都て廻避す。

〔旦醒むる介〕 咳、這の符は敢中らず、我が那の人呵。

須ず花に依り木に附くの(三九)廉纖鬼に不是、咱做的は影を弄び風を團むるの(四〇)抹媚癡。

〔淨〕 再び癡する時は箇の(四一)五雷を請じて他を打せん。〔旦〕

此兒の意、正に攜雲握雨せんと待するに、儞卻つて掌心の雷を用ゐる。

【三七】 唸唸呢呢。口内にてつぶやくこと。

【三八】 風風勢。呆然としてとりとめ無き動作。

【三九】 廉纖鬼。賤小なる鬼、即ちつまらぬ下つ端の鬼なり、但し鬼とは幽靈の如きものなり。

【四〇】 抹眉癡。化粧狂なり。

【四一】 五雷。道教呪法の一なり。

〔合前〕

【解說　「星星的」は微細の意なり、即ち小姐は一つ一つ微細の點までも心迷ひたるは何ぞやとの意なり、「我の人那」とは、小姐が夢中に會ひたる男を呼べるなり、「是了」は、おう然うぢやと忘れし事を思出せる語なり、「赫赫」云云は咒語なり、日出でて諸妖を滅するが如く此の符に依りて邪氣を拂ひ去らんとの意なり、「急急」云云一句は道教の咒文に常用する文字なり、昔漢代に於ては公文の終に用ゐたるが、遂に道教の常套語と爲れり、「閑神野夢」とは人を惑はす邪神邪夢を謂ふ、「須ず」云云以下は、我が夢に見たる男は決して樹木の妖精の如きつまらぬ邪鬼には非ず、(故に)我も彼の人の爲めに容姿を飾る化粧狂と爲れりとの意、「影を弄び風を團むる」とは婦女が化粧に苦心することなり、「攜雲握雨」とは男女相會する意なり、「掌心の雷」とは道教の咒法にして手掌に雷字五個を書く、是れ邪を避くるの法なり、此の二句は、我は彼の男と相會せんと努むるに汝は卻つて我より彼の男を思ひ切らせんとするかとて恨むなり、「合前」とは合唱前に同じきなり、即ち「病中の身」云云二句を合唱す。

〔淨〕 還分明に說與ん、箇の三丈の(四二)高咒旛兒を起てん。

【四二】 咒旛兒。咒文を記せる旗。

〔旦〕箇の甚麼子を說はんと待せば好きか。

「尾聲」依稀に則箇の柳と梅とを記的。

姑姑よ。

儞も也密ずしも㊂符椿を打し竹枝に挂けざれ、則我が思量を冷かにするを待たば、一星星に咒は夢兒裏に向はん。

〔旦を扶けて下る〕

綠慘雙蛾自ら持せず、
道家の妝束厭禳の時、
如今在らず花紅の處に、
爲めに報ず東風且つ吹く莫れ。

【解說「箇の甚麼子」云云は、まあ何と云へば宜からうかとの意なり、「子」は助字なり、「尾聲」の大意は、我今柳と梅とを記臆すること甚だかすかなれば、汝(道姑)も强ひて咒符を竹枝に掛けて祈り邪氣を拂ふに及ばず、遂に我が情(男を思ふの)冷卻するに至らば、咒文の効力は零碎に一つ一つ(我がかつて見たる)夢の中に入りて夢中の妖を拂はんとなり、卽

【㊂】符椿。咒文を記せる符なり。

ち小姐が夢の男を思へる間は、如何に咒を以て拂ふとも其男を拂ふこと能はざるなり、是れ妖は他より犯したるに非ずして小姐の胸に自ら生じたるが故なり。】

第十九齣　(一)牝賊

〔北點絳脣〕〔淨、李全に扮し衆を引ゐて上る〕　世は羶風に擾ぎ、家に雜種を傳へ、刀兵動く、這の賊英雄、牆洞を穿つものに比不的。

【解說　「世は」云云は天下は胡人の爲に擾亂すとの意、胡人羊肉を常食する故に臭氣あり、是を羶といふ、「家に」云云は、中國の中に胡人の如き雜人種の入り來れるを謂ふ、以上の二句を「殺氣秋橫、陣頭雲擁」と改作せるもあれど、是は清朝に入りてその朝廷が胡人なるを以て憚り改めたるなり、原作は右に掲げたる通りなり、「這の賊」以下は、金の主たる者は賊は賊なれど、人家の壁を破りて入るが如き竊盜には非ずして英雄なりとの意なり。】

【一】牝賊。女賊なり。

野馬千蹄合せて一群、眼に看る江海の風塵を起すを、他の封爵を受け他の令を聽くも、虧心負義の人と不算。自家は李全是れ也、本貫は楚州の人氏、身に萬夫不當の勇有れど、南朝用ゐず、去つて盜と爲り、五百人を以て江淮の間に出沒し、正に歸著無かりしに、所幸に大金皇帝、遙

かに我を封じて溜金王と爲し、我に央みて淮揚を騷擾せしめ、機を看て進取せんとす、奈んせん我多勇少謀なり、所喜に妻子楊氏(三)娘娘は、能く一條の梨花槍を使ひ、萬人敵する無し、夫妻陣に上らば、大に威風有り、則是娘娘に些の喫醋有り、但是れ擄的婦人は、都て他(楊氏)の帳下に送るを要す、便是軍士們すら、都て只他を畏懼せり、正に是れ、山妻獨り霸にして(三)蛛象を呑み、海賊王に封ぜられて蛇龍に變ず。

【解說　「野馬」云云より「不算」までは詩なり、「他の封爵」等の他は金の天子を指す、「虧心負義」は、良心に負き義に負くことなり、此の詩は李全の心事を示せるなり、「多勇少謀」は勇ありて智無きを謂ふ、「梨花槍」とは槍術の名なり、「山妻」云云二句は、山賊の妻威力ありて夫を制し、海賊が王と爲れるは蛇が龍に變じたるが如しとなり。】

【二】娘娘。婦人の尊貴なる者、皇后、王妃又は女神に用ゐる稱呼なり、上文にては王の妻なる故に之を用ゐる。
【三】蛛呑象、小が大に勝つこと。
【四】燕支。胭脂なり。
【五】千歲。王を呼ぶ語なり、天子に萬歲といふが如し。

〔番卜算〕〔丑、楊婆に扮し鎗を持して上る〕　一枝の鎗に灑ぐ落花の風、點點として梨花弄す。

〔見え舉手する介〕　大王(五)千歲、奴家介冑身に在れば、不拜了。

〔淨〕 娘娘よ、爾知る可し大金皇帝、我を封じて溜金王と做せり。
〔丑〕 怎麽溜金王と叫做か。
〔淨〕 溜者順也。
〔丑〕 爾を封ずるは何事ぞ。
〔淨〕 我に央みて淮揚を騷擾すること二年、我が兵糧齊集するを待ちて、一擧にして江を渡り、趙宋を滅了さんとす、那の時は還我を封じて帝と爲哩。
〔丑〕 這等の事有らば、恭喜了、此を借りて號令し、馬を買ひ軍を招かん。

【解說】「血燕支」云云は、血と胭脂はいづれも紅色なり、婦人顏に胭脂を施して戰に臨み人を斬れば血と燕支と相映じて紅更に紅なるを謂ふ、「一枝の鎗」云云二句は、鎗を操る姿勢を形容したるなり、「此を借りて」とは、王と爲りたる名義を用ゐるの意なり。

〔六么令〕 雷の如く喧鬨し、(六)轅門に緊く畫鼓鼕鼕たり、(七)哨尖兒は飛過す海雲の東。〔合〕
好男女、當中に坐して、淮揚の草木都て驚動す。

【六】 轅門。軍衙の門なり。
【七】 鼕鼕は鼓の音なり。哨尖兒。鳴箭なり。

〔前腔〕 糧を聚め衆を收め、(八)高蹄戰馬青驄を選び、(九)盔纓を閃し斜に簇む玉釵の紅。〔合前〕
群雄競ひ起り前朝に向ふ、
折戟沈戈鐵未だ銷せず、
平原好牧人の放つ無く、
白草天に連なつて野火燒く。

【解說】「當中に坐し」とは天下の中央に地を占むるの意なり、「高蹄」云云以下は李全の妻が出陣の雄姿を叙したるなり。

【八】 高蹄。蹄を高く揚げて歩む良馬なり。
青驄は青白色の良馬。
【九】 盔纓。かぶとの緒。

第二十齣　(一)悼殤

〔金瓏璁〕〔貼上る〕　連宵風雨重く、多嬌多病愁中ば、仙も效少しく、藥も功無し。
顰するは爲に顰する有り、笑ふは爲に笑ふ有り、顰せず笑はず、哀しい哉年少、春香、小姐に侍奉し、傷春病みて深秋に到りぬ、今夕中秋の佳節、風雨蕭條として、小姐の病轉た沈吟、待我他を扶けて消遣せん、正に是れ、從來雨打す中秋の月、更に値ふ風長命の燈を搖るに。〔下る〕

【解說】「顰するは」云云二句は、悲しむも笑ふも皆それぞれの原因ありとの意、然るに小姐は顰すべき時にも顰せず、笑ふべき時にも笑はざるは病重きなり、「他を扶けて」云云は、小姐の病體を扶けつつ憂さ晴しせしめんとの意なり、「從來」云云二句は、從來小姐の運命は中秋の月夜が雨に逢へるが如く不幸なりしが、今夜は小姐の生命さへ危しとの意なり。【

〔鵲橋仙〕〔貼、病旦を扶け上る〕　(二)拜月堂空しく、(三)行雲徑擁す、骨冷えて秋夢を成すを怕る、世

【一】悼殤。死を悼むなり。
【二】拜月堂。女子が香を焚きて月を拜する處なり。
【三】行雲徑。男女相會したる處。擁は會合せしたいふ

間何物か情の濃きに似ん、一片の斷魂を整へ心痛む。

〔旦〕　枕函敲破し(四)漏聲殘る、醉へるに似て呆するが如く死も難からず、一段の暗香夜雨に迷ひ、十分の清瘦秋寒に怯ゆ。春香よ、病境沈沈として、今夕の何の夕なるを知らず。

〔貼〕　八月半了。

〔旦〕　哎也、是れ中秋の佳節哩、老爺奶奶は、都て我が爲に愁煩し、曾て玩賞了ざらん。

〔貼〕　這は都て話下に不在了よ。

〔旦〕　陳師父が我が替に推命するを聽見るに、中秋を過ぎて看看に病勢轉沈せんと要すと、今宵欠好し、儞我が爲に軒を開きて一望せしめよ、月色如何。〔貼窗を開き旦望む介〕

【解說　「骨冷えて」云云は、死なんことを慮るなり、「枕函敲破」は眠られぬままに幾度も寢返りすることなり、「漏聲殘る」は夜の更けたることを意味す、「這は都て」云云は、左樣なる話は止めよとの意なり、此の語は元來物語り等に用ゐられ、此の話は此處にて止むとの意に用ゐらるるを常とす、今春香が借り用ゐたるなり。】

〔集賢賓〕〔旦〕　海天悠たり、問ふ(五)冰蟾は何處に湧くか、(六)玉杵秋空、誰に憑り藥を竊みて(七)嫦娥をば奉せん、甚ぞ西風夢を吹いて蹤無

【四】漏聲。刻漏の滴る聲。
【五】冰蟾。月なり。
【六】玉杵。また月なり、月中

きか、人去つて逢ひ難し、須ず神挑鬼弄に不是、眉峯に在り、心坎裏に別に是れ一般の疼痛。

【解說　「玉杵」云云二句は、玉杵にて搗き作られたる靈藥は、秋空高き月中に有れども、之を竊みて下界に來る嫦娥無きが故に、小姐の病を救ふこと能はずとの意なり、「須ず神挑」云云は、我が此の病は決して邪鬼妖精のいたづらに非ずとの意、「眉峯」とは眉の遠山の如きを謂ふ、悲色眉に在る意なり。】

〔旦悶ゆる介〕

〔前腔〕〔貼〕甚ぞ春歸り無端に廝和哄するか、霧と煙と兩びに玲瓏ならず、算來へば人命天の重きに關す、曾く消詳して直ちに恁く悤悤、誰が爲著に儂、(八)俏樣子等閑に抛送せんや。待我他を謊らむ、姐姐よ月上了、月輪空に、敢爾一牀の幽夢を(九)蘸破せん。

【解說　「甚ぞ春歸り」云云は、春去りたるに、春に傷みし心のみは朦朧として附き纏ひ、小姐の心をたぶらかすとの意なり、「曾く消詳」云云は、瘦することの速かなるを謂ふ、「俏樣子」云云は、此の美くしき人を如何でか棄て（死ぬこと）んやとの意、即ち現に實在せるや否に兎が玉杵を以て藥を搗く影ありといふ。

【七】嫦娥。西王母の不死の藥を竊みて月に奔れりといふ。

【八】俏樣子。美しき姿。

【九】蘸破。覺醒せしむる意なり。

やすら不明なる男の爲めに、實在の美人を殺すは惜ししとの意なり。】

〔旦望み歎く介〕時を輪へ節を盼みて中秋を想ひ、人中秋に到りて自由ならず、奴が命孤月の照すに中らず、殘生今夜雨中に休らん。

〔前腔〕〔旦〕儞便や好き中秋の月兒たりとも誰か(一〇)受用せん、翦たる西風淚梧桐に雨す、(一一)楞生瘦骨沈重を加へ、程期を趲ぐ、是れ那の天外の哀鴻、草際の(一二)寒蛩、(一三)撒剌剌たり紙條窗縫。

〔旦驚きて昏む介を作す〕

(一四)冷鬆鬆、(一五)輭兀剌、(一六)四梢動き難し。

【解說　「時を輪へ」云云は、指折り數へて中秋（八月十五夜）を待ちたる意、「人中秋に」云云は、われ中秋に逢ひてわが身思ふまならずとの意、「奴が命」云云は、中秋にして月無きをかこち其の身の不幸をも歎くなり、「殘生」とは小姐が垂死の身に喩へたる語なり、「儞便や」云云は、たとひ今夜月照ればとて我豈樂しからんやとの意なり、「程期を趲ぐ」とは、末期の旅程に近づけること、鴻雁ち寒蛩も小姐の命も皆末期に近づけるなり。】

【一〇】受用。喜び樂しむなり。

【一一】楞生。衰へたる生命なり。

【一二】寒蛩。秋のこほろぎ。

【一三】撒剌剌。窗紙に風の當る音。

【一四】冷鬆鬆。寒氣さしてぞくぞくとすること。

【一五】輭兀剌。無氣力にぐたりとすること。

【一六】四梢。手足なり。

〔貼驚く介〕小姐(一七)冷厥了、夫人有請。

〔老旦上る〕百歳少憂にして夫主貴く、一生多病にして女兒嬌なり。我が兒よ、病體怎生了。

〔貼〕奶奶よ、欠好欠好。

〔老旦〕可に怎了か。

〔前腔〕儞後花園に閑に(一八)夢銃するを隄防がず、分明ならず再に(一九)惺忪せず、(二〇)睡臨侵と打不起頭梢重し。〔泣く介〕恨む早早に乘龍不呵して、夜夜孤鴻たるを、俺が翠娟娟たる雛鳳を活害殺して、一場空し、是れ這答裏にて娘兒の命をば送る。

【解說　「百歳」云云の對句は、良人の官高く長年月の間別に憂とするもの無かりしが女兒の病弱なるが一生の憂なりとの意なり、「分明ならず」云云は、原因明かならずして氣分は夢見る如く曖昧にぼんやりとせりとの意なり、「恨む早早に」云云は、早く佳壻を求めざりしを恨むなり、「翠娟娟たる雛鳳」とは小姐に喩ふ、是れ孰れも弄玉と蕭史の故事を用ゐたるなり（第五齣參照）「是れ這答裏」云云は、只今に至りて娘の生命終らん

【一七】冷厥。冷えて動かざること。
【一八】夢銃。呆然自失すること。
【一九】惺忪。醒め氣付くこと。
【二〇】睡臨侵。深き睡りに陷りたるが如く動かざること。

とすとの意なり、「送」は命を送ること、卽ち死を意味す。】

〔囀林鶯〕〔旦醒むる介〕甚の(二一)飛絲か陽神に纏的動弄せんや、悠揚として(二二)風馬丁冬たり。

〔泣く介〕娘よ儞に拜謝了。〔拜し跌く介〕小より來覷的千金の重なりしに、不孝の女孝順を終うする無し。娘呵、此乃ち天の數也。今生に當り花一紅を開くも、願くは來生(二三)萱椿をば再び奉ぜん。〔衆泣く介〕〔合〕西風を恨む、一霎に無端綠を碎き紅を摧くを。

〔前腔〕〔老旦〕竝く(二四)兒の蕩する無きも箇の嬌香種を得て、娘前を繞り笑眼歡容せり、但成人して索ず俺高堂をば送るべきに、恨む天涯に老運孤窮するを。兒呵。暫時の間に月直り年空し、好く儞這の(二五)心煩意冗を將息よ。〔合前〕

【解說　「甚の飛絲か」云云二句は、地に燃ゆる陽炎かすかに陽光を追ひて煩ひ亂るるが如く

【二一】飛絲。燃ゆる陽炎。陽神は日光なり、また陽世の神。
【二二】風馬。神の乘れる馬なり。丁冬は風馬の過ぐる聲。
【二三】萱椿。父母に喩ふ。
【二四】兒。男兒の意なり。蕩は兒の頑白なること。嬌香種は女兒に喩ふ。
【二五】心煩意冗。胸中の煩悶。

小姐の命も今は淡く燃ゆるのみにして生命の神に救ひを求むれども神は之を顧みずして去るとの意なり、「今生に當り」云云二句は、今生に於て一片の花の如かりし我は、來生に於て父母に孝養を盡さんとの意なり、「綠を碎き紅を擢く」の意もまた小姐の生命を奪ふことに喩ふ、「竝く兒の」云云二句は、頑白なる男兒は得ざりしも、愛らしき女兒が我（母）を慰むること有りて樂しかりしとの意なり、「但成人して」云云二句は、我が女（小姐）成長せば順序として女が我の死を送るべき筈なるに卻つて女が我に先立つこととなり、我をして異境に寂寞に耐へざらしむとの意なり、「月直り」云云は、死滅の時期迫りたるの意なり。】

〔旦〕 娘よ、(二六)爾が女兒不幸ならば、何の處置を作すか。

〔老旦〕 爾を奔して回去也、兒よ。

〔玉鶯兒〕〔旦泣く介〕 (二七)旅櫬夢魂の中、家山を盼む千萬重。

〔老旦〕 便や遠きも也去かん。

〔旦〕 是不是、女孩兒の一言を聽け、這の後花園中の一株の梅樹は、兒が心に愛する所、但我を梅樹の下に葬らば可矣。

【二六】 爾女兒。我といふに同じ。不幸は死なり。
【二七】 旅櫬。旅途に在る柩なり。

〔老旦〕 這是怎的來ぞ。〔旦〕病嬋娟桂窟の裏の長生を做不的、則分的粉骷髏梅花の古洞に向はん。

〔老旦泣く介〕 看るに他强ひて頭を扶し涙濛り、冷淋たる心汗傾る、如かず我他に先んぜんには一命常用無し。

〔合〕 蒼穹を恨む、妬花の風雨、偏に月明の中に在るを。

〔老旦〕 還去つて爹と講じ、廣く道場を做也、兒よ、(二八)銀蟾謾に搗く君臣の藥、(二九)紙馬重ねて燒く子母の錢。〔下る〕

【解說　「爾を奔して」云云は、汝の柩を持して故鄕（西蜀）に歸葬せんとの意なり、「旅櫬」云云は、異境に死して魂は遠き故鄕を思ふとなり、「病嬋娟」云云二句は、嫦娥月に奔るの故事を借りたるものにして、我の如き者は月宮の裏に長生するを得ざれば、腐骨と爲りて梅樹の朽洞に在らんとの意なり、「分的」とは、その分際（運命）としての意なり、此の二句は「桂窟」と「梅花古洞」と意相對せるなり、「看るに他」云云二句は、小姐が苦しさを忍び頭を擡げ涙に眼を曇らせて生汗を發せるを

【二八】 銀蟾。月に喩ふ。
【二九】 紙馬。五色の紙に神馬の像を印せしものにして、葬祭のときに之を燒く。子母錢は大小の錢なり、又紙を以て作れり。

謂へり、「如かず」云云は、我が身も今は役立たねば女より先に死なんとの意なり、「廣く道場を做也」とは、盛に追悼を營まんとの意、「銀蟾」云云は對句にして、第一句は、父(杜寶)は君命によりて公事に從ひ女の病をすら看ること能はざるを恨むの意なり、第二句は、子が母と死別するを哀しむの意なり、而して第一句に月に關せる文字を用ゐたるは當夜が中秋なればなり。】

【旦】 春香よ、咱回生の日有る可きや否や。

【前腔】【歎く介】 爾生小にして依從を事とす、我が情中爾が意中。

春香よ、爾(三〇)小心に老爺奶奶に奉事せよ。

【貼】 這是當的了。

【旦】 春香よ、我一事を記起來、我が那の春容は、詩を題して上に在り、外觀雅ならず、我を葬るの後は紫檀の匣兒に盛著、太湖石の底に藏在け。

【貼】 這是何の意兒を主とするか。

【旦】

心靈有り翰墨の春容、儻し那の人に直はば知重せん。

【三〇】 小心。注意周到の意。

【貼】 姐姐寬心せよ、爾如今不幸にして孤墳獨影、將息を肯起來、老爺に禀過し、但是れ姓梅姓柳の秀才一箇を招選し、同生同死せば可に美ならざらん哉。

【旦】 怕らくは等不得了、哎喲、哎喲。【貼】

這の病根兒怎で攻めん、心上の醫怎で逢はん。

【旦】 春香よ、我亡き後爾常に靈位の前に向つて我を一聲兒叫喚よ。

【貼悲む介】

他一星星に說ひ咱に向つて傷情重し。【合前】【旦昏む介】

【貼】 不好了、不好了、老爺奶奶快く來れ。

【解說 「爾生小にして」云云二句は、汝は年若きよりすべて我が言に從へる者なれば、汝と我とはその心同じきなりとの意、故に汝は我に替りて父母に仕へよとなり、「外觀雅ならず」とは、他人に對して羞づかしとの意なり、「心靈有り」云云は、畫ける相像に心あり、若し彼の男(夢中にて會へる)此の畫にめぐり逢ひなば之を大切(知重)にせんとの意なり、「寬心せよ」とは安心せよとなり、「孤墳獨影」とは夫婦墓を並べざること、卽ち小姐は處女なる故墓は一箇なり、故に後に姓を梅或は柳と呼ぶ男を壻として、その者の墓を並べ作るまで汝は

死なずして在れとなり、「心上の醫」云云は、心の病を治すべき醫師は世に無しとの意なり、「他一星星に」云云は、小姐は細細と些末の事まで我に告げて悲しみ甚だ深しとの意なり。】

〔憶鶯兒〕〔外・老旦上る〕(三一)鼓三鼕、愁萬重、冷雨幽窗燈紅ならず、(三二)侍兒の傳言を聽く女が病凶なりと。

〔貼泣く介〕我の小姐小姐よ。

〔外・老旦・同じく泣く介〕我の兒呵。

儞命を捨的終り、我を拋的途に窮せしむ、當初は只望めり爹娘をば送るを。〔合〕

恨む(三三)悤悤たるを、(三四)萍蹤浪影、風は蒯了玉芙蓉。

〔旦醒むる介を作す〕〔外〕快く蘇醒せよ、兒よ、爹は此に在り。

〔旦、外を看る介を作す〕哎喲、爹爹我を扶けて(三五)中堂に去罷。

〔外〕儞を扶也、兒よ。〔扶くる介〕

〔尾聲〕〔旦〕怕る樹頭樹底五更の風に不到的を、俺が和に小墳の邊、斷腸碑一統を立てよ。爹よ今夜は是れ中秋。

【三一】鼓三鼕。大鼓の音三擘なり、卽ち三更の時に鼓樓にて三聲の鼓を打つ、三更は夜半なり。

【三二】侍兒。侍女なり、春香を指す。

【三三】悤悤。速かなること、急なること。

【三四】萍蹤浪影。はかなきこと、たよりなき意。

【三五】中堂。母屋なり。

〔外〕是れ中秋也、兒よ。

〔旦〕這の一夜の雨を禁了とも。〔歎く介〕怎で月落ちて重ねて生じ、燈再び紅なる能勾はんや。〔並び下る〕

【解說　「鼓三鼕」云云二句は、三更の鼓聲を聽き、悲哀極まりなきの意なり、「我を拋的」云云は、異境に在りて汝(小姐)は我を棄てて幽冥に去り我を悲しましむとの意、「當初は」云云は、初めは汝が我等の死を送るを豫期したるに今はその反對と爲れりとて口惜しむなり、「恨む」以下は、束の間に消えんとする身の、恰も芙蓉の花の風に散らさるる如くなるを恨むとの意なり、「樹頭樹底」云云は、樹木の上下に咲き殘れる花は將に散らんとし曉(五更)の風吹頃までは保ち難きを怕るるなり、此句生命の拂曉まで續きがたきに喩ふ。】

〔貼哭きて走り上る〕我が小姐よ、我が小姐よ、天に不測の風雲有り、人に無常の禍福有り、我が小姐よ、一に傷春を病み、竟に死了也、我が家の爺・我が家の奶奶を痛殺了、列位看官們よ怎了也、待我他を一會哭せん。

〔紅衲襖〕〔貼〕小姐再び咱をして(三六)領頭香の心字をば燒かしめず、再び咱をして(三七)剔花燈の紅

【三六】五更拂曉の時神に禱りて焚く香を領頭香といふ、是れ最も敬虔なるものなり。

【三七】剔花燈。蠟燭なり。

涙をば繳めしめず、再び咱をして花を拈み眼を側だてて歌鳥を調らしめず、再び咱をして鏡を轉じ肩に移し儞が和に絳桃を點せしめず、儞が夜深深に翦刀を放ち、曉清清に畫藁に臨むを想著。

那の春容を提起れば、老爺の被に看見了、怕らくは奶奶情を傷め殉了葬罷と分付けん、俺想ふ小姐臨終の言を。

舊に依り湖山石兒に向つて靠也、怕る箇の(三八)拾翠人の來るを等得畫粉をば銷せんことを。

(三九)老姑姑も他來了。

【解說　「列位看官們」云云は、春香に扮せる俳優が觀客に對して云へる語なるが、「我が家の爺」以下「怎了也」までは原作に無くして後人の添加したる語なるべし、また「天に不測の」云云の對句も原作には無かりしならん、「小姐再び咱をして」以下「絳桃を點せしめず」までは、小姐の存命中に小姐が常に春香をして爲さしめたる務なるが、小姐亡き後は、もはや春香をして是等の務を爲さしむる者無しとて悲しむなり、「領頭香」云云は、小姐が香を焚き神を拜する時は我も常に之に侍したりしが、今後はさる事無しとの意、「剔花燈」云云は、燭光の下に小姐の話相手となり、時に悲しき話等にて小姐の涙ぐめるを慰めたることも有りしが今は其事も無しとの意なり、或は小

【三八】拾翠人。春遊する人。
【三九】老姑姑。老道姑を指す。

姐の爲に花を拈み鳥を弄り、或は小姐の化粧するときの手助け等したりしことも今はすべて過去の事と爲れりとなり、「夜深深」以下二句は、小姐が夜深き頃まで裁縫し、朝早く筆墨を手にしたる勉强のさまを想ひ出せる意なり、「那の春容」云云以下の意は、我若し小姐の畫像のことを口に出ださば、老爺（杜寶）はその畫を看んとすべく、夫人は之を看て悲しみ其畫像を死骸と共に葬らんと云はん、然れども小姐の遺言を考ふれば、さる事は叶はずとの意なり、「舊に依り」とは、小姐の言の如くとの意、即ち小姐の意に從ひて庭石の間隙に之を藏せんとの意、「怕る箇の」云云は、庭石に藏するは善けれども、春の遊びに來りし人の此の畫を發見して破り棄てんことを慮るとなり。】

〔淨上る〕　儞哭得好し、我來つて儞を幫けん。

〔前腔〕　春香姐よ、再び儞をして朱脣を煖め弄簫を學ばしめず。

〔貼〕　此が爲に。〔淨〕

(四)再び儞と湘裙を蕩して閑に鬪草せず。

〔貼〕　便是。

【四】湘裙。女子の穿つ裙の名なり、裙とは袴の如きものなり。
●鬪草は夏の初（五月五日）百花を鬪はす女子の遊戲なり。

〔淨〕小姐在らずんば、春香姐也多少(四一)鬆泛なり。

〔貼〕怎で見得か。〔淨〕

再び儞の冷に(四二)溫存し熱く絮叨するを要せず、再び儞の夜眠ること遲く朝起的早きを要せず。

〔貼〕這れ也慣了。

〔淨〕還氣を省くの所在有り。

(四三)雞眼睛は、儞背兒を做りて挑すを用ゐず、(四四)馬子兒は、儞鼻兒に隨ひて倒すを用ゐず。

〔貼(四五)〕啐する介〕

〔淨〕還一件、小姐青春有了。

時間沒く些兒を做出也。

那の老夫人呵。

少不得儞をば後花園にて腰を打折せん。

〔貼〕(四六)狐說を休めよ、老夫人來也。

【解說　「再び儞をして」云云は、今後は小姐は汝をして簫を吹かしめずとなり、簫を吹くは

【四一】鬆泛。用事少なくして身に餘裕を生ずること。
【四二】溫存。愛し護る意。絮叨は小やかましく責むること。
【四三】雞眼睛。足に生ずる疣の一種、魚の目なり。
【四四】馬子兒。馬桶なり、卽ち便器なり。
【四五】啐。人を叱する聲。
【四六】狐說。胡說に同じ、出鱈目の言なり。

先づ脣を煖む、脣冷ゆれば自在ならずして、吹くに不便なるが故なり、「湘裙を」云云は春日出遊して鬪草の戲にふけることも無しとの意なり、「怎で見得か」とは、何故に左樣に思ふかとの意なり、「冷に溫存」は冷靜に伏侍すること、「熱く絮叨」は熱心に勸告することなり、「冷」字は「溫」字に對して故らに之を用ゐたるなり、「氣を省く」云云は、立腹せずして濟むことありとの意なり、卽ち小姐の足に魚の目生じたるときは、之が治療を命せらる、女子の足は固く包みて外氣に觸れざる故臭氣あり、故に之が治療は不潔にして腹立たしきものの一なり、又女子は室內に便器を備へて用を達す、此の汚物を朝夕室外に運びて掃除するも亦侍女の勤にして腹立たしきものの二なり、今小姐死して春香は此の役目を免れたるを謂ふ、「青春有了」とは齡若き意なり、「時間沒く」云云は、不時に何等かの過失を生ずることあらんとの意なり、さる場合には汝に責任あれば夫人は汝を呵責せんとの意なり。】

〔老旦哭く介〕我の親兒よ。

〔前腔〕毎日娘が身を遶るは百十遭有るも、並く儞が人前に向ひ輕しく一笑するを見ざりき、他は(四八)班姬四誡を背熟的頭より學び、(四九)孟

【四七】班姬四誡。班昭卽ち曹大家の女誡なり。
【四八】孟子の母は孟子の敎育に心を盡し、三度その居を遷せり。
【四九】輭苗條。弱弱しくなよやかなること。

母三遷氣をば淘するを要得ず、也愁ふ他、(四九)輭苗條として忒だ恁く嬌なるを、誰か料らん他(五〇)病淹煎し眞に好えざらんとは。

〔哭く介〕

今より後誰か親娘をば叫也、一寸の肝腸百寸と做了焦す。

〔老旦問えて倒れ、貼驚き叫ぶ介〕老爺よ、奶奶を痛殺了也、快く來れ快く來れ。

【解說　「毎日娘が」云云二句は、母親に對しては最も慕かしみたれど、他人に對しては輕率に笑顏を示さざりきとの意、卽ち品行上の譏を避くるに注意したりとの意なり、「孟母」云云は、孟母は其子の不良に化せんことを恐れて三度家を遷したれども、我が小姐は生來溫良なればかかる顧慮無かりしとの意なり、「氣をば淘す」とは人をして氣を焦たしむることなり、小兒の頑白なるを淘氣といふも亦此の意に由れり、「一寸の」云云は、悲哀の痛切なるに喩へたり。】

〔外哭き上る〕我が兒よ也呀、原來夫人悶倒して此に在り。

〔前腔〕夫人よ、儞(五一)孤辰に坐し子宿を囂せしに不是、則是我公堂に坐して寃業報いぬ、較も似ず(五二)老倉公の女多くして好きに、(五三)賽

【五〇】病淹煎。病深くつのりゆくこと。

【五一】孤辰。不吉の星なり。子宿は本命星なり。

【五二】老倉公。漢の名醫淳于意

盧醫に撞不著他(小姐)一病躊む。

天天よ、俺の似き頭白中年呵。

便や(五四)大家緣を做了とも何處にか消ゐん、見(五五)小門楣を放著て生と拆倒せり。

夫人よ、儞且つ自ら保重せよ。

便や儞を寸腸千斷と做了也とも。

則怕る女兒呵。

他望帝魂歸りて招く可からず。

【解說　「儞孤辰に」云云は、「我公堂に」云云の句に相對す、其意は、小姐の死は汝(夫人)が不吉を嫌はず事を爲し本命に抗ひて凶運を招きたるに原因せず、實に我(杜寶)官位を辱かしむるの罪の報に因れりとなり、「較も似ず」云云は、漢の淳于意の如く我が家を嗣ぐべき女無きを歎く意なり、「便や大家緣」云云二句は、高き家柄も何かせん、小女(卽ち小姐)の死するを見たりけりとの意、卽ち後嗣絕えたれば家柄も價値なしとの意なり、此二句は「大家緣」に對して「小門楣」を用ゐ、「小門楣」を用ゐし故に「拆倒」

なり、其の醫術を女に傳ふ。

【五三】賽盧醫。醫術の精、古の扁鵲に匹敵する程の醫師との意なり。扁鵲は古の名醫にして盧に居りし故盧醫といふ。

【五四】大家緣。立派なる門戶なり、高き家柄なり。

【五五】小門楣。小女の意なり、唐の玄宗の頃の諺詠に男不封侯女作妃、君看女却是門楣の句あり。

の文字を用ゐたり、「保重せよ」とは、その身を愛惜せよとの意なり。】

〔丑、院公に扮して上る〕 人間の舊恨(五六)驚鴉去り、天上の新恩喜鵲來る、老爺に稟す、(五七)朝報高陞す。

〔外、報を看る介〕(五八)吏部一本、聖旨を奉ず、李全亂を作す、南安の知府杜寶、(五九)安撫使に陞せ、淮揚に鎮守す可し、卽日起程し、違誤するを得ず、(六〇)此を欽めよ。〔歎く介〕夫人よ、(六一)朝旨人を催して北往せしむ、女喪は(六二)西歸に便ならず、院子よ、陳齋長を請じて講話せん。

〔丑〕 老相公有請。

〔末上る〕(六三)彭殤眞に一壑、弔賀每に同堂。〔見ゆる介〕

〔外〕 陳先生よ、小女爾に(六四)長謝了。

〔末哭く介〕 正に是れ、小姐の(六五)仙逝を苦傷し、陳最良四顧門無し、所喜に老公相(六六)喬遷し、陳最良一發所を失す。〔衆哭く介〕

【五六】 鴉啼くは凶にして鵲啼くは吉なりとは古來云ふ所なり。
【五七】 朝報。官報なり。
【五八】 吏部。官吏の人事を掌管する官衙なり。
【五九】 一本とは一册の意なり、辭令一通の意なり。
【六〇】 安撫使。官名。
【六〇】 欽此。敕旨の文末に用ゐる常套句。
【六一】 朝旨。朝廷の意旨なり、卽ち敕旨なり。
北往は南安より北の淮揚地方へ行くこと。
【六二】 西歸。西方蜀に歸ること。
【六三】 彭。長壽なり。
殤は短命なり。
【六四】 長謝。永別なり、卽ち死なり。
【六五】 仙逝。死去。
【六六】 喬遷。高く陞ること。

【解說 「人間の舊恨」云云の對句は、凶事は去りて古事來るとの意なり、「聖旨を奉ず」以下「此を欽めよ」までは辭令の文言なり、「女喪は西歸に」云云は、鄉里に歸りて葬式を營む能はずとの意なり、「彭殤」云云二句は、長壽も短命も大差なく、幸と不幸と同時に來るとの意なり、「四顧門無し」とは、自れの賴るべき人無しとの意、「所喜に」以下二句は、老相公(杜寶)の陞官は慶すべきも、我はその爲に賴る可き人を失ひてなさけ無しとの意なり。】

〔外〕 陳先生、事の商量すべき有り、學生旨を奉じ、久しく停まることを得ず、小女の遺言に因り、就ち後園梅樹の下に葬らん、又恐る後官の居住に便ならざるを、已に分付けて後園を割取し、座の梅花庵觀を起て、小女の神位を安置し、就ち這の石道姑をして焚修看守せしめん、那の石道姑は承應的來す可きか。

〔淨跪く介〕 老道姑は香を添へ水を換ふ、但往來看顧するに還一人を得ん。

〔老旦〕 就ち陳齋長を煩はさば便と爲さん。

〔末〕 老夫人命ずる有り、勞を效すを情願す。

【解說 「學生旨を奉じ」云云の學生とは杜寶は陳最良を家庭敎師として請聘したる人なれば相手を尊敬したる語なり、但し「旨」とは敕旨の意なり、「後官」は後任の太守なり、「但往來

看顧」云云は、外部の人との交通應接等の爲尙一人を要すとの意なり、是れ陳最良自から其の事に當るを希望して云ひたること勿論なり。】

〔老旦〕老爺よ、須らく些の(六七)祭田を置き纔めて好からん。

〔外〕(六八)漏澤院二頃の虛田有り、撥して香火に資せん。

〔末〕這の漏澤院田は就ち漏して生員の身上に在り。

〔淨〕咱(六九)道姑と號す、稻穀を收むるに堪ふ、儞は是れ陳絕糧、漏して儞に到らず。

〔末〕秀才口に喫す十一方、儞は是れ姑姑、我は還是孤老なり、偏に該に我收糧せざるべきか。

〔外〕爭を消ゐず、陳先生收給せよ、陳先生、我此に在る數年、學校を優待せり。

〔末〕都て知道り、便是老公相高陞す。舊規に諸生の(七〇)遺愛記生祠有り、碑文京に到り伴禮として人に送るも妙と爲さん。

〔淨〕陳絕糧、遺愛記は是れ老爺遺下して(七一)令愛の爲に表記を作る麼。

【六七】祭田。祭祀の料とする田。
【六八】漏澤院。官設の葬地なり。虛田は不用の田地。
【六九】道姑と稻穀。聲音相通ず。
【七〇】遺愛記。名士の遺愛物を記念する記錄。生祠は生存者の德を頌して之を祀る祠堂なり。
【七一】伴禮は禮物に添へて贈る物。令愛。人の娘を稱する語なり、上文にて小姐を指す。

〔末〕是れ老公相政跡の歌謠なり、什麼の令愛ならん。

〔淨〕怎麼を生祠と叫做か。

〔末〕大祠宇に老爺の像を塑して供養す、門上に杜公之祠と寫著。

〔淨〕這等ならば就ち小姐を塑して傍に在き、我普同供養するに如かず。

〔外惱む介〕狐說、但是れ舊規のみ、我通用了ず。

【解說　「撥して香火に資せん」とは、香華料として支出せんとの意なり、「漏して生員の」云云は、我(陳最良)の手に入るべきものなりとの意なり、「咱道姑と號す」云云以下は、我は名を道姑(稻穀)と稱する故、祭田の收入は當然我に歸すべきものにして、汝陳絕糧(陳最良と字音相似たる故その綽號たり)は其の名より見るも祭田の收入を得べからずとの意なり、「十一方」は土方なり、土地に產する所を食ふなり、「孤老」は孤獨の老人なり、我は孤獨の老人なれば何ぞ祭田の收入を我に歸すること不可ならんやとなり、「收給せよ」とは汝之を收めよとの意なり、「舊規に諸生の」云云以下は、從來の例に依れば太守の他方へ轉任する時府學の諸生等太守の遺愛記を作りて碑に刻し或は生祠を建ててその德を頌す、今回も亦是等の事を爲し、其の碑文を京に携へ行きて人に贈らば可からんとなり、「遺愛記は是れ」云云は

道姑が遺愛記なるものを知らずして、遺愛記とは老爺（杜寶）が小姐の爲めに記念文を作るかと問へるなり、「普同供養」は一樣に祀るの謂なり。】

〔意不盡〕〔外〕陳先生、老道姑、咱が女の墳兒三尺暮雲高し、老夫妻一言相靠せん。

敢て時時看守するを望まず。

則(七三)清明寒食に一碗の飯兒を澆へよ。

魂冥漠に歸し魄泉に歸す、
汝を使す悠悠十八年、
一叫一回腸一斷し、
如今重ねて說く恨緜緜。

【解說　「咱が女の墳兒」云云は、我が女の爲には只小墓一箇を作れば足れりとの意なり、「一言相靠せん」とは、一言お賴み申すとの意、「則清明寒食に」云云は、世俗にて墓を祭る日に我が女の爲にも墓を祭れよとの意なり。】

【七三】清明。二十四節の一なり、舊曆四月に在り、此の日は家家墓に參りて祭る。
寒食は清明前二日なり。
澆はふりそそぎ供ふること。

第二十一齣　(一)謁遇

〔光光乍〕〔老旦、僧に扮して上る〕一領の破袈裟、香山嶼の(二)裏巴、多生多寶多菩薩、多多照證し(三)光光乍たり。

小僧は廣州府香山嶼の多寶寺の一箇の住持なり、這の寺は原是(四)番鬼們建造し、以て(五)收寶の官員を迎接するに便にす、玆に(六)欽差苗爺有り、任滿ちて、寶を多寶菩薩の位前に祭る、迎接せでは不免。

〔挂眞兒〕〔淨・苗舜賓に扮し、末・通事に扮し、外・貼・皁卒に扮し、丑・番鬼に扮して上る〕半壁の天南(七)海汊を開き、眞珠窟裏に向つて(八)排衙す。〔僧接ふる介〕〔合〕

廣利神王、善財天女、(九)梵放ち海潮音下るを聽く。

【解說　「多多照證」云云は、光明四方に照り輝く意なり、「眞珠窟」云云は、多寶寺の寶庫の門前に齊列して官員を迎ふる意なり。】

【一】謁遇。面會なり。
【二】裏巴。巴は助字なり。
【三】光光乍。照り輝くなり。
【四】番鬼。南方の蠻人なり、外國人なり。
【五】收寶。寶物を受領すること。
【六】欽差。敕命にて派遣せられたる者。
苗は姓なり、爺は敬稱。
【七】海汊。灣なり。
【八】排衙。門の兩側に列びて上官を迎ふること。
【九】梵。梵唄なり、讀經の聲。

〔淨〕 (一〇)銅柱珠崖道路難く、(一一)伏波横海舊く登壇す、越人自ら貢す珊瑚樹、漢使何ぞ勞せん (一二)獬豸冠。自家は、欽差識寶使臣苗舜賓便ち是れなり、三年任滿ち例として當に多寶菩薩を祭賽すべし、通事那裏ぞや。〔末見ゆる介〕

〔丑見ゆる介〕 (一三)伽瑌喇。〔老旦見ゆる介〕

〔淨〕 通事を叫び、(一四)番回に分付けて寶を獻せしめよ。

〔末〕 俱に已に陳設せり。

〔淨起ちて寶を看る介〕 奇なる哉寶也、眞に乃ち磊落なる山川、精熒なる日月、多寶寺は虛名ならず矣、香を看ん。〔内鐘を鳴らす淨禮拜する介〕

【解說 「銅柱」云云以下「獬豸冠」までは詩なり、交通困難なる蠻地も昔路博德(伏波)韓說(横海)等の征服する所と爲り、以來蠻人は從順に寶物を貢獻して、再び中國が兵を動かして罪を糺す必要なしとの意を寓せり、「磊落なる」とは錯雜變化極り無きをいふ、「精熒なる」とは光輝の眩きをいふ、すべて各種の寶物を賞讚せる語なり。】

海潮音は衆僧讀經の聲に喩ふ。

【一〇】銅柱。地名今の廣東省の南邊なり。珠崖は今の瓊州島なり、孰れも野蠻の地なり。

【一一】漢の時伏波將軍東越を討てり、又横海將軍南越を討つ。

【一二】獬豸冠。司法官の冠なり。獬豸はもと獸名なり、能く曲直を辨ずといふ。

【一三】伽瑌喇。蠻人の語なり。

【一四】番回。アラビヤ人なり。

〔亭前柳〕〔淨〕 (一五)三寶三多を唱へ、七寶妙過ぐる無く、莊嚴世界を成し、光彩婆娑に徧く、甚だ多し、功德邊無く闊し、〔合〕

領拜南無、多得寶、寶(一六)多羅、多羅。

〔淨〕 和尚よ、番回海商の替め、祝贊一番せよ。

〔前腔〕〔老旦〕 大海寶藏多く、船舫風波に遇ひ、商人重寶を持し、險路經過を怕る、刹那、彼の觀音を念じて脫す。〔合前〕

【解說 亭前柳の一曲は、寺僧が多寶菩薩の功德を述べたるなり、「妙過ぐる無く」とは、之に優れるもの無しとの意なり、「領拜南無」云云以下は寶物に對する頌詞なり、「番回海商」は海を航して貿易するアラビヤ人なり、「大海」云云は、海洋の彼方(外國)に珍寶多きを謂ふ、「彼の觀音を」云云は、佛經の「念彼觀音力波浪不能沒」等の句より引けり、卽ち佛力に依りて途中恙無く航し來れるの意なり。】

〔挂眞兒〕〔生上る〕 長安を望めば西日下る、偏に吾海角天涯に生る、寶を愛的(一七)喇嘛、珠を抽的佛法、滑琉璃兩下拏へ難し。

【一五】三寶。佛と法と僧なり。三多は多福と多壽と多男子なり。七寶は通常金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、琥珀、珊瑚なり。

【一六】多羅。奩器なり。

【一七】喇嘛。佛僧なり。

自ら笑ふ柳夢梅、一貧賴る無く、家を棄てて遊ぶ、幸に欽差の寺中に祭寶するに遇ふ、託詞して進見せん、儻し言語の中間、以て其の振援を打動得す可きやも亦未だ知る可からず。〔外に見ゆる介〕

【解說　「長安」云云二句は、柳生が支那の邊鄙なる地方に生れたるを歎くの意なり、「滑琉璃」云云は、琉璃はすべり易くして雙方孰れも手に握み難きを謂ふ、卽ち寶物の獲難きをいふなり、「託詞」云云は、口實を設けて面會せんとの意なり、「儻し言語の」云云以下は、談話の間に相手を感ぜしめて其の力を借ることを得るやも計られずとの意なり。】

〔生〕大哥を煩はす一聲通報せよ、廣州府學生員柳夢梅、來つて看寶を求むと。〔報ずる介〕

〔淨〕朝廷の禁物、那ぞ人の觀るを許さん、既に(八)斯文に係れば、權に請じて相見えん。〔見ゆる介〕

〔生〕南海珠殿を開き、

〔淨〕西方玉門を掩ふ、

〔生〕懷を剖き知己を俟ち、

【八】斯文。讀書人の意なり。

〔淨〕(九)照乘もて賢人を接ふ。敢て問ふ秀才何を以て此に至れるか。

〔生〕小生貧苦無聊、老大人此に在りて賽寶すと聞得、願はくは一觀を求め、以て懷抱を開かんとす。

〔淨笑ふ介〕既に(一〇)南土の珍に逢ふ、何ぞ(一一)西崑の祕を惜まんや、請ふ一觀を試みよ。〔淨、生を引ゐ寶を看る介〕

〔生〕明珠美玉は、小生見て之を知れり、其間數種、未だ何の名たるを委しうせず、老大人を煩はす一一指教せよ。

【解說　「大哥」は人に對する粗末なる敬稱なり、小使の如き者に對して云ふ故に此語を用ゐる、「既に斯文に」云云は、讀書人なる故に特別を以て面會せんとの意なり、「南海」云云以下四句は一人にて一句づつを唱ふるものにして、初對面に於ける應對の形式として戲曲に慣用する所なり、(第五齣の杜寶陳最良の應對參照)、第一句の意は、多寶寺に賽寶するを謂ひ、第二句は支那西方の玉門關を謂ふ、玆に玉門關を出すは無意味なるに似たれど、玉は寶物の一種なれば之に關したる語たるを失はず且つ第一句と字字相對せしめたるなり、第三句は知己と相談

【九】照乘。明珠なり。
【一〇】南土の珍。上文にて柳生を指す。
【一一】西崑の祕。寶珠に喩ふ。崑崙山は支那の西方に在りて玉を出すを以て名あり。

ずるの意、第四句は、寶珠を以て賢士を招くの意なり、「懷抱を開かんとす」は鬱鬱の氣を散ぜんとの意、「既に南土の」云云二句は、南方に於ける名士に逢ひたる上は、その人に對しては快く寶玉を觀覽せしめんとの意なり。】

〔駐雲飛〕〔淨〕 這是(二三)星漢神沙、這是煮海金丹和び鐵樹花なり、什麼の(二四)貓眼精光射し、(二五)母碌通明差するを少かんや、(二六)嗏、這是(二七)靺鞨柳金芽、這是(二八)溫涼玉斝、這是(二九)吸月の蟾蜍、和び(二九)陽燧冰盤化。

〔生〕 我が廣南に明月珠、珊瑚樹有り。〔淨〕 徑寸の明珠他を等讓し、便是幾尺の珊瑚も他を碎了。

〔生〕 小生大方之門に遊ばず、何に因つて此を覩るか。

【解說 「什麼の……少かんや」とは、「すべて有り」との意なり、精光を放つ貓眼も、光輝陸離(通明差)たる母碌もすべて備はれりとの意なり、「差」は光に强弱ありてちらちらすることなり、「徑寸の」云云二句は、汝が

【二三】星漢神沙、煮海金丹、鐵樹花。すべて珍寶の名なり。
【二四】貓眼。玉の名。
【二五】母碌。玉の名。
【二六】嗏。曲中の懸聲なり、意味なし、ヨイヤサ等と同樣なるもの。
【二七】靺鞨は地名。柳金芽は寶物の名。
【二八】溫涼玉斝。寶物の名、酒を溫むるも冷やすも心のままなる杯。
【二九】吸月的蟾蜍。寶物の名、月中の水を吸ひ取ると傳へらるる物。
【二九】陽燧冰盤化。寶物の名、是れ凸面レンズなり。

訪る廣南の明月珠が假令一寸の徑ありとて、左樣な物は賞づるに足らず、また珊瑚樹がよしや數尺ありとて之を碎くとも惜しからずとの意なり、(海外の珍寶に比べては劣等なりとの意)此の二句の「他」は一は明珠を表はし一は珊瑚を表はす、「大方の門に遊ばず」とは、其の道の事を知らざるの意なり。】

〔前腔〕 天地の精華、偏に番回に出在して帝子の家に到る。老大人に稟問す、這の寶は來路多に遠きか。

〔淨〕 遠きこと三萬里なる的有り、至少也一萬多程有り。

〔生〕 這般に遠きを、可是して飛來せるか走來せるか。

〔淨笑ふ介〕 那ぞ飛走して至るの理有らんや、都て朝廷重價にて購求せると、自ら來りて貢獻せると因る。

〔生歎く介〕 老大人よ、這の寶物蠢爾として知無く、三萬里の外、尙然足無くして至れり、生員柳夢梅滿胸の奇異、長安三千里の近きに到らんとするに、倒つて一人の購取するもの無く、腳有れども飛ぶこと能はず。

他重價高く懸下す、那の市舶能く姦詐、嗏、浪寶船をば捧げ。

【解說　「天地の」云云二句は、天下の珍寶は卻つて外國に產して中國の朝廷に集るとの意なり、「蠢爾として知無く」とは、小なる一塊の物にして意識を有せずとの意、「長安三千里」の長安とは帝都の意にして必ずしも眞の長安を謂ふに非ず、「市舶」云云は、寶物を舶載する商人の狡猾なるをいふ、「浪寶船をば撣け」とは、斯くの如き船は航海中に沈む方が優しなりとなり。】

【淨】　這の寶物の欠眞たるをを疑惑する麼。

【生】　老大人よ、便是眞なりとも、飢うるも食ふ可からず、寒きも衣る可からず。

他を看るに(三〇)虛舟瓢瓦に似たり。

【淨】　秀才の說に依らば、何をか眞寶と爲す。

【生】　欺かず、小生到つて是れ箇の眞正の(三一)獻世寶なり。我若し寶を載せて朝せば、世上應に(三二)無價なるべし。

【淨笑ふ介】　則怕る朝廷の上には、這樣の獻世寶也多著んことを。【生】但寶を龍宮に獻ずるは他を笑殺せん、便や寶を(三三)臨潼に鬪はすも也他に賽得べし。

【三〇】虛舟瓢瓦。實用に適せざる物なり。
【三一】獻世寶。天下を益するの寶なり。
【三二】無價。無限に高價なること。
【三三】秦の穆公諸侯を臨潼に會したるとき、楚の伍子胥大に文武の才を示して、秦人をして顏色無からしめたる故事に出づ。(是れ史實に非ず元曲伍員吹簫に出づる假說なり)

【解說　「寶を載せて朝せば」云云は、我が寶を朝廷に獻せば、世上に於て最も高價なる寶なりとの意なり、「寶を龍宮に」云云は、寶を船に積みて途中遭難し寶を海中に沈むることを笑ふなり、「便や」云云は、古の臨潼の會に出づるも我は決して人に劣ること無しとの意なり。】

【淨】　這等ならば便ち聖天子に獻與するに好了。

【生】　寒儒薄相にして、(三四)官府に伺候せんと要するだに尙能勾はず、怎で聖天子に見的んや。

【淨】　爾知らず、到是聖天子は見ゆるに好し。

【生】　則三千里の路資處し難し。

【淨】　一發難からず、古人黃金を壯士に贈れり、我衙門の(三五)常例銀兩を將つて、君の遠行を助けん。

【生】　果爾、小生は父母妻子の累無ければ、就此拜辭せん。

【淨】　(三六)左右よ、書儀を取り、酒を看よ。

【丑上る】　廣南愛んで喫す荔枝の酒、直北偏に飛ぶ榆莢の錢、酒到り、書儀此に在り。

【淨】　路費は先生收下よ。

【生】　謝了。【淨酒を送る介】

【三四】官府。高位の人。
【三五】常例銀兩。經常費なり。
【三六】左右。部下を呼ぶ稱なり。書儀は讀書の料として金錢を贈るなり。

【解說　「寒儒薄相」は、貧書生の貧弱なる風采なり、「路資」云云は、旅費の工面がつかぬとの意なり、「廣南」云云の對句は、一は酒を謂ひ、一は錢を謂ふなり、「楡莢」はその形錢の如き故に玆に「荔枝」に相對して用ゐたるなり。】

〔三學士〕〔淨〕　爾微醺を帶びて這の香山の罅を走出し、長安に向ひて路榮華有り。〔生〕

過無く寶を(三七)當今の駕に獻ぜん、去るを撒ち來るを收め再に他(苗欽差)に似んや。〔合〕

金鞭を驟めて及早く(三八)荷衣をば挂け、歸來錦上の花を望まむ。

〔前腔〕〔生〕　則怕呵、(三九)重瞳の眼有るも蒼天瞎なることを、波斯の賞鑒差り無きに似んや。〔淨〕

由來寶色眞假無し、只(四〇)淘金的の會く揀沙するに在り。〔合前〕

【解說　「去るを撒ち」云云は、往く者は追はず來る者は拒まずとの苗欽差の處置は他に得難しとの意なり、是れ柳生が苗欽差に感謝するなり、「荷衣をば挂け」とは、處士の服を脫して之を挂くること、卽ち官に就くの意なり、「歸來」云云は、出世して歸り來らんとの意なり、「則怕呵」以下三句は、我は非凡の才有れど、上に之を見出す眼力無きを危ぶむとなり、波斯人の寶玉を鑒識するが如く誤り無く我を見出す者有りやを慮

【三七】當今駕。今上天子なり。
【三八】荷衣。青衿なり、處士の服とす。
【三九】重瞳。眼中に二つの眸らること、非凡人なり。
【四〇】淘金的。鑄金家なり。

なとなり、「由來寶色」云云は、元來寶物の善惡は之を作る者の手腕に在りとの意、人自から磨けば光は發すべしとの意なり。】

〔生〕　告行了。

〔尾聲〕　爾は壯士に黃金を贈り氣色佳なり。〔淨〕

一杯の酒に(四一)酸寒奮發す。

則願的爾呵、

寶氣天に沖する海上の槎たらんことを。

(四二)烏紗巾上是れ青天、

俊骨英才氣儼然、

聞道く(四三)金門濟世に堪ふと、

行に臨み汝に贈る(四四)繞朝の鞭。

【解說　「一杯の酒」云云は、酒は寒を凌ぐの効あるものなるが、玆にて「酸寒」の字と爲して、貧書生を發奮せしむとの意にかけ用ゐたり。】

【四一】酸寒。貧書生なり。
【四二】烏紗巾。秀才の帽子。
【四三】金門。宮中の金馬門なり、漢の武帝學士をして詔を金馬門に待たしめ、顧問に備へたることあり。
【四四】晉の士會、秦に在る時、晉人之を誘ひ歸らしむ、秦の大夫繞朝、策を贈つて曰く、子秦に人無しと謂ふ勿れ、吾謀適〻用ゐられざるなりと。

第二十二齣　(一)旅寄

〔搗練子〕〔生・傘(二)袱・病容にて上る〕　人は路に出で、鳥は巣を離る。〔內風聲の介〕天を攪す風雪夢(三)牢騷たり、這幾日精神寒凍倒す。

香山嶼裏(四)打包し來り、(五)三水の船兒岸に到り開く、鄉心を寄せんと要して寒歲に値ふ、嶺南南上半枝の梅。我柳夢梅、秋風に(六)中郎に拜別し、因循に親友餞し、船を離れ嶺を過ぎ、早くも是れ暮冬なり、嶺北風嚴しきを隄防がずして、寒疾に感了、又(七)掃興して回るの理無し、一天の風雪、南安を望見すれば、好に苦也。

【解說　右は柳生が風雪を冒して旅する苦を叙せり、「岸に到り開く」の開は出帆なり、「因循に」云云は、殘り惜しげに友人に別るるの意なり。】

〔山坡羊〕〔生〕　樹槎牙餓鳶驚叫す、嶺迢迢として病魂孤弔ふ、破頭巾雹打ち風篩ひ、衣單を透して傘張兒哨と做る、路斜抄、急に箇の店兒の揹る沒し。雪兒呵。

偏に則白面の書生をば奚落る、怎生冰凌橋を斷てるを、高低を歩して蹬著。好了、一株の柳有り、酬將過ぎ去らん。方便の處柳・腰を跎す。〔柳を扶して過ぐる介〕虛囂、枯楊に儘す命一條、(八)蹊蹺、滑喇沙り跌一交す。〔跌く介〕

【解說　「樹槎牙」云云は枯木の枝に鳶の叫べるなり、「傘張兒」云云は、風に吹かれて傘が反對に喇叭の如く爲るを謂ふ、「斜抄」は小徑の羊腸たる意なり、「方便の處」云云は、恰も都合よき地點に楊樹の幹低く曲れるを謂ふ、「虛囂」とは、ここにては胸騷ぎするの意なり、「滑喇沙」云云は、するりと一度滑り倒るるの意なり。】

〔步步嬌〕〔末上る〕　俺は是れ箇の(九)臥雪先生煩惱沒く、背上に驢兒笑ふ、心知す(一〇)第五橋、那裏にか開年し、齋・村學に有らん。

〔生哎呀を作す介〕〔末〕

【一】旅寄。旅途にて寄寓すること。
【二】袱。風呂敷包み。
【三】牢騷。心不平に滿つること。
【四】打包。行脚僧の脊負物なり、上文にては風呂敷を負ふこと。
【五】三水。は廣東省に在る地名。
【六】中郎。貴き友人を謂ふ。
【七】掃興。不滿足なること、事成らざるの意あり。

【八】蹊蹺。手違ひを生ずること。上文よろめく意。
【九】臥雪先生。東漢の袁安なり、官は司徒に至る、貧士たる時洛陽大雪す人多く出でて食を乞ふに安獨り臥して起きざりきといふ。
【一〇】第五橋。橋の中央なり。

怎生來人怨語する聲高きか。

〔看る介〕呀。

甚ぞ城南の破瓦窰、箇の(二)精寒料を閃下てたるか。

〔生〕人を救へ人を救へ。

〔末〕我陳最良、館を求めんが爲に寒を衝いて此に到り、(三)彩頭兒、恰も弔水人に遇著、且つ他に由せて去かん。

〔生又叫ぶ介〕人を救へ。

〔末〕人を救へと聽說、那裏か積福の處に不是ん、俺試みに他に問はん。

〔問ふ介〕儞は是れ何等の人なれば、失脚して此に在りや。

〔生〕俺は是れ讀書の人なり。

〔末〕委是に讀書の人ならば、待俺儞を扶起來ん。〔未生を扶け相跌き諢くる介〕

【解說「心知す」云云以下は、旅途の半に於て何處にてか歲始に値ひ我が就職(敎師として)すべき村塾あらんとの意なり、「第五橋」とは古制に於て橋を十二連とせるを以て第五は中途

【二】精寒料。貧乏人の意。

【三】家を出でて第一に遭遇せる事にて前途の吉凶を卜するを彩頭兒といふ。

に當るなり、「精寒料」の料は陶磁器の意有り、故に此の二句は、其處に居るは何處の乞食野郎かとの意と、一方には「料」に對して破瓦窰(卽ち破れたる瓦燒の竈)の文字を用ゐたり、但し破は罵語にして必ずしもやぶれたる意に非ず「城南」の二字は、瓦窰多く城南に在るを例とするが故なり(南方は五行の火にあたる)、邦語にて、貴樣は何處の馬の骨か等云ふに類す、「館を求む」とは敎師としての就職口を探すなり、「弔水人」は水汲む人なり、「他に由せて去かん」とは、彼に構ふことなく去かんとの意なり。】

〔末〕請問す何方より此に至れるか。

〔風入松〕〔生〕(三)五羊城一葉南韶を過ぎ、柳夢梅來りて寶を獻ぜんとす。

〔末〕何の寶貨有りや。〔生〕

我孤身試を取らんとす長安の道、嚴寒を犯し衾單少くして病了、沒揣的斷橋溪道に逗著られ、險ふく跌折せんとす柳郎の腰を。

〔末〕儞自ら高中的を揣り、方めて去つて這等なる辛苦を受く可し。

〔生〕瞞かず說はん、小生は是れ箇の擎天の柱、架海の梁なり。

〔末笑ふ介〕卻るに怎生擎天の柱を凍折了、紫金の梁を撲倒了、這も也罷了、老夫頗る醫理を

【三】五羊城。廣州府城なり、南韶は廣東省の地名。

諳んず、邊近に梅花觀有り、權く將息し度歳して行け。

【解說　「試を取る」は科擧の試驗に應ずる意なり、「高中」は優等の成績を以て及第することなり、「瞞かず說はん」は、率直に申さんとの意なり、「擎天の柱」は天を支へ擧ぐる柱なり、「架海の梁」は海に架するの梁なり、孰れも非凡の人才に喩ふ、「末」の白「卻るに怎生」云云二句は、自ら非凡を誇る者（柳生）を冷笑したるなり。】

〔前腔〕〔末〕　(一四)尾生の般く柱を抱きて正に橋に題す、(一五)做倒地は文星の佳兆、(一六)草包を論せば俺に似て調藥に堪ふ、暫く梅花觀に將息して好からん。

〔生〕　此を去ること多に遠きか。〔末指す介〕看よ一樹の雪垂垂笑ふが如きを、牆の直上に綉旛飄へる。

〔生〕　這等ならば先生の引進を望む。

三十にして家無く路人と作り、
君と相見て卽ち相親しむ、

【一四】尾生。女子と約して橋梁の下に待ちしが女子來らざるに水漲り尾生柱を抱きて死せり。

【一五】做倒地。事を徹底的に成すこと。

【一六】草包。短氣なること、辛棒せざる者の意。

(一七)華陽洞裏仙壇の上、
東風に近くに似て別に因有り。

【解說　「尾生の般く」云云は、柳生が斷橋に逢ひ水邊に倒るる迄も尙科擧に應ずるの志を變せざるは恰も尾生が一念死に至ると同じく甚だ意志强しとなり、而して昔司馬相如は昇仙橋を過ぎ、高車駟馬に乘らずんば此橋を過ぎずと柱に題せしが、今此の柳生の心も是と同一なるなり、「文星」は文運を司る星なり、此句は、勇往邁進するは文運を開くの本なりとの意、「草包」云云は、意氣地無き者は我の如く醫を業とする程度に止まるとの意なり。】

【一七】華陽洞。道敎十大洞天の第八洞なり。

第二十三齣　(一)冥判

〔北點絳脣〕〔淨・判官に扮し丑・鬼に扮し筆簿を持して上る〕　(二)十地の宣差、一天の封拜、閻浮界、陽世栽埋し、又俺が這裏の門程をば邁む。

自家は十地の閻羅王殿下の一箇の胡判官是れ也、原十位の殿下有りしが、陽世の(三)趙大郎の家、那の今朝と江山を爭占するに因り、衆生を損折し、十停に一停を去了、此に因りて(四)玉皇上帝、人民の稀少を照見し、事例を裁減するを欽奉し、九州九箇の殿下、單俺が十殿下の位を減了たれど、印・歸著する無きにより、玉帝下官の正直聰明を可憐見、著して權に十地獄の印信を管せしむ、今日馬を走らせて任に到れり、鬼卒夜叉、兩傍の刀劍、容易に同じきに非ざる也。

【解說　「十地の宣差」とは第十地（卽ち地獄）の管轄官なり、「一天の封拜」云云は、天上玉帝の敕封を受けたることなり、「陽世」云云以下は、陽世にて地に埋めたる者は、我が門に

【一】冥判。冥土の裁判なり、本齣に說く所は佛道混合の冥土なりと知るべし。
【二】十地。楞嚴經に菩薩の習修に經る處の十種の地位を謂ふも上文にては第十地の地獄を指す。
【三】趙大郎家。宋朝なり。
【四】玉皇上帝。宇宙最尊の神なり。

入り來るとの意なり、「胡判官」とは姓を胡と稱する裁判官なり、「原十位の殿下有り」とは、玉帝の下に原來十名の王殿下ありたるを謂ふ、「趙大郎の家」とは宋朝なり、宋の皇室を指して斯く云ふは、宋の天子も亦玉皇帝の臣にして、其の資格は閻羅王等と略同等なり、今代理閻羅王たる胡判官より宋の天子を呼ぶは同僚のことを云ふに同じ、「金朝」二字は或本には「金達子」とあり、達子とは漢人が北方民族を呼ぶ不敬の語なれば、清朝に入りて憚る所ありて改めたるものなるべし、「十停に」云云は、十に一の割合にて人間を損じたるなり、「事例を」云云は、事務を省減するの聖旨に依るとの意なり、「單俺が」云云以下四句は、我が居る地獄の第十殿下の地位を裁撤したるが、官印の歸する所無き爲め、（卽ち殿下は無くともその事務を執る者は必要なれば、）玉帝我の聰明なるを見給ひて、我に命じて第十地獄の印信（卽ち事務）を代理掌管せしめたりとの意なり、「容易」云云は、尋常の光景に非ずとの意なり、陽世の官衙等とは甚だしく趣を異にせるなり。】

【五】花字。花押なり。

〔丑・筆を捧ぐる介〕　新官・任に到れば、都て這の筆にて刑名を判め(六)花字を押するを要す、請ふ新官他を一番喝采せよ。

〔淨・筆を看る介〕　鬼使、這の筆を捧了、好に干係せざらん也。

〔混江龍〕〔淨〕　這の筆架は那の(六)落迦山外に在り、肉蓮花高く案前に聳えて排ぶ、捧的是(七)功曹令史、字を識れるは當該なり。

【解說　「他を一番」云云は、此の筆に讚辭を寄せよとの意なり、「鬼使」云云以下は、鬼の役人が此の筆を捧げたるは殊に意味深しとなり、筆架は元來筆を置く器にして通常其の形鋸山の如し、而して落架山頂筆架の狀を爲せるを以て之に喩へたるなり、山外は山の外に非ず、遠き落迦山との意なり、「肉蓮花」は肉色の蓮花なり、筆架は其狀また蓮花の如し、「案前」とは桌上なり、是れ筆架の桌上に在るに喩へたり。】

〔丑〕　筆管兒は。

〔淨〕　筆管兒は、是れ(八)手想骨、腳想骨。竹筒の般く剉的(九)圓滴溜たり。

〔丑〕　筆毫は。

【六】落迦山。補陀落迦山なり浙江の海に在り、觀音大士化現の地なりといふ、但し上文の落迦山は地獄の山名ならん。
【七】功曹令史。屬官なり。
【八】手想骨。手骨なり。腳想骨は腳骨なり。
【九】圓滴溜。圓くしてなめらかなること。

〔淨〕　筆毫呵、是れ(一〇)牛頭の鬚、夜叉の髮。鐵絲兒にて揉定す(一一)赤支の毬。

〔丑〕　判爺選に上的哩。〔淨〕

這の筆頭公は是れ(一二)遮須國の選的人才なり。

〔丑〕　甚の名號有りや。〔淨〕

這は(一三)管城子(一四)夜郎城に在りて封拜を受了。

〔丑〕　判爺與哩。〔淨笑つて舞ふ介を作す〕

嘯くこと一聲(一五)支兀另、漢の(一六)鐘馗すら其の冠正しからず、舞ふこと一回(一七)疏喇沙、(一八)斗の河魁、墨に近づく者は黑し。

〔丑〕　喜哩。〔淨〕

喜しき時節は(一九)淶河橋に筆兒を提げて要に去かん。

〔丑〕　悶呵。〔淨〕

悶しき時節は(二〇)鬼門關に筆を投じて歸來せん。

【解說　「鐵絲兒にて」云云は、胡判官の用ゐんとする冥府の筆は

【一〇】牛頭。地獄の牛頭鬼なり。
【一一】赤支。鬼の名なり。
【一二】遮須國。佛地の名なり。
【一三】管城子。筆の異名なり。
【一四】夜郎城。今の貴州の西方に在りて昔鬼國と稱せられたり。
【一五】支兀另。嘯く聲。
【一六】鐘馗。唐の進士なりといふ、俗に能く鬼を服する人なりと傳ふ。
【一七】疏喇沙。舞ふ態を形容する語。
【一八】斗。北斗星なり。河魁は其第一星なり。
【一九】淶河橋。冥土の橋なり、（山東にも此名の橋あり）
【二〇】鬼門關。冥土の關なり、廣西にも此關あり。

各怪物の毛を雜へ鐵線を以て括りたりとの意、「判爺」とは判官に對する敬稱なり、「選に上的哩」は、鬼使が胡判官の實職に任ぜられたるを祝する語なり、「這の筆頭公」云云は、筆にことよせて自から遮須國の第一の人才なれば此官に任ずるは當然なりとの意を述べたり、筆頭公は第一人者との意を有す、卽ち自から指せるなり、「管城子」も亦筆を稱する語なれど又別に一城の長官との意にかかる、卽ち胡判官自から指すなり、胡判官は鬼國に於て十地の宣差たる敕封を受けたるなり、「判爺與哩」とは、胸中愉快ならんとの意なり、「嘯一聲」云云は、我一度嘯けば其聲は漢土（支那）の鐘馗すら驚くならんとの意なり、「冠正しからず」は驚きて冠歪むを謂ふ、「舞一回」云云以下は我れ起ちて舞へば日河魁に値ふが如く諸事皆凶なりとの意なり。（星命家の說に日河魁に値ふは凶とす）「墨に近づく」云云は、凶に變ずるの意なり、「淦河橋」は奈何の語より出でたる名なり、亡者往きて此の橋に至れば奈何ともする無きなり、但し右の曲にては單純に地獄の橋名として解すべし、橋邊に遊びて詩文を作ること陽世の樂と同樣なるなり。

【丑】判爺は可に（三）榜に上來か。

【淨】俺も也曾て神祇を考せり。

【三】榜。科擧及第人名を揭示する板なり。

朔望の旦・名天榜に題せり。

【丑】可に書を會來か。

【淨】星辰を攝す。

（三）井鬼の宿、俺可に也文・書齋に會す。

【丑】判爺高才なり。【淨】

（三）鬼仙の才を做弗迭ざれど、（三）白玉樓空を摩し賦を作る、（三）風月の主と陪得過て、（三）芙蓉城遇ふこと晩く懷を書す、便や（三）四大洲日月を轉輪するを寫不盡るも、也（三八）五瘟使を差的著風雷に號令す。

【解說　「榜に上來」とは及第して揭示せらるること、「神祇を考せり」とは神祇科の受驗をなしたりとの意、「名天榜に題せり」とは、我は及第して天の揭示板に名を列したりとの意なり、「星辰を攝す」とは、文章の雄大なるに喩へたり、「井鬼の宿」云云は、文運我に在りとの意なり、「便や四大洲」云云二句は、天地日月の莊嚴を寫す程の筆は無けれど、惡神を使役し風雷神を驅使し得る程

【三】井鬼。二つの星の名なり陽世にては不吉の星とす、冥土にては然らず。

【三】唐の李白は仙才、李賀は鬼才と稱せらる。

【三】白玉樓。天上に在る高閣なり、天帝李賀を召して其の賦を作らしむといふ。

【三】梁の吏部尙書たりし徐勉はかつて客と夜坐したる時官を求むる者あり、勉曰く今夕は只風月を談ず可し公事に及ぶべからずと。

【三】宋の石曼卿死して後故人之に遇ふ、曰く我仙と爲りて芙蓉城に主たり。

【三】四大洲。世界を四部に分ち、東勝神洲、南贍部洲、西牛賀洲、北俱盧洲なり。

【三八】五瘟使。疫病神なり。

の筆力を有すとの意なり。】

〔丑〕 判爺見(二九)地分有らん。〔淨〕 地分有らば、則合に(三〇)北斗司、閻浮殿、俺が邊傍に立つべし、衙門沒くんば、卻つて怎生(三一)東嶽觀、城隍廟、也人を左側に塑せんや。

〔丑〕 誰に讓るか。

〔淨〕 便ち百里の城、高く捧手し、大菩薩の好相莊嚴にして坐位に乘ずるに讓る。

〔丑〕 誰を惱むか。

〔淨〕 怎で三尺の土低く分氣し、小鬼卒の淸奇古怪にして基階に立つに對せんや。

〔丑〕 紗帽は些し古氣。〔淨〕 但脚を站て、一管の筆一本の簿・塵泥(三二)軒冕。

〔丑〕 筆乾了。〔淨〕 筆を潤さんと要せば十錠の金、十貫の鈔・紙陌錢財。

【二九】 地分。天帝より與へられたる地位なり、諸侯たるの資格なり。

【三〇】 北斗司。冥土の一長官名。閻浮殿は冥土の殿名。

【三一】 東嶽觀、城隍廟。何れも道教の神を祠れる寺院なり。

【三二】 軒冕。神像の衣服なり。

【解說 「地分有らば」以下は、天帝若し我に資格（廟を有するの資格）を授くるとせば、當に北斗司閻浮殿と其廟を列すべきものなり、而して我には當然衙門（一面に廟の意あり）無からざるべからず、若し然らずとせば、何ぞ東嶽觀城隍廟等に於て我が像を主神像の近くに立つることあらんやとて部下に誇るの意なり、「誰に讓るか」とは汝（胡判官）は誰に對しては謙讓すべきかとの意、「便ち百里の城」云云は、管轄の地を擧げて大菩薩の坐前に謙讓すとの意なり、「三尺の土」云云以下は、三尺程の低き塑像と爲りて隱忍し、階段に立てる奇相の鬼（塑像の）共と相對立するを好まずとの意なり（道廟には上座に主神像あり左右の階下に從者たる鬼神の像あるを常とす）「但脚を站て」云云は、胡判官自らその塑像に就いて述べたるなり、「筆を潤さんと」云云は、余の潤筆料は多額の金子を要すとの意なり、卽ち神も錢に依つて筆の使分けを爲すの寓意あり。】

〔丑〕 (三三)點鬼簿は此に在り。〔淨〕 則見る沒搭三(三四)花分魚尾冊を展き、一を賞する無く日子(三五)虎頭牌を挂くるを、眞に乃ち是れ(三六)

【三三】 點鬼簿。亡者名簿なり。

【三四】 花分魚尾冊。書籍の各葉の紙の折目に丙字形の印あるを謂ふ。

【三五】 虎頭牌。衙門執務の日は常に門前に挂くる木牌なり。

【三六】 春秋晉の史官を董孤といへり、後に晉の干寶搜神記を撰したるが人呼んで鬼董孤といふ。

鬼董狐・款を落了、春秋傳某年某月某日の下、崩薨葬卒大に注脚す、假如他(三七)支祈獸・樣に上了とも、禹王の鼎を把つて各山各水各路の上、魍魎魑魅細に分腮せん。

【解說 「一を賞する無く」以下二句は、一日の休暇すら無く日日に裁判事務に服務せるの意なり、「眞に乃ち」云云以下三句は、點鬼簿の內容を見て之を述べたるなり、卽ち內容は奇怪なる亡者の經歷罪過等を列記しあるが故に、鬼董狐の落款せる書の如く、また春秋傳の如く年月日の下に崩薨葬卒等の字到る處に記しありとの意なり、「假如他」云云以下三句は、たとひ如何なる兇惡なる妖怪たりとも我は禹王の如く必ずその罪惡を看破しその輕重に依りてそれぞれ處分すべしとの意なり、(春秋は單に史書に非ずして嚴格に人の功罪を褒貶したるものなり、此場合に於ても其意を主とせることに注意すべし)。】

【三七】 昔禹王は水神巫支祈を鎖封せりといふ。
【三八】 子時。夜半なり。
【三九】 忆忆察察。墨磨る音なり。
【四〇】 烏龍は墨なり。眼は硯の斑文なり。

〔丑〕 侍俺墨を磨らん。〔淨〕看るに他(三八)子時の硯、(三九)忆忆察察、(四〇)烏龍・眼を薰して精神を顯はす。

〔丑〕 雞唱了。〔淨〕

聽くに(四一)丁字牌、(四二)冬冬登登、(四三)金雞夢を翦り魂魄を追ふ。

〔丑〕 爺に稟す(四四)卷を點せよ。〔淨〕但(四五)格子眼を點上、四萬八千三界の(四六)有漏の人名を串出し、烏星砲粲せん、怎で筆尖頭を按下し、一百四十二重無間地獄に挿入し、鐵樹花開かんや。

〔丑〕 大押花せよ。

〔淨〕 哎也、花字を押すは。止(四七)發落簿の、(四八)剉燒舂磨の一靈兒に過ぎず。

【解說 「看るに他」云云以下は、墨磨る音の物凄きを謂へり、「但格子眼」云云以下三句は、帳簿を調べ各界陽世の人名を抽き出して悉く放散せんとの意なり、卽ち陽世の人の罪を赦すなり、「怎で筆尖頭」云云以下三句は、何ぞ此の筆を以て人人をば再び逃れ難き地獄に陷るに忍びんやとの意なり、(鐵樹は永久に花開かず、卽ち逃れ難きこと)「止發落簿」以下三句は、ただ發落簿に一名だ

【四一】 丁字牌。丁字形の木牌なり、之を打ちて時を報ずるなり。
【四二】 冬冬登登。丁字牌を打つ音。
【四三】 古時赦詔を頒つの日、金雞を竿に設け口に絳旛を銜ましむと。
【四四】 卷は簿册なり。點は名簿の人名を調べ筆にて點を施すこと。
【四五】 格子眼。簿册の方罫なり。
【四六】 有漏。陽世なり。
【四七】 發落簿。罪囚を各その刑場に送遣するに用ゐる帳簿。
【四八】 剉燒。火責めの地獄。舂磨は臼にて人を搗く地獄。一靈兒とは一個の魂魄、卽ち一亡者。

け呵責場に送るべき者有りとの意なり。】

〔丑〕一箇の請字を少けり。

〔淨〕請書に登すは。

左則是那の(四九)虚無堂、(五〇)癩癆蠱膈の四正客。

〔丑〕稱竿を弔起來。〔衆卒應ずる介〕

〔淨〕(五一)髮稱竿。

看る業重くして身輕きを、(五二)衡石程書秦の獄吏。

〔內に哎喲と饒也苦也と叫ぶ介を作す〕

〔丑〕隔壁の九殿下鬼を拷す。〔淨〕

(五三)肉鼓吹、聽く神啼鬼哭を、毛鉗刀筆(五四)漢の喬才、這の時節呵、爾便是(五五)關節沒く、(五六)包待制人其の笑を厭ふ。

〔內哭く介〕

恁の風景、誰か聽的ん棺槨無きの(五七)顏修文・子之を哭して哀しむを。

【解說　「一箇の請字」云云は、發落簿に花押したる上は「請」字

【四九】虚無堂。冥土の堂名。
【五〇】癩癆蠱膈。四種の病名。
【五一】髮稱竿。罪人の髮を括りて弔り衡る秤。
【五二】衡石。秤と分銅なり。程書とは程氏の刑書なり、秦の獄吏に程邈といふ者ありき（秦法は苛刻なり）。
【五三】肉鼓吹。叫喚すること。
【五四】喬才。假才なり、姦才の意有り、毛鉗刀筆の語によりて見るに是れ蕭何なり。
【五五】關節。賄賂の意なり。
【五六】包待制。宋の包拯なり、待制は官名、此人法を執ること嚴格にして公平なりき。
【五七】顏修文。顏回なり、死して冥府に於て修文郎と爲れりとの傳說あり。子は孔夫子なり。論語先進篇顏淵の死に由來せる語なり。

を記すべき筈なるに未だ記さざる故部下の鬼が胡判官に注意したるなり、次の「請書」に云云より「四正客」までは、招待狀（請書）に記すは、宴會場を虚無堂とし「癩癆蠱膈」等（四種の病氣）を四人の正客と爲さんとの意、茲に突然と招待狀云云の語あるは一見甚だ無意義なるに似たれど、是れ「請」字の脫漏を注意せられ、その「請」を「請書」として故らに斯く述べたるなり、「衡石」云云は、刑罰苛酷にして假借せざる意なり、「毛鉗刀筆」云云は蕭何の如く執法の峻嚴なる意、「爾便是」云云以下は、受刑者は何等の減刑運動を行ふに由なく恰も包拯の裁判を受くるが如しとの意なり、「恁の風景」云云以下は、此等受刑者の爲に憐み哭する者一人も無しとの意なり、茲に顏修文を出だせるは「之を哭して哀む」（前句人其笑を厭ふに對す）と云はんが爲にして別に深意無し。】

〔丑〕判爺害怕哩。

〔淨惱む介〕哎。

(五八)樓炭經、是れ俺が(五九)六科五判なり、刀花樹、是れ俺が(六〇)九棘三槐なり、臉(六一)婁搜、風髯赳

【五八】樓炭經。地獄の事を記したる佛教の經文。
【五九】六科。官衙の六課、中央政府に吏、禮、戶、兵、刑、工の六科あり、地方官衙も又之に倣ひて課を分つ。五判は五種の刑罰の判定。
【六〇】九棘三槐。公卿の意なり。
【六一】婁搜。威嚴あること。

赴、眉剔豎、電目崖崖たり、中書鬼考、錄事神差を少不得。

陽世の那の金州判・銀府判・銅司判・鐵院判に比著。

(六二)白虎・官に臨む、一樣價く刑名に(六三)打貼し、伍作を催さんや。

【解說　右はすべて胡判官が自己の威力あることを敘べたるなり、「樓炭經」は我が憲法なり、刀花樹（樹枝みな刀劍）は陽世の九棘三槐にも比すべきものなり（公卿の位に在ること）我が面貌は威嚴あり、髯は針の如くして長く、眉は濃くして揚り、眼光は爛爛たり、此の威風ある我が部下には「中書鬼考」「錄事神差」等の官員無かるべからず（即ち有りとの意）、陽世に於ける收賄官吏（州判府判司判院判は官名にして金屬の名稱を上に附したるは收賄の寓意）と比すべきに非ず、彼等（陽世の判官）も我も同じく是れ刑を司る官なれど、我は陽世の官吏の如く收賄して刑を曲ぐることなしとの意なり。】

實に則俺が陰府の裏(六四)溼生を注し化生を牒し胎生を准じ卵生を照す。

(六五)青蠅・赦を報じ、十分的に功德を磊齊し三階を轉ず、威凜凜として人間に命を掌り、韻巍巍と

【六二】白虎。星の名なり、刑を司る星なり。
【六三】打貼。錢を費して官吏を買收すること。
刑名は刑を司る吏員。
伍作は驗屍人なり。
【六四】溼生は魚類。化生は蟲類。胎生は獸類。卵生は鳥類。
【六五】青蠅。讒言者に喩ふ。

して天上に災を消す。

(六六)掌案的を叫ばん、這の簿上(六七)開除都て也明白なり、還幾宗の人犯、應該に發落了べきもの有りや。

〔貼、吏に扮して上る〕人間の(六八)勾令史、地下の列功曹、爺に稟す、殿下缺了に因り、地獄空虛なること三年、則(六九)枉死城中に輕罪の男子四名、趙大、錢十五、孫心、李猴兒、女囚一名杜麗娘有り、未だ發落を經ず。

〔淨〕先づ男犯四名を取らん。〔生・末・外・老旦、四犯に扮し、丑押りて上る〕

〔丑〕男犯帶到れり。

【解說　「實に則」云云の文中に注（記入すること）牒（通牒すること）准（官文書を接受すること）照（照會すること）の四字を用ゐたるは、普通事務の取扱を爲せりとの意なり、「青蠅」云云二句は、寃罪を明かにし大に功德を積みて官等三級の昇進ありたるの意なり、「幾宗の人犯」は幾種の囚人なり、「人間の勾令使」以下二句は對句にして、陽世の屬官を冥土の屬官と對稱したるなり、「趙大」云云は四名の人名なり、「男犯帶到

【六六】掌案的。書吏なり。
【六七】開除。記入と删除。
【六八】勾令史。巡査の如き官吏。
功曹は官衙の屬官。
【六九】枉死城。冥土の城名なり、寃死したる亡者の居る處。

れり」とは、男囚を伴れ來りたりとの意なり。】

〔淨〕(七一)點名する介」趙大は何の罪業有りて枉死城に脫在たるか。

〔生〕鬼犯は甚の罪も沒し、生前歌唱を喜ぶこと些しなりき。

〔淨〕一邊に去れ、錢十五を叫ばん。

〔末〕鬼犯は罪無し、則是一箇の小小なる房兒を做了、沈香を壁に泥たり。

〔淨〕一邊に去れ、孫心を叫ばん。

〔老旦〕鬼犯は些小の年紀にて、好んで些の(七二)花粉錢を使へり。

【解說 「脫在」は世を脫して來り居る意なり、「沈香を」云云は、沈香を土に混じて壁を塗るなり。】

〔淨〕李猴兒を叫ばん。

〔外〕鬼犯は是れ些の罪有り、(七三)男風を好めり。

〔丑〕是れ眞なり、便ち地獄裏に在りて、還這の小孫兒を勾上れり。

〔淨惱む介〕誰か儞をして嘴を挿ましめたる、起ち去つて伺候せよ。

〔寫簿の介を做す〕鬼犯をして發落を聽かしめん。〔四犯同じく跪く介〕

【七〇】點名。名簿と囚人を照り合はすなり。
【七一】花粉錢。遊興費なり。
【七三】男風。男色なり。

〔淨〕俺初めて權印す、且つ刑を用ゐず、儞們を赦して卵生に去罷。

〔外〕鬼犯們恩爺に稟問す、這箇卵は是れ甚麼の卵ぞや、若し是れ(七四)回回卵ならば、又邊方に生在去了。

〔淨〕哇、還人身を想ふか、蛋殼裏に向ひて走り去れ。

〔四犯泣く介〕哎、人の被に宰了れん。

〔淨〕也罷、(七五)陽間をして宰りて儞を喫はしめじ、趙大は歌唱を喜ぶ、眨して黃鶯兒と做さん。

〔生〕好了、(七六)鶯鶯小姐と做りて去らん。

〔淨〕錢十五は香花房子に住みぬ、也罷、儞燕窠裏に去つて受用ことを准す、箇の小小燕兒と做れ。

〔末〕恰も好し(七七)飛燕娘娘と做哩。

〔淨〕孫心は花粉錢を使ふ、箇の蝴蝶兒と做れ。

【解說 「小孫兒」とは、前記の孫心を謂ふ、若き者なる故小孫兒と呼べるなり、「鬼犯をして」云云は、四人共に判決(差遣の)を云ひきかせんとの意なり、「初めて權印す」とは、初

【七四】回回。マホメット教人。
【七五】陽間。陽世なり。
【七六】鶯鶯小姐。唐の美人崔鶯鶯なり。
【七七】飛燕娘娘。漢の美人趙飛燕なり。

めて事務代理を司るとの意なり、「恩爺」とは刑を酌減し吳れたる恩ある檀那樣との意にして、胡判官に對する敬稱なり、「回回卵」云云は、回教人は今の新疆地方に居住せるが故に斯く云へるなり、「陽間をして」云云は、陽世の人が汝を殺さざるやうに爲さんとの意なり。】

〔外〕鬼犯は便ち孫心と同じく蝴蝶と做りて去らん。

〔淨〕儞は是れ那の男風を好的李猴なり、儞をして蜜蜂兒と做り去らしめむ、屁窟裏に長に一箇の鍼を拖け。

〔外〕哎喲、俺をして誰を釘しに去かしむるか。

〔淨〕四箇の蟲兒分付を聽け。

〔油葫蘆〕蝴蝶呵、儞は粉版花衣・翦裁に勝る。蜂兒呵、儞忒だ(七七)利害、甜口兒に咋著細腰捱ぐ。燕兒呵、香泥を斬りて影を鉤簾の內に弄す。鶯兒呵、笙歌を溜して夢を紗窗の外に警しむ。恰も好し箇の花間の四友拘礙無し。

則陽世裏の孩子們輕薄にして。

怕る彈珠兒にて打的呆し、扇梢兒にて撲的壞るを、儞宜しく題して畫に入り(七八)高人の愛するに不枉了、則儞の翅掷兒をして展いて春色をば鬧すこと場し來らしめん。

【七七】利害。惡辣の意、又激烈なること。

【七八】高人。高尙風雅なる人なり。

【解說　「粉版花衣」云云は、自然の美服は人の裁縫せるものに優れりとなり、「花間四友」とは、蝶蜂燕鶯なり、「拘礙無し」とは、障害無きことなり、「呆」は俗に眼を廻すことなり、小兒の爲に彈丸にて打たれ團扇にて打たるるを注意せるなり、「則儞の翅掷兒」云云は、汝等をして翼を開き遊ばしめ春の景色を賑やかにせんとなり。】

〔外〕俺做蜂兒的來らず、再び來らば儞箇の判官の腦を釘腫さん。

〔淨〕打つを討むるか。

〔外〕小性命を可憐見。

〔淨〕罷了、風兒に順ひて放ち去らん、快く走け快く走け。〔淨・氣を噀く介〕〔四人各色と做り飛び下る〕〔淨(七九)鬼門に向ひ噓氣吠聲の介を做す。〕

〔丑、旦を帶ゐて上る〕天台路有れど我に逢ひ難し、地獄情無し誰をか恨まんと欲す、女鬼見ゆ。

〔淨頭を擡げ、背く介〕這の女鬼到ろ幾分の顏色有り。

〔天下樂〕猛ち見了蕩地驚天の女俊才、哈也麼哈來つて俺が裏に來る。

【解說　「打つを討むるか」とは、汝打つぞやとて叱責するなり、「天台」云云二句は小姐の吟

【七九】鬼門。樂屋の入口なり。噓氣吠聲は、氣合をかけるなり。

ずる對句なり、小姐の境遇を歎く意なり、「女鬼」とは女の亡者なり、「幾分の顔色有り」とは容色の優れたるを謂ふ、「蕩地」云云は、絶世の美人との意に當る。】

〔旦、苦を叫ぶ介〕〔淨〕

(八〇)血盆中・苦を叫ぶ觀自在。

〔丑耳語する介〕判爺權く收めて箇の(八一)後房夫人と做せ。

〔淨〕哧、(八二)天條有り、擅に囚婦を用ゐる者は斬ると。

則儞那の小鬼頭狐亂に(八三)篩す、俺判官頭・何處にか買はん。

〔旦哎と叫ぶ介〕〔淨身を回す介〕

是れ曾て他粉油頭忒だ弄色なるを見ざりき。

那の女鬼をして上り來らしめよ。

〔那叱令〕瞧了儞(八四)潤風風なる粉腮、花臺酒臺に到り、(八五)溜些些しき短釵、歌臺舞臺に過ぐ、(八六)笑微微しき美懷、(八七)秦臺楚臺に住す、甚に因的病患來か、是れ誰が家の嫡支派ぞや、這の顔色は(八八)泉臺に在るに像似はず。

【八〇】血盆。血池なり地獄の刑場。
【八一】後房夫人。妾なり。
【八二】天條。天帝の定めたる法律。
【八三】篩。べらべらと喋言ること。
【八四】潤風風。ふくよかなること。
【八五】溜些些。つやつやしきこと。
【八六】笑微微。なまめかしきこと。
【八七】秦臺楚臺。孰れも仙女の居所なり。
【八八】泉臺。黄泉の臺。

〔旦〕女囚は曾て人家に過がざりき、也曾て飲酒せざりき、是れ這般の顔色は則南安府後花園梅樹の下に在りて、夢に一秀才を見、柳一枝を折り、奴の題詠せんことを要め、留連婉轉、甚だ是れ多情なりし爲、夢醒來つて沈吟し、詩一首を題せり、「他年蟾宮の客に傍ふを得るは、梅邊に在らずんば柳邊に在らん」と、此が爲めに感傷し、一命を壞了。

【解說　「血盆中」云云は、小姐の苦を叫ぶ樣は、恰も血池の中にて觀世音の苦を叫ぶが如しとなり、「則儞那の」云云は、汝等鬼卒餘計な事を云ふ勿れ、我判官頭たるもの何ぞ妾を買はんやとの意なり、「是れ曾て」云云は、我未だ此女の貌の如き美しきものを見ざりきとなり、「是れ誰が家の」云云は、誰の女兒なるかとの意なり、「嫡支派」は、嫡派か支派かとの意なり。】

〔淨〕謊也、那ぞ一夢にして亡ぶるの理有らんや。

〔鵲踏枝〕(八九)一溜溜たる女嬰孩、夢兒の裏能く(九〇)審耐す、誰か曾て(九一)圓夢の招牌を挂けんや、誰か儞が和めに(九二)拆字道白せんや、哈也麽哈、那の秀才何に在りや、夢魂中曾て誰をか見來。

〔旦〕曾て誰をも見ず、則見き朶の花兒閃下し來るを、好に一驚せり。

【八九】一溜溜。若若しきこと。
【九〇】審耐。安らかなること。
【九一】圓夢。夢占なり。招牌は看板なり。
【九二】拆字道白。文字を分解して意味を探ること。

〔淨〕南安府後花園の花神を喚取して(九三)勘問せん。〔丑叫ぶ介〕

〔末、花神に扮して上る〕紅雨數番・春落魄し、山香一曲・女消魂す、老判大人(九四)請了。〔擧手の介〕

〔淨〕花神よ、這の女鬼說是く後花園に一夢し、花飛びしが爲め驚閃して亡べりと、可に是るか。

〔末〕是也、他秀才と纏緜を夢的、偶爾落花驚醒し、這の女子色を慕ひて亡びぬ。

〔淨〕敢便是儞花神秀才に(九五)假充し、人家の女子を迷誤せしならん。

〔末〕儞俺を甚に著きて他を迷來せりと說ふか。

【解說　「一溜溜」以下二句は、まだ年若き幼女なれば夢安らかなるべき筈なりとの意（卽ち斯くの如きむづかしき夢を見る年齡とも見えずとの意）、「誰か曾て」云云二句は、我は夢占を爲す易者にも非ず、又文字の謎を解く者にも非ず（我に夢を說き詩を云ふも何も分らず）との意なり。「紅雨」云云二句は花神の吟ずる對句にして春過ぎ去りたるの意なり。】

【九三】勘問。審問。
【九四】請了。挨拶の語、御免下さい。
【九五】假充。僞り扮するなり。

〔淨〕儞俺が陰司裏知道ずと說呵。

〔後庭花滾〕但尋常の春自在なれど、恁司花忒だ弄乖し、眨眼兒に元氣を偸む、豔樓臺、(九六)克性子に春工を費し、酒債を淹らす、恰も好きは九分の態、儞十分の顏色を做さんと要す、儞那の狐弄的花色兒を數著來。

【解說　「但尋常の」云云以下三句は、汝は普通の春に普通の事を爲すは汝の心のままなれど、花を司るに甚だ不正を弄し、暫くの間に物の精氣を吸ひ取るは不都合なりとの意なり、「豔樓臺」は女子の居る處を謂ふ、「克性子」以下二句は、勝手氣儘に春を濫費し酒を飲みて其の價を拂はざるの意なり、「恰も好し」云云以下は、春の樂は九分を以て可とすべきに、汝は十分の春を作さんとせり、汝が濫りに弄べる花名を陳べよとなり。】

〔末〕我便ち數來、碧桃花。〔淨〕

他(九七)天台に惹く。

〔末〕(九八)紅梨花。〔淨〕

【九六】克性子。我が儘なり。
【九七】天台。漢の劉晨と阮肇とが藥を採りに入りて二仙女に會ひし處。碧桃は天上の仙桃なり、故に是れ關係ある語なり。
【九八】梨。妖邪を避け百病を治す。

妖怪を扇ぐ。

〔末〕（九九）金錢花。〔淨〕財を下的。

〔末〕綉毬花。〔淨〕

（一〇〇）綵を結得。

〔末〕芍藥花。〔淨〕

（一〇一）心事諧ふ。

〔末〕木筆花。

（一〇二）寫して明白。

〔末〕水菱花。〔淨〕

（一〇三）鏡臺に宜し。

〔末〕玉簪花。〔淨〕

（一〇四）挿戴に堪ふ。

〔末〕薔薇花。〔淨〕

【九九】金錢。財なり。

【一〇〇】綵。紅絲を結ぶなり。綉毬は絲にて飾れる毬に通す。

【一〇一】思ふこと達するなり、芍藥は藥の意を主とす。

【一〇三】契約すること。筆の意を主とす。

【一〇三】鏡。菱花に喩ふ。

【一〇四】簪の意を主とす。

（一〇五）露腮を渲す。

〔末〕臘梅花。〔淨〕

（一〇六）春額に點ず。

〔末〕翦春花。〔淨〕

（一〇七）羅袂裁つ。

〔末〕水仙花。〔淨〕

（一〇八）綾襪をば踹む。

〔末〕燈籠花。〔淨〕

（一〇九）紅影篩ふ。

〔末〕酴醾花。〔淨〕

（一一〇）春醉の態。

〔末〕金盞花。〔淨〕

（一一一）合巹の杯と做る。

〔末〕錦帶花。〔淨〕

【一〇五】薔薇の露は、化粧に用ゐる。

【一〇六】宋武帝の女、人日、簷下に臥し梅花額上に點す、之を梅花粧といふ。

【一〇七】翦の意を主とす。

【一〇八】水仙の根白きに喩ふ。

【一〇九】燈火の意を主とす。

【一一〇】酴醾。醉態に喩ふ。

【一一一】盞は杯なり。

(二二) 裙褶の帶と做る。

〔末〕 合歡花。〔淨〕

(二三) 頭擡ぐるに懶し。

〔末〕 楊柳花。〔淨〕

(二四) 腰恁く擺す。

可に (二五) 留得在、幾椿兒儞自ら猜せよ、哎、天公の計策無きをば、儞道へ爲甚麼女裙釵を流動了、剗地裏牡丹亭に、又他 (二六) 杜鵑花の魂魄をば洒げるかを。

【解說】 楊柳花以下約二十個の花名あるを略せり、皆情事に關する寓意の太しきものなれば也、「可に留得在」以下二句は、數種の花名は汝に留餘す汝自ら解せよとの意なり、「天公」云云以下は天は故らに人をして迷はしむるが如きことを爲さざるに、何故婦女をして牡丹亭に悲哀の情を止めしめたるかとなり。】

〔末〕 這の花色花樣は、都て是れ天公定下來的なり、小神は (二七) 遵奉欽依するに過ぎず、豈故

【二二】帶の意を主とす。
【二三】睡眠の意なり。
【二四】楊柳の如きしなやかなる腰つき。
【二五】留榴音通ず。
【二六】杜鵑花。つつじの花なり、又血に啼く杜鵑に通ず。
【二七】遵奉欽依。謹んで命に遵ふの意。

意に人を勾すの理有らんや、且つ看よ多少の女色、那ぞ花を玩んで亡ぶる有らんや。

〔淨〕 儞說ふ、自來女色は、花を玩んで亡ぶる有る沒しと、儞に數へん、聽著。

〔寄生草〕 花・青春をば賣り、花錦繡の災を生ず、一箇の (二八) 夜舒蓮・留仙帶を扯不住、一箇の海棠絲・香囊怪を翦不斷、一箇の瑞香風・(二九) 非煙の在るに趕不上る有り、儞道ふ花容那箇か花を玩んで亡ぶと、可し道はず儞這の花神の罪業花の敗るるに隨せたるを。〔末〕 花神罪を知れり、今後再に花を開了かじ。

【解說】 「且つ看よ多少の女色」云云は、古來美人は少なからざれども花を玩んで死したる者無しとの意なり、「花青春をば賣り」は花が青年の人を傷ふとの意、次の句は、花は情に關する災を生ずとなり、「海棠絲」は海棠の枝なれど玆にては毛の如きを謂ふ、「瑞香」は三椏なり、其の香は淫なり、「非煙在」の在は生存の意なり、此句は美人をして情懷を逵せしめずして死せしむるの意なり、「儞道ふ」以下は、汝は美人の花を玩びて死せる者無しと云へど、汝花神に罪あるが爲美人を死なしめたることを汝何故に認めざるかとの意なり。】

〔淨〕 花神よ、俺這裏に已に花間四友を發落過、儞に付して收管せしむ、這の女囚色を慕つて

【二八】夜舒蓮。夜開きて晝閉づる花。
留仙帶。もと趙飛燕の留仙裙にもとづける名にして裙帶なり。
【二九】非煙。唐の武公業の妾步非煙なり、私通して鞭撻に死せり。

亡べり、也貶在して燕鶯隊裏に去罷ん。

〔末〕老判に稟す、此の女は乃ち夢中の罪を犯し、曉風殘月の如し、且つ他が父親は官と爲て淸正、單一女を生めり、以て(二一〇)躭饒す可し。

〔淨〕父親は是れ何人か。

〔旦〕父親は杜寶知府、今淮揚總制の職に陞れり。

〔淨〕千金の小姐哩、也罷、杜老先生の分上、當に天庭に奏過して、再に議處を行ふべし。

〔旦〕就ち恩官を煩はす女犯の替めに查査せよ、怎生此の傷感の事有るか。

〔淨〕這の事情は斷腸簿の上に註在り。

〔旦〕再查を勞す女犯の丈夫は還是姓柳か姓梅か。

〔淨〕婚姻簿を取りて查來。

【解說　「曉風」云云は、淡淡として不明瞭なることを謂ふ、「杜老先生の分上」云云は、杜先生の身分より見て此事は先づ天帝の朝廷に奏聞したる上處分を決すべしとなり、陽世の官吏に老先生等の敬稱を用ゐたるは、杜寶が賢良なる故に之を尊びたるなり。】

【二一〇】躭饒。寬容なり。

〔背きて查ぶる介を作す〕是り、箇の柳夢梅有り、乃ち(二一一)新科狀元也、妻は杜麗娘、前は幽歡に係り、後に明配を成す、相會して梅花觀中に在り、泄漏す可からず。〔回る介〕此人の儞と姻緣の分有るあり、我今儞を放たん、枉死城を出了、風に隨ひ遊戲し此の人を跟尋せよ。

〔末〕杜小姐、老判を拜了よ。

〔旦叩頭する介〕恩官に拜謝す、重生の父母、則俺が那の爹娘は揚州に在り、可に一見し能勾ふか。

〔淨〕使得。

〔么篇〕他(二一二)陽祿還長く在り、陰司數未だ該らず、煙花を噤め一種春賴る無く、柳梅に近づき一處情外無く、椿萱を望み一帶天礙無し、則這の水玻璃・(二一三)望鄉臺を堆起す、哨見可し、(二一四)紙銅錢、夜市揚州の界。

花神よ、他を引ゐて望鄉臺に隨意觀玩せしむ可し。

【解說　「前は幽歡」云云二句は、初めは私約を爲し、後に正式の婚姻を爲すとの意なり、「重生の父母」とは、再生の恩人なり、「煙花」云云は、淫蕩の氣無く只一人思を寄する人も無し

【二一一】新科狀元。新に進士の第一番に及第せる者なり。

【二一二】陽祿。陽世に於ける壽命。

【二一三】望鄉臺。冥土の臺名なり、亡者此處にて家鄉を望む。

【二一四】紙銅錢。紙錢銅錢。夜市は夜店なり。

との意、「柳梅」云云は、柳梅を思ふ外に意無きこと、「椿萱」云云は、父母を望むところ眼界を遮る雲も無しとなり。】

〔旦、末に隨ひ臺に登り揚州を望み哭く介〕那是揚州、俺が爹爹奶奶呵、待飛將去かん。

〔末扯住むる介〕還儞の去的時節に不是。

〔淨〕下來り分付を聽け、功曹よ一紙の(三五)游魂路引を給し去れ、花神よ他の肉身を壞了休也。

〔旦〕恩官に謝す。

〔賺尾〕〔淨〕欲火・乾柴に近づき、且つ青山を留的て在り、雨打・風吹日曬を被る可からず、則許す儞月に傍り星に依り天地をば拜するを、一に儞魂魄の來回に任せん。

獄を脱了に、

勾牌を省的、

活を接著るに、

投胎を免的、那の花間の四友儞差排し、鶯をして窺はしめ燕をして猜せしめ、蜂を倩ひて媒せしめ蝶をして採せしめよ、敢那の(三六)破棺星を守的とも、圓夢那の人來らん。〔淨下る〕

【三五】遊魂路引。靈魂の通關證書なり。一紙は一通なり。

【三六】破棺星。命書にて不吉の星なり。

〔末〕小姐よ後花園に回り去來。

醉ひて烏帽を斜け髮絲の如し、

盡日靈風旗に滿たず、

年年檢點す人間の事、

爲めに蕭何を待ちて判司と作す。

【解說　「欲火」云云は、若き男女の相近づくをいふ。（火の著き易き故。）今小姐が陽世に歸るは柳生に近づくなり、「青山」云云は、墓中に身軀存せるの意なり、「雨打」云云は、墓を風雨にて荒らされぬやうにせよとの意なり、身軀を損ずるを恐るればなり、「則許す」云云は、夜間のみ出遊せよとの意、魂魄は陰物なるが故なり、「勾牌を省的」「投胎を免的」は、元來出獄を許可するには出獄指令狀を要し、人間に生るるには先づ人胎に入りて後に生るるを當然とすべき筈なれど、今小姐を再生せしむるには此の二種の手續を省略するなり、「差排」は使役するの意なり、「敢那の」云云は、たとひ汝如何に不運なりとも、夢占に於ける青年は必ず來るべしとの意なり。】

第二十四齣　(一)拾畫

〔金瓏璁〕〔生上る〕　驚春誰か我に似ん、客途の中都て其の他を問はず、風吹綻す(二)蒲桃の褐、雨淋般す(三)杏子の羅、今日晴和、衾單を晒し、兀自殘雲の澒ふ有り。脈脈たる梨花春院に香る、一年の愁事商量を費す、知らず柳思能く多少ぞや、腰肢を打疊し(四)沈郎と鬪ふ。小生病に梅花觀中に臥し、喜に(五)陳友の醫を知るを得て、(六)調理痊可せり、則這幾日間春懷鬱悶し、何處にか憂を忘れん、早くも是れ老姑姑到也。

【解說　金瓏璁の曲は柳生が春に値ひ乍ら一日として爽快なる日無きを叙したるなり、「腰肢を」云云は、身體の瘦せたること古の沈約と孰れぞやとの意なり。】

〔一落索〕〔淨上る〕　(七)女冠を奈何ともする無し、書生を識的破すも、何處に夢兒多きを知他んや、毎日價に欠伸千箇。

〔一〕拾畫。畫を拾ふ。
〔二〕蒲桃褐。葡萄色の衣。
〔三〕杏子羅。杏花色の羅衣。
〔四〕沈郎。梁の沈約なり、多病の人なり、又晉の沈充も多病の人なり。
〔五〕陳友。陳最良を指す。
〔六〕調理。治療なり。痊可は病快復したるなり。
〔七〕女冠。女道士なり。

秀才安穩なりや。

〔生〕　日來病患些し輕く、悶坐不過、偌く大なる梅花觀に、甚の園亭の消遣するに少しからんや。

〔淨〕　此の後に花園一座有り、亭榭荒蕪せりと雖然、頗る寒花點綴する有り、則留めて散悶す、傷心するを許さず。

〔生〕　怎的にして傷心するを得也。

〔淨歎く介を作す〕　是れ這般に說はば、爾自ら去きて遊ばば便了、西廊より畫牆を轉りて去け、百步の外、便是離門、三里の遙、都て池館爲り、爾情を盡して玩賞し、竟日消停せよ、索ずしも老身陪ひ去かざる也、名園客の到るに隨せ、幽恨人の知ること少し。

〔下る〕

【解說　「毎日價」云云二句は、彼(柳生)は何を考へ居るにや毎日無聊に耐へざる樣に見ゆとなり、「悶坐不過」は坐居しては無聊に耐へずとの意なり、「偌大」は頗る大なる意、「甚の園亭」云云は多少は遊覽する處も有るならんとの意なり、「則留めて」云云は、此の園は憂さ晴しの爲めに設けられたるなりとの意なり。】

〔生〕既に後花園有らば、就此(八)迤邐して去かん。〔行く介〕這是西廊の下了、好に箇の(九)蔥翠的籬門、半架を倒了。〔歎く介〕〔集唐〕闌に憑る仍是れ玉闌干、四面の牆垣看るに忍びず、想得たり當時の好風月、萬條煙罩め一時乾く。〔到る介〕呀、偖くも大なる一箇の園子なる也。

〔好事近〕〔生〕則見る風月暗に消磨するを、畫牆の西正南側左。

〔跌く介〕

蒼苔滑擦す、斷垣低垛に倚逗著、何に因りて蝴蝶門兒に落合するか。原來以前は遊客頗る盛なりしならん、題名竹林の上に在り。客來過し、年月偏に多く、刻畫琅玕千箇を盡せども、呀、早則も是れ寒花砌を遶り、荒草・窠を成せり。

【八】迤邐。徐行なり、ぶらぶら歩きの意。
【九】蔥翠。青青とせる樣。

【解說「則見る風月」云云は、景色寂しく荒れたるを謂ふ、「畫牆」云云は、景色の最も荒れたる地點を指す、「刻畫」云云は琅玕（玉の名）をちりばめたる建築も人や雜草に埋れたりとの意なり。】

怪い哉、一箇の梅花觀、女冠の流にして、怎で這座大園子を起的か、疑惑也、便是這灣流水呵。

〔錦纏道〕〔生〕門兒鎖し、這の武陵源一座を放著、恁の好處を頹墮せしむ、斷煙の中に見る水閣摧殘せるを、畫船(一〇)抛躲せるを、冷しき鞦韆尙(一一)裙拖を挂下たり、又曾て兵火を經しに不是、這般の似き狼藉呵、敢斷腸の人遠く、傷心の事多からん、關情せざらんと待せん麽、恰も湖山石の畔儞を留めて磨陀を打せしむ。

【解說「武陵源」とは此の後花園に喩へたる語なり、「放著」はうつちやらかすなり、「斷腸の人」云云は、昔此の花園の爲めに悲痛の情に砒へざりし人もありつらん、又傷心の事も多多ありしならんとの意なり、「關情」云云以下は、此の花園の光景は、人に深き思を促し、之を忘れまざらはさんとするも、自然に人を留めて庭石の邊に低回（打磨陀）せしむとの意なり。】

好き一座の山子哩、〔窺ふ介〕呀、就裏に一箇の小匣兒あり、待左側一峯をば靠著、是れ何物なるかを看ん。

〔石倒るる介を作す〕呀、是れ箇の(一二)檀匣兒なり、〔匣を開き畫を看る介〕呀、一幅の觀世音の喜相なり、善哉善哉、待小生捧げて書館に到り、頂禮供養せん、埋めて此の中に在るに强如

【一〇】抛躲。放置して用ゐざること。
【一一】裙拖。裙を穿つとき結ぶ帶なり。
【一二】檀匣兒。旃檀の小箱なり。

らん。

〔千秋歳〕〔匣を捧げて回る介〕(一三)小嵯峨、旃檀の盒を壓的、便ち好相の觀音(一四)俏樓閣を做す、片石峯前、那の片石峯前、多則是(一五)飛來石三生の因果、請將去り鑪煙の上に過し、(一六)頭納地、燈火を添へ、照的て他・我を慈悲せん、俺這裏に情を盡して供養せば、他意に於て何を云はん。

〔到る介〕觀中に到了、且つ閣兒上に安置し、日を擇んで展禮せん。

〔淨上る〕柳相公多早了。

〔尾聲〕〔生〕姑姑よ、一生客と爲りて恨情多し、冷澹に過ぎ園林日午殢く。

老姑姑よ、儞道ふ傷心を許さずと、儞俺が爲に再に一箇の。定めて傷心せざる(ところ)を尋ねよ何處か可なる。

僻居林泉に近きを愛むと雖、早く是れ傷春暮雨の天、何處邀將畫府に歸し、

【三】小嵯峨。築山なり、又陝西の嶲薛山を嵯峨山といふ、佛寺有り。

【一四】俏。美なり。

【一五】浙江の抗縣に天竺寺あり其の後山に三生石有り、昔唐の李源は圓澤と親しかりしが一日圓澤將に死なんとして約するに十二年後抗州にて相見えんことを以てす、李源後に抗州に赴きけるに牧童ありて歌つて曰く、三生石上舊精魂、賞月吟風不要論、慙愧情人遠相訪、此身雖異性長存。

【一六】頭納地。拜伏するなり。

三峯花半にして碧堂懸る。

【解說　「片石峯」は庭石を山に見たてたるなり、「多則是」云云は、我此の畫を拾ひしは深き因緣有らんとなり、「冷澹に過ぎ」云云は、園中の景靜寂なるままに日暮に近づけりとなり、「儞俺が爲に」以下は、汝は我に決して傷心すること無き地を敎へよ、そは果して何處ぞやとの意なり、是は傷心すべからずと豫め警められたるに係らず、後花園にて思はず傷心した る故、再に他の傷心すること無き遊覽地を問ひたるなり。】

第二十五齣　(一)憶女

〔玩仙燈〕〔貼上る〕　物を覩て人を懷ひ、人去りて物華銷盡す、箇の仙果成り難く名花隕ち易しと道へども。

〔歎く介〕

恨む　(二)蘭昌殉葬因無きを、燭灰香燼を收拾起す。

自家は杜府の春香是也、公相夫人に跟隨して揚州に到れり、小姐世を去り將次三年、俺老夫人を看るに、那一日か念を作さざる、那一日か悲啼せざる、縱然老公相暫時(三)寬解すとも、怎でか眞愁を散せん、老夫人は莫說、便是俺春香すら小姐平常の恩養病裏の言詞を想起し、好に傷心せざらん也、今乃ち小姐生忌の辰なり、老夫人香燈を分付け、遙に南安を望み(四)澆奠せんとす、早くも已に安排せり、夫人有請。

【解說　「物華銷盡」は眼に見る物すべて零落して寂しきの意なり、「恨む蘭昌」云云は、共に

【一】憶女。女兒を追懷するなり。
【二】蘭昌。古の美男子。
【三】寬解。慰むること。
【四】澆奠。供物をそなへ祭るなり。

葬らるべき配遇無きを謂ふ、「早くも已に」云云は、もはや準備了れりとなり。】

〔前腔〕〔老旦上る〕　地老い天昏く、處として老娘をば安頓にする沒し、思量起に擧目親無く、招魂盡くる有り。

〔哭く介〕　我の麗娘兒也。

天涯に在りて老命存し難く、肝腸を割斷的寸寸たり。

〔蘇幕遮〕　嶺雲沈く、關樹杳なり。

〔貼〕　春思憑る無く、人年少を斷送す。

〔老旦〕　子母千回・腸・斷繞し、(五)繡夾書囊尙餘香の裊たるを帶ぶ。

〔貼〕　瑞煙淸く、銀燭皎たり。

〔老旦〕　繡佛靈辰、血淚風前に禱る。

〔哭く介〕〔合〕　萬里招魂・魂到る可し、則願的は人天淨き處超生早きを。

【解說　「地老い」云云は、天地寂寞にして我が安住すべき處も無しとなり、「人年少」を云云は、若き人を死なしめたりとの意なり、「人天」云云は、早く凡身を脫して天上に生れんことを祈るなり。】

【五】繡夾書囊。書物を夾み保存するものなり。裊とはやさしく、匂やかなること。

〔老旦〕　春香よ小姐亡りてより後、俺皮骨空しく存し、肝腸痛み盡せり、但見る他が讀殘の書本、繡罷の花枝、斷粉零香、餘簪棄履、觸るる處涙眼に非ざるは無し、之を見總て是れ傷心す、算來るに一去して三年、又是れ生辰の日なり、心香・佛を奉じ、涙燭・天に澆ぐ、分付けて安排せり、想ふに已に齊備したらん。

〔貼〕　夫人よ、就此空を望み頂禮せよ。〔老旦拜する介〕

〔集唐〕　微香冉冉涙涓涓、酒滴香灰去年に似たり、四尺の孤墳何處か是なる、南方歸り去つて再び天に生ず。杜安撫の妻甄氏、敬んで亡女の生辰の爲めに佛爺に頂禮す、願得は杜麗娘佛力に歸依し、早早天に生れんことを。〔起つ介〕　春香よ佛王に禱告了、此の茶飯を將つて小姐を澆奠せでは不免。

【解說　「皮骨」云云は、廢殘の身尙死せざるの意なり、「心香」は心をこめて焚く香なり、「涙燭云云」は、通常燭涙は下に流るるものなれど、之は在天の靈を祭りて、燭涙流れず盡く天に向つて燒えつくすとの意なり。】

〔香羅帶〕〔老旦〕　麗娘何處に墳す、天に問ひて問ひ難し、夢中相見得眼兒昏く、則娘を叫的聲と韻とを聽的也、驚き跳起し、猛に回身すれば、則見る陰風幾陣殘燈暈きを。

〔哭く介〕

俺の麗娘人兒也、儞怎で萬里兒無き白髮の親を抛下たるか。

〔前腔〕〔貼拜する介〕　名香玉眞に叩す、恩を受けて盡くる無し、春香に賞するは還是儞の舊羅裙。

〔起つ介〕　小姐去るに臨むの時、春香に分付けて長に一聲叫喚ばしむ、今日他を叫ばん、小姐小姐呵。

叫的一聲聲小姐可に曾て聞かんや。

〔老旦・貼哭く介〕〔合〕

想ふ他那の情切なるを、那の傷神を、恨む天・天・生と俺が娘兒を割斷し直ちに恁く忍ぶを。

〔貼回る介〕

俺の小姐人兒也、儞可に還舊宅裏に向ひ重ねて何處の身を生せんや。

【解說　「回身」とはふりかへり見るなり、「麗娘人兒」とは小姐を呼ぶなり、「玉眞」は仙人なり、また楊貴妃を玉妃と呼べり、玆にては天上に在る小姐を指せり、「春香に賞す」とは、春香に賜ふとの意なり、「叫的一聲聲」云云は、幾度その名を呼ぶも小姐の耳に達せずとなり、「直に恁く忍ぶ」とは、天は何ぞ殘忍なるやと恨むなり、「儞可に還」云云は、汝はその父母の

家に再び生きて來ること無けんとの意なり。】

〔貼跪く介〕 老夫人に禀す、人中年に到り、哀毀に堪へず、小姐は生を以て死に易へ難し、夫人死を以て生を傷むる無れ、且つ自ら尊年を調養し、老相公と同じく富貴を享けよ。

〔老旦哭く介〕 春香よ、儞可に知らん、老相公年來男兒少しきに因り、常に小を娶るの意有り、止小姐膝下に承歡するに因り、百事因循せり、如今小姐喪亡し、家門托する無し、俺老相公と悶懷相對し、何を以て情と爲さん、天呵。

〔貼〕 老夫人よ、春香愚にして賢を諫めず、夫人の言ふ所に依れば、既然老相公小を娶るの意有りと、他に順ひて(六)一房を收下め、子を生むの便と爲すに如かず。

〔老旦〕 儞見よ(七)人家の庶出の子を、可に親生に如かんや。

〔貼〕 春香但夫人の(八)收養を蒙り、尙且つ親に非ずして是れ親なり、夫人庶出をば(九)看成つるを肯んぜば、豈子無くして子有るならずや。

〔老旦〕 好話好話。

曾て(一〇)殘娥を伴ひて女兒に到る、

【六】一房。一人の妾なり。
【七】人家。他の人なり。
【八】收養。家に收めて之を養育するなり。
【九】看成。養育なり。
【一〇】殘娥。殘月なり、夜の意なり。

(一)白楊今日幾人か悲む、
須らく知るべし此の恨消ゆること得難く、
淚寒塘蕙草に滴るの時。

【解說 「止小姐膝下に」云云二句は、小姐が我等の膝下に在りて我等の慰安と爲りたる故に、すべて斷行(妾を娶ること)を見合せ居たりとの意なり、「愚にして賢を諫めず」は、釋迦に說法するとにはあらねどとの意なり。】

【一】白楊。樹名、多く墳墓に植う。

第二十六齣　(一)玩眞

〔生上る〕　芭蕉葉上雨留り難く、芍藥梢頭風收らんと欲す、畫意無明にして偏に著眼すれば、春光路有り暗に擡頭す。小生客中に孤悶し、後園に閑遊し、湖山の下、一軸の小畫を拾得せり、是の似き觀音大士寶匣莊嚴にして、風雨旬を淹し、未だ能く展き視ざりき、且つ喜ぶ今日晴和、一會瞻禮せん。〔匣を開き畫を展ぶる介〕

〔黃鶯兒〕　秋影銀河に掛り、展天の身、自在の波、諸般の好相能く(二)停妥す、他眞身(三)補陀に在り、咱海南人他に遇へり。

〔想ふ介〕

甚ぞ威光蓮花の座に上らざる、再び(四)延俄す、怎で湘裙の直下一對の(五)小淩波ぞや。

【解說　「芭蕉」云云以下四句は、寂寞の間に活氣の出でんとする意を寓せり、畫中の風景を一見するに芭蕉芍藥すべて是れ冷靜にして悲哀を包めるが如けれども、熟視すれば髣髴とし

【一】玩眞。畫像を賞玩するなり。
【二】停妥。整へるなり。
【三】補陀。補陀落山なり、觀世音の化現の地なり、是れ浙江の海中にあり。
【四】延俄、徐に見るなり。
【五】小淩波。小さき足袋なり。

て歡喜の光明照り出づる如き感あるなり、「風雨旬を淹し」とは、十日計り風雨續きたりとなり、「秋影」云云は、小姐の像を銀河の織女星に喩へたるなり、織女が牽牛を思へるが如き表情あるなり、「展天の身」とは天に横はるの身なり、「自在の波」の波は秋波(眼)に比す、「咱海南人」云云は、觀音は南海に住す、而して柳生また南方人なれば玆に相逢ふは因緣の深きを意味す、「威光」とは佛の威容の意なり、何故に觀音の像にして蓮花の上に在らざるかとなり、「怎で湘裙」云云は、何故に裙下に小き足袋見ゆるかとなり、若し觀音の像ならば足袋を穿てる筈無きなり。】

是れ觀音ならば、怎で一對の小脚兒ならん、待俺一會(六)端詳せん。

〔二郎神慢〕　些兒箇、畫圖中の影兒則度るに。

著了。

敢誰か書館の中幅の(七)小嫦娥を弔下たるならん、畫的這れ(八)傳停倭妥たり。

是れ嫦娥ならば、一發該に頂禮了べし。

嫦娥に問はん折桂の人我有り。

可に是れ嫦娥ならば。

【六】端詳。觀賞すること。
【七】嫦娥。月中の仙女。
【八】傳停倭妥。優美の意なり。

怎で影兒の外半朶の祥雲の托する沒きか、(九)樹皴兒又桂叢花瑣に似ず。
觀音に不是、又嫦娥に不是、人間那んぞ此有るを得ん。
驚愕を成す、曾て相識るが似し、俺が心頭に向つて摸らん。

【解說　「嫦娥に問はん」云云は、嫦娥よ玆に折桂の人たる我ありとの意、「折桂」は月中の桂を折ることにして、科擧に及第するに喩ふ、故に此の句は、月の中なる姬よ我こそ汝を得べき者なりとの意と、我將來必ず進士と爲らんとの意とを兼ねたり、「怎で影兒の」云云は、果して嫦娥の畫ならば多小の雲を描くべきに、此の嫦娥は何故雲に乘らざるかとなり、「俺が心頭」云云は、心の中にて考へてみんとの意なり。】

【九】樹皴兒。畫法に於ける樹木の陰影なり。

待俺瞧ん、是れ畫工の臨的か、還是美人の自手描的か。
〔鶯哢序〕　問ふ丹青は何處の嬌娥と、片月影光豪末に生ず、恁般の似き一箇人兒、早くも見了百花低躲するを、天然を總べ意態・摩し難し、誰か近得ん春雲をば淡破するに。
想來畫工怎で能く此に到らん。
多敢他自己能く描き會く脫しつらん。

且く住め、他が幀首の上の小字數行を細觀せん。〔看る介〕　呀、原來絕句一首なり、〔念する介〕　近く觀て分明儼然たるに似、遠く觀れば自在飛仙の若し、他年蟾宮の客に傍ふを得るは、梅邊に在らずんば柳邊に在らん。呀、此れ乃ち人間の女子行樂の圖也、何ぞ梅邊に在らずんば柳邊に在らんと言へるか、奇なる哉、怪事哩。

【解說　「問ふ丹青」云云は、何處の美人を描けるものかとの意なり、「百花」云云は、百花も之に對して羞づるを謂ふ、「淡破」とは薄墨にて畫くことなり、此句は髮を描けるの妙を賞したるなり。】

〔集賢賓〕　關山梅嶺を望めば天一抹、怎で知らん俺柳夢梅の過ぐるを、蟾宮に傍ふを得とは怎麼なるかを知らんや、待喜ばん呵、(10)端詳停和す、俺が姓名兒、直麼も嫦娥の定奪を費す、(11)麼訶を打す、敢則是れ夢魂中の眞箇。好に小生を回盼せざらんや。

〔黃鶯兒〕　空影・纖蛾に落ち、春蕉を動かし、綺羅を散ず、春心只眉間に在りて鎖す、春山翠地、春煙淡和、相看る四目誰か輕可せん、恁く波を橫たへ、來廻影を顧み、不住的眼兒睃む。
卻つて怎で半枝の青梅手に在りや、活似て小生を提掇すると一般なり。

【10】端詳停和。熟視して心を落ちつくること。
【11】麼訶。梵語にて大の義あり、上文にて打麼訶は疑ふの意なり。

【解說　「嫦娥の定奪を費す」とは、美人の心をして決定せしむとの意なり、卽ち將來の夫は必ず柳梅ならざる可からずと心に定むるなり、「好に小生を」云云は、畫中の人我を見るとの意なり、「空影」より「淡和」までは畫中の景物を叙したるなり、「四目」とは柳生と畫美人と相對して四目なり、「波を橫たへ」は眼を以て見るの意なり、「活似て小生を」云云は、恰も美人の生ける者が我と手を携へて立てると同樣なりとの意なり、是れ梅は自れの名夢梅と通ずるが故に斯く云ひたるなり。】

〔嚦鶯序〕　他青梅手に在りて詩細に(一二)哦し、春心を逗めて一點蹉跎す、小生畫餅饑を充たさんと待し、小姐(一三)梅を望みて渴を止むるに似たり。

小姐小姐よ。

未だ曾て半點の(一四)幺荷を開かず、笑を含む處朱脣淡抹し、(一五)暈情多し、愁へて語らんと欲するが如く、只口氣兒を少く呵。

小娘子畫は(一六)崔徽に似、詩は(一七)蘇蕙の如く、行書は(一八)衞夫人に逼眞す、小生典雅なりと雖則、怎で這の小娘子に到得ん、(一九)脈地に

【一二】哦。吟するの意なり。
【一三】魏の武帝兵を率ゐて道を失す、時に衆渴けども水無し、帝令して曰はく前方に梅林あり渴を醫す可しと、士卒之をききて口に水出で渴を止めたりといふ。
【一四】幺荷。小蓮花なり。
【一五】暈。婦女兩頰の淡紅色。
【一六】崔徽。古の娼婦なり。（第十四齣參照）

相逢ふ、(二〇)步韻一首せでは不免。〔題する介〕　丹青の妙處卻つて天然、是れ天仙ならずんば卽ち地仙、蟾宮に傍はんと欲す人近遠、恰些春は柳梅の邊に在り。

【解說　「春心を逗めて」云云は、畫面には情意活動すれども只僅に尙遺憾の點ありとの意なり、乃ち實在の人間に非ざるが故に互に意思の通せざるを憾みとするなり、「未だ曾て」云云は脣を開かざるなり、「只口氣兒」云云は、聲を出さぬばかりなりとの意なり。】

〔簇御林〕　他能く(二一)綽斡し、會く寫作す、秀・江山に入りて人唱和す。

待小生(二二)很很に他を幾聲叫ばん、美人美人よ、姐姐姐よ。

(二三)眞眞に向ひ啼血す儞知る麼、叫的儞の噴嚏天花に似て唾せん、(二四)淺波を動かし盈盈下らんと欲して、影兒の那るを見ず。

咳、俺孤單此に在り、少不得小娘子の畫像をば、早晚之を玩び之を拜し、之を叫び之を贊せん。

〔尾聲〕　箇の人兒を拾的先づ慶賀す、敢柳と梅と些の(二五)瓜葛有らん。

【一七】蘇蕙。前秦竇滔の妻字は若蘭といふ、滔が妾を納れたるに因りて織錦廻文を作る。
【一八】衞夫人は晉の李矩の妻なり、書に巧にして王羲之も師事したることあり。
【一九】脈地。驀地なり、偶然忽然等の意。
【二〇】步韻。原韻と同じ韻を用ゐたる詩。
【二一】綽斡。技量に餘裕あること。
【二二】很很。熱心なること。
【二三】眞眞。唐人趙顏かつて美女の圖を得たるが、後化して人と爲り、遂に一子を生めり、顏その妖を爲さんとを疑ふ、女乃ち其子と共に復た圖に入れり、此圖を眞眞と稱す。
【二四】淺波、ここにて足なり。盈盈は輕やかなること。
【二五】瓜葛。相關連する意なり。

小姐小姐よ。

則怕る儞影有り形無く我を看殺せんことを。

一向に丹青を恨むを須ゐず、

把つて長く懸けて戶庭に在るに堪ふ、

惆悵詩を題す (三五)柳中隱、

春醉を添成し轉た醒め難し。

【解說 「眞眞に向ひ」云云は、汝(畫中の人)に對し熱心に叫べるを汝知るかとなり、「噴嚏」云云は、「人の名を語れば其人噴嚏す」との俗說より來れる句なり、「我を看殺す」とは、我の耐へざる程我を看るとの意なり。】

【三五】柳中隱。六朝の詩人柳諱なり。

第二十七齣 (一)魂遊

臺殿重重たり春色の上、碧雕闌・銀塘に映帶し、地を撲ちて香騰り、天に歸るの磬響く、細に展く(二)度人經藏。

〔集唐〕 幾年紅粉黃泥に委し、(三)十二峯頭月低からんと欲す、折得たり玫瑰花一朶、東風吹き上る(四)窈娘隄。俺老道姑、杜小姐の墳庵を看守すること、三年の上なり、吉日を擇取し、他の替め道場を開設し、玉界に超生せしめん、早く已に門外に(五)招旛を豎立せり、何人の來到する有るかを看ん。

〔太平令〕〔貼、小道姑に扮し、丑、徒弟に扮して上る〕 嶺路江鄉、一片の彩雲月を扶けて上り、(六)羽衣青鳥閑に來往す。

〔丑〕 天晚し、梅花觀に歇了罷。〔貼〕 南枝の外(七)鵲鑪の香有り。

〔挂眞兒〕〔淨、石道姑に扮して上る〕

【一】魂遊。魂魄の出遊なり。
【二】度人經。經文の一種。
【三】十二峯。巫山に在り。
【四】窈娘隄。窈娘の墓ある處なり、窈娘は唐の喬知之の婢なるが武承嗣に奪ぼる、知之綠珠怨を作つて以て諷す、窈娘乃ち井に投じて死せり、知之また承嗣に殺さる。
【五】招旛。招魂の幡なり。
【六】羽衣青鳥。西王母の使者なり。
【七】鵲鑪。鵲形の香鑪。

【解說　「天に歸るの」云云は、人の魂を天に送らんとして磬を敲くなり、「度人經藏」の經藏はくらに非ず、單に經の意なり、「他の替め」云云は、小姐のため法事を行ひて、天界に生れしめんとなり。】

小道姑は乃ち韶陽郡碧雲庵主是れ也、(八)遊方して此に到れり、他莊嚴の旛引を見るに、道場を榜示せり、恰も好し登壇して共に好事を成さん。〔見ゆる介〕〔集唐〕

〔貼〕　(九)大羅天上柳煙含み。

〔淨〕　毛節朱旛・石龕に倚る。

〔貼〕　見溪山に向つて住處を求め。

〔淨〕　半垂の(一〇)檀袖・通參を學ぶ。小姑姑何よりして至れるか。

〔貼〕　韶陽郡より來れり、暫く此に宿を借らん。

〔淨〕　西頭の房兒に、箇の嶺南の柳相公有りて病を養ふ、則廂房に下はば可矣。

〔貼〕　多謝了、敢て問ふ今夕の道場は何の爲めにして設くるか。

〔淨歎く介〕　則杜衙の小姐去つて三年なるが爲め、與めに招魂して九天に上らしめんと待す。

【八】遊方。四方を行脚すること。

【九】三界の外を四人天と云ひ其外を三淸と云ひ、其上を大羅天といふ、其上に九天あり。

【一〇】檀袖。女道士の服なり。通參は參禪の意。

〔貼〕　這等呵、(一一)淸醮壇上今夜好く、敢て香火を將つて眞仙を助けん。

〔淨〕　這等ば卻つて好し。〔內鐘鼓を鳴らす介〕

【解說　「道場を榜示せり」とは、法事あることを廣く示すなり、「好事」は法事供養の意なり、「大羅天」云云は道觀を形容したるなり、「毛節」は一端を鳥毛にて飾れる竿なり、「石龕」は神像を安置せる石窟なり、此句また道觀の前に旗等を立て列べたる狀を叙べたり。】

〔衆〕　請ふ老師兄拈香せよ。

〔淨〕　南斗注生眞妃、東嶽受生夫人殿下。〔拈香して拜する介〕

〔孝南歌〕　新火を鑽り、妙香を點じ、虔誠爲めに杜麗娘に因る。

〔衆拜する介〕

香霧・繡旛幢、細樂風微かに颺る。

仙眞呵。

威光無量、一點の香魂を把つて、早くも人を天上に度す、怕る未だ凡心盡きざるを、他再び人身の想を作し、兒郎と做り、女郎と做らば、願ふ他永く雙を成し、再に少年の亡に似る休れ。

【解說　「凡心」とは人間としての感情ある心なり、「他再び」云云は、再び人間として生れん

【一一】淸醮壇。祭壇。

との望を抱く意なり、「願ふ他永く」以下は　彼（小姐）若しまた人間として生れなば、願くは配遇ある人たれよ、再び今回の如く年少にして死する者たる勿れとの意なり。〕

〔淨〕　想起す小姐生前花を愛して亡びたるを、今日殘梅を折得、淨瓶に安在て供養せん。（一三）

〔神主を拜する介〕

〔前腔〕　瓶兒淨く、春凍陽、殘梅半枝紅蠟裝ふ。

小姐呵。

儞香夢誰と與に行き、精神忒に孤往するか。

〔衆〕　老師兄、儞淨瓶は什麼の像く、殘梅は什麼の像しと說ふか、

〔淨〕

這の瓶兒空相にして、世界包藏す、身は殘梅の樣に似、水有りて根無く、尙餘香の想を作す。

〔衆〕　小姐よ、儞此の供を受呵。

儞氣骨涼しく魂魄香る、回陽を肯んせば、再に這の梅花帳に住まん。

〔內風響く介〕

【解說　「紅蠟裝ふ」は紅梅を瓶に挿すなり、「儞香夢」云云は、汝の夢は誰と共に在るか知らねど、汝の魂は寂しく獨り往くならんとの意なり、「回陽」云云以下は、汝陽世に歸らばまた紅梅色の帳を掛けたる閨中に住まんとなり。〕

〔淨〕　奇なる哉怪なる哉、冷窣窣と一陣の風打旋也。〔內鐘を鳴らす介〕

〔衆〕　這れ晩齋の時分なり、且つ齋を吃了、道場を收拾せん、正に是れ曉鏡拋殘し（一四）定色無く、晩鐘敲斷す（一四）步虛の聲。〔衆下る〕

〔水紅花〕〔魂旦、鬼聲を作し袖を掩うて上る〕　則望鄉臺に下得夢の如く悄たる魂靈、夜熒熒として墓門人靜かなり。

〔內犬吠え旦驚く介〕

原來是れ花陰に賺かれ小犬春星に吠ゆ、冷冥冥たり、梨花の春影。

呀、牡丹亭・芍藥闌を轉過すれば、都て荒廢し盡せり、爹娘去了三年也。〔泣く介〕

傷感煞す斷垣荒逕、望中は何處也、鬼燈靑し。

〔聽く介〕

兀的人聲有る也囉。

〔添字昭君怨〕　昔日千金の小姐、今日水流れ花謝し、這の淹淹惜惜杜陵の花、太だ他を虧す、

【一三】神主。位牌なり。

【一四】定色。色卽是空の意なり。

【一四】步虛聲。道士誦經の聲なり。

生性獨行無那、此夜星前一箇、生生死死情多きが爲なり、情を奈何せん、奴家は杜麗娘の女魂是れ也、只癡情色を慕ふが爲、一夢にして亡べり、湊的十殿の閻君旨を奉じて（一五）裁革し、人の發遣する無く、女監三年、喜に老判の哀憐て放假するに遇ひ、此の月明かに風細かなるを趁とし、一番（一六）隨喜す、呀、這是書齋の後園、怎にして梅花庵觀を做了か、好に人を傷感する也。

【解說　「原來是れ」以下三句は、夜景の凄涼なるを叙せり、「傷感煞す」云云は、荒廢せる園景を見て悲痛甚だしきを覺ゆるなり、「淹淹惜惜」はしほらしき姿に喩ふ、「杜陵の花」は小姐に喩ふ、「太だ他を虧す」は次句「生性獨行」に掛れる語にして、小姐の性質頑固なるが爲めに遂に今日の如き境遇に陷りたりとの意なり、（夢中の人を一途に想ふが如き性質、）「此夜星前」云云二句は、此の深夜に獨り生死の間に彷徨するは情深きが故なりとなり、「人の發遣する無く」とは、閻王缺位となり誰も閻王に代つて我を處置する者無かりし爲に三年間放置せられたりとの意なり。】

〔小桃紅〕　咱一に斷腸人夢と醉初めて醒めたるが似し、誰か咱が殘生命を償はん也、鬼叢中姉妹

【一五】裁革。官を廢するなり。
【一六】隨喜。訪問參詣等の意なり。

同行せずと雖則、窣地的に羅衣をば整ふ、這の影・形に隨ひ、風・露を沈し、雲・（一七）斗を暗くし、月・星を勾ふ、都是我が魂遊ぶ塲也、這の花影に到的初更。

〔內、丁冬の聲を作す、旦驚く介〕

一霎價にして心兒瘮く、原來是れ風鈴を弄し臺殿（一八）冬丁たり。

好き一陣の香なる也。

〔下山虎〕　我則見る香煙隱隱として、燈花熒熒たるを、呀、些の（一九）雲霞幢を鋪了、不由人箇の讒掙を打す。

是れ那位の神靈ぞや、原來是れ東嶽夫人、南斗眞妃なり、〔稽首を作す介〕仙眞よ仙眞よ、杜麗娘の鬼魂稽首す。

魃魃地投明證明す、好く俺が替に朗朗的超生注生せしめよ。

【解說　「鬼叢中」云云は、亡者は獨行して伴無きの意、「不由人」云云は、俄然として心の中緊張せりとの意なり、「打讒掙」は我慢する勉むるの意なるが、玆にては緊張と解すべし、「魃魃地」云云は、暗暗の間に陽世に出づるを許されたる我ながら、願はくは明明に我を陽世に再生せしめよとなり、（今小姐陽世に來りたれど、是れ魂魄の出遊にして眞の再生に非ず。）】

【一七】斗。北斗なり。
【一八】冬丁。風鈴の音なり。
【一九】雲霞幢。祭壇の敷物。

再に這の(二〇)青詞上を看るに、原來就是石道姑此に在りて住持す、一壇の齋意は、俺を度して天に生ぜしめんとす、道姑道姑よ、我可也爾に(二一)生受呵、再に這の淨瓶の中を瞧ん、咳、便是俺が那の塚上の殘梅哩、梅花呵、俺杜麗娘半開して謝せるに似て、好に情を傷むる也。則這の斷鼓・零鐘・金字經の爲に、俺が(二二)黃粱境を叩動せり、俺這の(二三)地坼裏に向つて梅根幾程を迸え、些兒の影を出さん。

〔泣く介〕

姑姑們の這般なる至誠を看る。

若し些の蹤影を留めずんば、怎でか俺が他を鑒知するを顯的んや、就ち梅花をば經臺の上に散在さん。

〔花を散らす介〕

甚麼ぞ一點の香・萬點の情を銷するに抵らん。

【解說　「俺杜麗娘半開」云云は、年若くして死したるは、花の半開にして散れるに同じなり、梅花を自れに喩へたるなり、「斷鼓」云云は、鼓鐘の響讀經の聲の爲めに、我が夢は叩き醒まされたりとの意なり、「若し些の蹤影」云云は、我若し何等かの痕跡を此處に殘さずんば彼等

【二〇】青詞。道教祭禮の祭文なり。
【二一】生受。汝を勞せしむとて謝する意なり。
【二二】黃粱境。夢境なり、盧生邯鄲の夢なり。
【二三】地坼。地の裂け目なり。

は我が彼等の供養を感謝せるの意を知らざるべしとなり、「甚麼ぞ」云云は、些かなる香は我が深刻なる思を消すに足らずとの意なり。】

想起す篆娘は何處ぞや、春香は何處也、呀、那邊廂に沈吟叫喚の聲有り、是れ怎來せるかを聽かん。〔內叫ぶ介〕

俺の姐姐呵、俺の美人呵。〔旦驚く介〕誰が誰を叫べる也、再に聽かん。〔內又叫ぶ介〕〔旦歎く介〕

〔醉歸遲〕生と死と、孤寒の命、有情の人・情人の應を叫不出、爲什麼爾可人の名姓を唱出さざる、俺が孤魂獨趁するが似きは、誰か來り俺を叫喚一聲するを待たんや、分明ならず、倒斷無し、再に消停せん。

〔內又叫ぶ介〕〔旦〕咳。

敢邊廂にて甚麼かの書生、睡夢裏に語言(二四)胡咥せるならん。

【解說　「俺が孤魂」云云以下二句は、魂魄獨り行く我の如きは、誰として我が名を呼び吳る者も無しとの意なり、「倒斷無し」とは、斷絕せざること、叫ぶ聲は不明瞭なれど連續せるなり、「再に消停せん」とは、今一度靜に注意して聽かんとの意なり。】

〔黑蛛令〕不由俺情無くして情有り、湊著人を叫的三聲兩聲、(二五)冷惺忪として紅淚飄零つ、呀、

【二四】胡咥。とりとめなくつぶやく。
【二五】冷惺忪。腦に感じてぞっとすること。

怕らくは夢人兒の梅卿柳卿に不是や、俺記著たり、這の花亭水亭、這の風清月清を趁的、則這の(二六)鬼宿前程、三星四星を盼得上。

即ち行き尋趁んと待するも、奈んせん(二七)斗轉じ參横はるを、敢て久しく停らざる呵。

〔尾聲〕〔旦〕 爲什麼閃搖搖たるか春殿の燈。

〔內叫ぶ介〕 殿上響動す。〔丑・虛上し望む介〕〔又風起る介を作す〕

〔旦〕

(二八)一弄兒繡旛飄迴す、則這の幾點の落花の風は是れ俺杜麗娘身後の影。

【解說 「情無くして情有り」とは、無關係なる我すらも情に感ずとの意なり、「紅淚飄零」は、淚はふり落つるなり、「三星」云云は前途に光明を認むるの意なり、「斗轉じ」云云は、天明に近づきたるなり。】

〔旦、鬼聲を作して下る〕〔丑、(二九)照面を打し驚き叫ぶ介〕 師父們よ、快く來れ快く來れ。

〔淨・貼・驚き上る〕 怎生(三〇)大驚小怪するか。

〔丑〕 則這の燈影熒煌、躲著瞧る時、一位の女神仙、袖に花旛を拂ひ、一閃して去るを見たり、

【二六】鬼宿前程。亡者の前途の運命。
【二七】斗參。星の名。
【二八】一弄兒。一陣なり。
【二九】打照面。眼と眼と相出會ふこと。
【三〇】大驚小怪。驚く意なり。

怕也怕也。

〔淨〕 怎生模樣か。

〔丑、(三一)手勢を打す介〕 這多高さ、這多大さ、俊臉兒、翠翹金鳳、紅裙綠襖、環珮玎璫たり、敢是眞仙下降せるならん。

〔淨〕 咳、這れ便是杜小姐が生時の樣子なり、敢是他靈有りて活現せるならん。

〔貼〕 呀儞看よ、經臺の上、梅花を亂糝せり、奇也、異也、大家よ再に他を一番祝懺せん。

【解說 右は女道士が小姐の姿を認めて怖るるを叙せり。】

〔憶多嬌〕〔衆〕 風・香を滅了、月・廊に到る、閃閃屍屍・魂影兒涼し、花春宵に落在て情傷み易し、願はくは儞早く天堂に度れ、早く天堂に度れ、他鄉故鄉に留滯する免れ。

〔貼〕 敢て問ふ杜小姐は何病の爲に亡び、何の緣故を以て來り出現せるか。

〔尾聲〕〔淨〕 驚恍する休れ、問當ことを免めよ、樂器・經堂を收拾起よ、儞聽波、兀的冷窣窣として珮環の風還迴廊の那邊に在りて響けり。

心に知り敢て形相を輒にせず、

【三一】打手勢。手を以て形容すること。

因緣を話らんと欲するも斷腸を恐る、
若し春風をして人意を會せしめば、
也應に知るべし(三)杜蘭香有るを。

【解說　「閃閃」云云は、ひらめき過ぐる魂の影物凄しとなり。】

【三】杜蘭香。古の仙女の名。

第二十八齣　(一)幽媾

【夜行船】【生上る】　天仙を瞥下何處也、影空濛にして月籠るに似(二)沙、恨有りて徘徊し、言無くして(三)窘約す、早くも是れ夕陽西に下る。

一片の紅雲(四)太清に下り、花の如く巧笑す玉娉婷、誰に憑り畫出す生香の面、俺に對し偏に含む不語の情。小生春容に遇ひてより、日夜想念す、這の更闌くる時節、些の工夫を破し、其の珠玉を吟じ、其の精神を玩ばん、儻然夢裏に相親しまばん。

【畫を展べて玩ぶ介】　呀、儞看よ美人呵、神・語らんと欲するを含み、眼・微波を注ぐ、眞に乃ち、落霞・孤鶩と齊しく飛び、秋水・長天と共に一色なり。

【解說　「些の工夫を」云云以下三句は、之が爲めに時間を費し、その詩を吟じ、その畫の精神を味はんとの意、「春風一度」は、胸中の煩悶晴るるの意なり、「儞看よ」は嘆稱の語にして

【一】幽嫺。幽冥の人來りて會するなり。
【二】沙。句尾の助字なり。
【三】窘約。窘約なり、心に約す。
【四】太清。天空なり、道家の語。

何とまあ等の意なり、「落霞」云云の二句は、王勃の滕王閣序より採りたるものにして、之を借りて畫中の美人を形容したるなり。】

〔香徧滿〕　晩風吹下す、武陵溪邊一縷の霞、箇の人兒を出托して風韻殺す、淨くして瑕無し、明窗の新絳紗、丹青小畫、又一幅の肝腸をば掛く。

小姐小姐よ、則儞の被めに俺を想殺する也。

〔懶畫眉〕　輕輕怯怯一箇の女嬌娃、楚楚臻臻箇の宰相の衙の像し、想ふに他春心那ともする無く菱花に對し、情を含み自ら春容をば畫きしならん、可に想到せんや箇の拾翠人兒有りて也他を逗著めんとは。

〔二犯梧桐樹〕　他飛來して月華に似、俺拾的て愁天大なり。

常時には夜夜月に對して眠りしが、這の幾夜呵。

幽佳、(五)嬋娟隱に映的光輝殺し、俺をして、迷留亂的心(六)嘈雜ならしむ、夜無く明無く他を快著、若し擎奇の爲に丹青を涴的ことを怕れずん(七)亞、儞の影兒を抱著榻に横はらんと待す。

想來に小生は定めて是れ緣有る也、再に他が詩句をば一番朗誦せん。〔詩を念ずる介〕

【解說　「箇の人兒」云云は、一人の像畫より拔け出でんばかりにして頗る風情ありとの意なり、「輕輕」云云以下二句は、可憐なる一人の女兒は、つづまやかにして大官の宅の姬の如しとなり、「可に想到」云云は、遊園者が此の畫を拾ひ取らんとは描きし者も思ひがけざりしならんとなり、「俺拾的」云云は、我此の畫を拾ひたる爲め天程の大さなる愁を得たりとの意、「嬋娟」云云は、月光我を照らすこと强く、思いよいよ亂るとなり、「若し擎奇の」云云は、畫を愛玩するが爲、之を汙損することを怕れずば、我は畫を抱いて眠らんことを思ふとなり、(抱いて眠らざるは畫を損するを恐るるなり、「擎奇」とは手を以て愛玩するなり)。】

【五】嬋娟。月に喩ふ。
【六】嘈雜。錯亂なり。
【七】亞。助字なり。

〔浣沙溪〕　拈詩の話、會家に對す、柳は梅と分兒些し有り、他春心迸出す湖山の罅、飛上す(八)煙綃の萼綠華。

則是他を禮拜せば便了。〔香を拈じ拜する介〕

僕倖殺す、他が臉暈眉痕に對すれば心上掐す、有情の人天涯に在らず。

小生客居し、怎で姐姐風月中に片時相會ふ能勾はん也。

〔劉潑帽〕　恨む單條・雙魂を惹的化し、箇の畫屏中(九)倚玉兼葭を做さざるを。

小姐呵。

【八】煙綃。畫絹なり。夢綠華は九疑山にて得道せる古の女仙人。
【九】魏の明帝の后弟毛曾夏侯太初と共に坐す、時人兼葭倚玉樹と云へり。

爾耳朶兒の雲鬢月・芽を侵す、可に一些些都て俺が傷情の話を聽的を知他んや。

【解說　「拈詩」云云以下三句は、詩は其の道の人（詩人）にして始めて其の意を解す、小姐の詩に云へる柳梅と我とは多少關係ありとなり、「僕倖殺す」は、甚だ僥倖なりとの意、「心上掐す」は胸かきむしらるるやうなるなり、「有情の人」云云は、畫中の人は近きに居るならんとの意なり、「恨む單條」云云は、一條の畫幅に兩人の魂を化出し二人相並べる姿を見出さざるを恨むとの意なり、「月芽を侵す」とは、眉端が髮の根に入るなり、「可に一些些」云云は、汝我が言語を聽けるや否や我は知らずとの意なり。】

〔秋夜月〕　笑ふに堪ふ咱、說的來りて（一〇）戲耍するが如きを、他海天の秋月雲端に掛り、煙空翠影遙山抹す、只許す他人の淸暇に伴ふを、怎で人をして（一一）佻達せしめん。

〔東甌令〕　俺念咒するが如く、說法するが似し、石も也點頭せんと要し、天花を雨らさんとす、怎で虔誠なるに仙娥を降的下さざる、是れ輕しく（一二）行踏するを肯んぜるならん。

〔內・風起り、生、畫を按住する介を作す〕

仙を留めんと待し風兒の刮くを怕殺し、錦邊の（一三）牙を黏嵌著。

【一〇】戲耍、戲ろること。
【一一】佻達。戲弄すること。
【一二】行踏。出步すること。
【一三】牙。象牙製の軸頭なり。

他を刮損るを怕る、再に箇の高手を尋ねて他一幅兒を臨せん。

〔金蓮子〕　（一四）閑嘖牙、怎で他威光（一五）水月生ま生ま臨榻する能勾はんや、怕くは處有りて他自家に相逢はば、則問はん他が許多の情・春風の畫意と再に差無きを。

〔照らす介〕

再に燈を把り他を一會細看せん。

〔隔尾〕　敢人世上にて這の天眞に似るは多くは則ち假なり。

〔內、風・燈を吹く介を作す〕

〔生〕　好に一陣の冷風人を襲ふ也。

險些兒に丹靑を誤らんとし風影・燈花に落つ。

罷了。

則索睡り紗窗を掩ひ去つて他を夢みん。

〔睡る介〕

【解說　「笑ふに堪ふ」以下「戲耍するが如し」までは、斯樣に戲れの如き言を云へるは我ながら可笑し（羞づかし）との意なり、「他海天」以下は、此の崇高なる畫像は、恰も天外の月姬の如く氣高ければ、下界の者等が仰ぎ瞻て嘆賞するは爲し得べけれど、之に向つて戲言等

【一四】閑嘖牙。言ふも效なきことを言ふの意、むだ口なり。
【一五】水月。觀音なり。

を云ふべきに非ずとの意なり、（是れ劉潑帽の曲に於て柳生が畫に對して及ばぬ想像を爲しつつ物言ひたるを今また却て自ら嘲けるの意なり）、「俺念咒」云云以下は、我が畫中の美人を叫ぶ聲は、念咒の如く說法の如く熱心極まり、無心の石すら點頭し、天も感じて花を降らさん程なるに、斯くも熱烈なる心も畫像には通せざるか、何故に畫中の眞美人天より下らざるか、想ふに美人は輕輕しく出で來るを欲せざるが故なるべしとなり、「怕殺」とは甚だしく恐るるなり、「錦邊」云云は、表裝に施せる象牙の軸を嵌むるなり、「再に箇の高手」云云は、別に名手に依賴して此の畫を摸寫せしめんとの意なり、「閑嘖牙」は、「何の馬鹿氣たこと」とて、自ら云へる言を自ら打消すなり、「怎で他威光」云云は、此の像の如き崇高微妙なる（觀音の如き）姿は誰か摸寫し得んやとなり、「險些兒に」云云は、險ふく畫を損せんとして風燈を吹けりとの意なり。】

〔魂旦上る〕　泉下長眠して夢成らず、一生餘得たり許多の情、魂・月下丹青の引に隨ひ、人風前に在る歎息の聲。妾が身は杜麗娘の鬼魂是れ也、花園の一夢の爲に、想念して終れり、當時自ら春容を畫き、太湖石の下に埋め、題して、他年蟾宮の客に傍ふを得るは、梅邊に在らずんば柳邊に在らんと有りき、誰か想はん觀中に遊魂すること幾晩、聽見に東房の內、一箇の書生、

俺の姐姐よ、俺の美人よと、高聲低叫す、那の聲音哀楚にして、俺が心魂を動かす、悄然として他が房中に驀入せるに、則見る一軸の小畫を高く挂起、細に之を玩ぶ、便是奴家の遺下せる春容なり、後面に和詩一首、其の名字を觀るに則嶺南の柳夢梅也、梅邊柳邊、豈前定に非る乎、因つて冥府の判君に告過了此の良宵を趁し、其の前夢を完うせんとす、想起來好に苦しき也。

【解說　「泉下」云云より「歎息の聲」までは、小姐の魂魄が畫像を尋ねて來り柳生の聲を聽くとの詩なり、「高聲低叫」とは、或は高く或は低く叫ぶなり、「豈前定に非る乎」とは、昔より定まりたる夫婦には非ざるかとの意なり。】

〔朝天懶〕　怕的是粉冷え香銷し絳紗に泣き、又高唐の館に到的月華を玩ぶを、猛に頭を回せば颯として髻兒の鬟むを差ぢ、自ら擊拏す。

呀、前面は是れ他が房頭了。

桃源の路徑行來詫しむを怕る、再に得て（一六）俄旋し試に他を認ん。

〔生睡中詩を念ずる介〕　他年蟾宮の客に傍ふを得るは、梅邊に在らずんば柳邊に在らん。我の姐姐呵。〔旦聽きて打悲する介〕

〔前腔〕　是れ他叫喚的傷情咱淚雨麻たり、我が殘詩句を把りて爭差沒し。

【一六】俄旋。暫く延引すると、猶豫の意なり。

還未だ睡らずとは難道呵。〔瞧る介〕

〔生又叫ぶ介〕〔旦〕

他原來睡屏中作念し猛に嗟牙、諠譁を省き、我翠竹を窗櫺の下に敲彈せんと待す。

〔生驚き醒め姐姐を叫ぶ介を作す〕

〔旦悲しむ介〕

待香魂を展べ去つて他に近づかん。

【解說　「怕的是」云云以下二句は、此の男（柳生）は畫像の色褪めたるを悲しみ遂に畫中の人を斷念して、他處に別の美人を尋ねんことを我は恐るとの意なり、「自ら擊拏す」とは、髻のゆがまざるやう手を以て支ふるなり、「桃源」云云は、我が忽然として來り現はるるを彼が驚かんことを恐るとの意なり、「桃源の路徑」とは不明の地と云ふが如きなり、「諠譁を省き」とは聲立てて騷がざることなり。】

〔生〕呀、戸外に敲竹の聲す、是れ風か是れ人か。

〔旦〕人有り。

〔生〕這箇時節人有り、敢是老姑姑茶を送るならん、免勞了。

〔旦〕是らず。

〔生〕敢是、(一七)遊方的小姑姑麼。

〔旦〕是らず。

〔生〕好に怪し好に怪し、又小姑姑に不是んば、再に誰有らん、待我門を啓きて看ん。〔生、門を開き看る介〕

〔玩仙燈〕呀、何處の一嬌娃ぞ、豔なること非常人をして驚詫せしむ。

〔旦笑を作して閃入す〕〔生急に門を掩ふ〕

〔旦袵を斂め容を整へ見ゆる介〕秀才萬福。

〔生〕小娘子到來す、敢て問ふ尊前何處にして、何に因りて(一八)夤夜に此に至れるか。

〔旦〕秀才よ、儞猜來よ。

【解說　「免勞了」とは、左樣の御苦勞には及びませぬとの意なり、「小姑姑」は若き女道士なり、「嬌娃」は小女なり、「小娘子到來す」は、御孃さんお出でなさいとの挨拶なり、「儞猜來よ」とはあてて見よとの意なり。】

【一七】遊方。行脚するなり。
【一八】夤夜。深更なり。
【一九】張騫。昔漢より西域に使し黃河の源を窮め天に到れりとの傳說あり。

〔紅衲襖〕〔生〕　是れ(一九)莽張騫爾星漢の槎を犯了ざる莫きか、是れ(二〇)小梁清夜走つて天曹罰せざる莫きか。

〔旦〕　這れ都是天上の仙人、怎でか此に到るを得ん。〔生〕

是れ人家の彩鳳暗に鴉に隨ふか。

〔旦頭を搖る介〕〔生〕

敢甚處裏にか綠楊曾て馬を繫げるか。

〔旦〕　曾て一面せず、〔生〕

若し陶潛を認るの眼挫的花るるに不是んば、敢則是は(二一)臨邛に走るに道數兒差はん。

〔旦〕　差へるに非ず。

〔生〕　想ふに是れ燈を求むる的。

可是に爾夜行して燭無き也、此上に因りて紅袖燈を分ち碧紗に向はんと待要するならん。

【解說　「是れ莽張騫」云云、及び「是れ小梁清」云云は、孰れも小姐が來るべき處に非ざる場所に突然に來りたるを驚き、自己を疑ひ又小姐を疑ふの意なり、「是れ人家の」云云は、他家の美人が此の醜男子に嫁せんとするかとなり、「若し陶潛」云云は、晉の陶淵明は脫俗の

(一九) 莽は粗野なり。柳生に喩ふ。星漢は銀河なり。
(二〇) 梁清は古の仙人なり。
(二一) 漢の司馬相如は卓文君と臨邛に到りて酒を賣れり。

高士なり、脫俗の人は脫俗の人之を知る、我は高士に非ざるに、汝は我を高士として尋ねたりとせば汝の眼識に缺點あり、又若し我を高士として尋ねたるに非ずして戀人を尋ぬる者なりとせば多分御門違ひならんとなり、「紅袖」云云は、人の窗下に燈火を乞ひに來れるものならんとの意なり。】

〔前腔〕〔旦〕　俺(二二)度仙香の爲に空に散花せず、也讀書燈の爲めに閑に濡蠟せず、俺(二三)趙飛卿舊く瑕有るに不是、也(二四)卓文君新に寡を守るに不是。

秀才呵。

爾也曾て蝶夢に隨ひ花下に迷ひぬ。

〔生想ふ介〕　是れ當初曾て夢來。〔旦〕

俺此上に因りて鶯簧を弄して柳衙に赴く、若し俺が敗臺何處なるを問也。

遠からざる哩。

剛に則宋玉の(二五)東鄰第幾家に在り。

(二二) 度仙香。香の名なり、之を焚けば仙人下降すといふ。
(二三) 趙飛卿。趙飛燕なり、初め漢の宮人と爲り後に皇后を廢して自ら后と爲る。
(二四) 卓文君。新に寡と爲り一日司馬相如琴を彈じて之を挑む、其夜文君相如と奔れり。
(二五) 東鄰。美人の住める處の意なり、もと宋玉の文に本づく。

〔生想ふ介を作す〕　是了、曾て後花園西に轉じ、夕陽の時節、小娘子の走動るを見哩。

〔旦〕　便ち是了。

【解說　「俺度仙香」云云以下二句は、我は天より下れる仙女に非ず、また汝の傍に在りて燭臺の灰皿の掃除せんが爲めに來りしにも非ずとなり、「趙飛卿」云云以下二句は、我には舊惡も無く、また曾て嫁げることもなしとの意なり、「鶯簧を」云云は、鶯の聲して柳氏の宅に到るとの意、卽ち戀人を尋ねて來れるを謂ふ、「宋玉の」云云は、此處より程近き處との意味と、汝を思ふ女との意とを兼ねたるなり。】

〔生〕　家下に誰有りや。

〔宜春令〕〔旦〕　斜陽の外、芳草の涯、再に人無し伶仃的〔二六〕孱嫣有り、奴年二八、〔二七〕包彈沒く風葉裏の花を藏し、春歸るが爲に嗟呀を惹動せり、儞の〔二七〕風神俊雅なるを瞥見し、他無し、儞と燭を翦り風に臨み西窗に閑話せんと待す。

〔生背く介〕　奇なる哉奇なる哉、人間此の豔色有り、夜半故無くして明月の珠に遇ふ、怎生發付せんや。

【二六】包彈。批難の意なり、宋の包拯の彈劾嚴烈なるに出でたる語なり。

【二七】風神。風貌精神なり。

〔前腔〕　他人を驚かすの豔、絕世の佳、一笑を閃す風流の銀蠟、月明乍くが如し、問ふ今夕何年なれば星漢の槎、金釵の客・寒夜家に來り、玉天仙・人間に下榻せるか。

〔背く介〕　知他んや、是れ甚の宅眷の孩兒なるかを、這に迎門調法するを知他んや。

待小生再に他に問はん。〔回る介〕　小娘子貧夜に小生を下顧す、敢是夢也。

〔旦笑ふ介〕　夢に不是、當眞哩、還怕る秀才未だ容納を肯んぜざるを。

〔生〕　則怕る未だ眞ならざるを、果然美人愛せらるれば、小生喜び望外に出づ、何ぞ敢て卻けん乎。

〔旦〕　這等ならば眞箇に儞に盼著了。

〔耍鮑老〕　幽谷寒涯、儞俺が爲に花を催して連夜發せしむ、俺全然未だ嫁せず、儞箇中知察せん、好人家を拘惜的、牡丹亭に嬌恰恰し、湖山畔に羞答答し、讀書の窗淅喇喇す、良夜陪茶を省かば、清風明月價無きを知らん。

【解說　「風葉裏」云云以下二句は、心の中に戀を知り初めたるが、逝く春に逢ひて悲歎を得

たりとの意なり、「怎生發付せんや」とは如何に處置せば可ならんかとの意なり、「問ふ今夕」以下は、小姐の來れるを天女の下降に比べたるなり、「知他んや」以下は、何處の女兒かは知らねど我は彼を如何にして迎接せば可なるか、我はその迎接の法を知らずとなり、「好人家」云云は良家の女を誘ひて惜むこと、卽ち夢にて柳生が小姐を誘惑したる意なり、「嬌恰恰」はなまめくさまなり、「羞答答」は羞づるさまなり、「淅喇喇」は寒寂なるさまなり、「良夜」云云以下は、斯の如き良夜に二人共に茶を讀み談ずることを爲さずんば、淸風明月もつまらぬ物とならんとなり。】

〔滴滴金〕〔生〕 俺驚魂化し、睡醒むる時涼月些些なり、陡地の榮華、敢則是夢中の巫峽、儞に虧殺す花陰を走み些兒の怕をも害はず、蒼苔に點じて些兒の滑を溜らず、萱親に背きて些兒の嚇を受けず、書生を認め些兒の差を著さず、儞看よ斗兒斜に、花兒亞し、此の如く夜深く花睡罷、笑ふこと咖咖、吟ふこと哈哈、風月加ふる無し、他の豔軟香嬌をば做意兒耍ばん、他を虧すと下的、便ち他を虧すも則半霎のみ。

【解說 「驚魂化し」とは、夢中の魂が現實に化するなり、「陡地の榮華」は思ひ掛けなき歡樂を謂ふ、「儞に虧殺す」とは、非常に汝（小姐）を煩はしたりとの意なり、夜陰に花下を步み

來りて毫も恐れを抱かず、苔の上を滑りもせず、父母の叱責をも念とせず、また確かに余を戀して誤も無く我が處に來りし汝の恩を謝すとの意なり、「斗兒」は北斗星の柄をいふ、「咖咖」「哈哈」は孰れも笑聲なり、「下的」は雖もの意なり。】

〔旦〕 妾に一言の相懇ふ有り、郎に望む責むるを恕せ。

〔生笑ふ介〕 賢卿話有らば、但說へ妨げ無し。

〔旦〕 妾の千金の軀、一旦郎に付與矣、奴の心に負く勿れ、每夜枕席を共にするを得ば、平生の願足矣。

〔生笑ふ介〕 賢卿心小生に戀する有り、小生豈敢て賢卿に忘れん乎。

〔旦〕 還一言有り、未だ鷄鳴に至らざるとき、奴を放ちて回り去らしめ、秀才送る休れ、以て曉風を避けん。

〔生〕 這れ都て命を領せり、只問ふ姐姐貴姓芳名は。

〔意不盡〕〔旦歎く介〕 少不得花には根元有り玉に(二八)芽有り、說はんと待する時(二九)風聲を惹的大ならん。

〔生〕 以後准ず望む賢卿逐夜して來らんことを。

【二八】芽は鑛床なり、玉を產する岩脈を謂ふ。
【二九】風聲。世間の噂なり。

〔旦〕　秀才よ。

且つ俺が和めに春風を(三〇)點勘せよ這の第一花。

浩態狂香昔未だ逢はず、
月斜なり樓上五更の鐘、
朝雲夜入り行處無し、
神女知らんや第幾峰に來るを。

【解說　「命を領せり」とは、承知しましたとの意なり、「貴姓芳名」とは小姐の姓と名を問ふなり、「少不得」以下は、我にも家もあれば姓名もあれど、若し云ひ出でて人の噂に上らんことを恐るとなり、「俺が和めに春風」云云は、處女初めて人に接したることを善く査べ看よとの意なり。】

【三〇】點勘。驗査なり。

第二十九齣　(一)旁疑

〔步步嬌〕〔淨、老道姑に扮して上る〕　女冠兒生來出家の相、對向無く、生長沒し、(二)三清像を守著、水を換へ香を添へ、鐘鳴り鼓響き、赤緊的是れ那の(三)走方娘、虛花を弄し閑帳を扯く。世事拚て難し一箇の信、人情常に帶ぶ三分の疑。杜老爺這座梅花觀を刱下、俺をして看守せしむること三年、水清く石見はれ、半點の瑕疵無し、止陳教授箇の嶺南の柳秀才を引下ひ、東房に病を養ふ、前幾日・後花園に到り回り來り、(四)悠悠漾漾的して、鬼著き魅著きと一般なるに因り、俺已に疑惑了、湊著箇の韶陽の小道姑は、年方に念八にして、頗る風情有り、此に到りて雲遊し、幾日去らず、夜來柳秀才の房裏に、(五)唧唧噥噥と、女兒の似き聲息を聽的、敢是小道姑我を瞞著し去つて那の秀才を瞧秀才逆來順受了ならん、俺且つ他の來るを待ち他を一番打覷ん。

【一】旁疑。別人の疑惑すること。
【二】三清。道教の三神仙府、玉清、上清、太清なり、像は塑像なり。
【三】走方娘。行脚の女道士なり。
【四】悠悠漾漾。呆然たること。
【五】唧唧噥噥。つぶやくやうなる聲。

【解說　「女冠兒」云云以下三句は、女道士は俗家の人に非ざるが故に、良人も無く、兒女を產育することもなしとなり、「虛花を」云云は、眞面目に事に從はざるの意なり、「逆來順受」は史記に「湯武逆取而順受之」とあるを引きたる句にして、男より女を待受けて之を得るの意に轉用したるなり。】

〔前腔〕〔貼、小道姑に扮して上る〕　俺女冠兒俏的仙眞の樣、擧止を論ずれば都て㈥停當、則一點の情・拋漾し、斗に步す風前に、笙を吹く月上に。

〔歎く介〕

古來仙女は定めて雙を成す、恁にせん生來寒乞の相。

〔見ゆる介〕

〔貼〕　常に無欲以て其の妙を觀る。

〔淨〕　常に有欲以て其の竅を觀る。小姑姑よ、儞昨夜遊方し、遊んで柳秀才の房兒裏に到り去れり、是れ竅か是れ妙か。

〔貼〕　老姑姑這の話は怎的起れるか、誰か看見來か。

〔淨〕　俺看見來。

【六】停當。整へること、適當なること。

〔剔銀燈〕　儞出家人芙蓉淡く妝ひ、一片を翦る㈦湘雲鶴氅、玉冠兒斜に挿し笑香を生ず、出落的十分の情況、斟量するに、敢則書生の夜窗に向つて、逗逗的幽輝半牀。

【解說　「則一點の情」云云はただ一つ、情なるものを念頭より棄て去れりとの意なり、「斗に步す」とは拂曉北斗を拜するなり、是れ道士の修行の一なり、晚に至り笙を吹くも亦仙行とす（周の靈王の太子晉は笙を吹くことを好み後仙と爲れり）「雙を成す」とは配過者を得るの意なり、「其の竅を觀る」は前句の「其の妙を觀る」に對する語、「是れ竅か」云云は、汝が柳生の室に到れる理由は、性慾の爲か修行の爲かとなり、「出落的」云云は、十分に誘惑的に裝ふことなり、「幽輝」云云は、床上の一側に身を置けるの意なり。】

〔貼〕　那箇の書生に向ふか、老姑姑よ這の話は敢理に中らず。

〔前腔〕　俺年淸くして妝を試みると雖然、凡心を洗ひ冰壺月朗、儞怎生て人の輕相を剝落的か、儞半老の佳人に比似停當なり。

〔淨〕　倒つて俺を找起來たり。〔貼〕儞端詳せよ、這の㈧女眞觀の傍に、可に箇の書生を放著話長からしむるか。

【七】湘雲鶴氅。道士の服なり。

【八】女眞觀。女道士の道觀なり。

〔淨〕哎也、俺書生と帳有りとは難道、這の梅花觀、爾は是れ雲遊の道婆、他は是れ雲遊の秀才、爾は住的、偏に他は住不的か、則是往常には秀才夜靜に高眠せり、則爾觀中に到り、那の秀才夜半に門を開き、唧唧噥噥的、爾と共に說話せずんば、誰と共來ん、爾を扯きて(九)道錄司に告げに去かん。〔扯く介〕

〔貼〕便ち去かん、爾(一〇)前官の香火院を將つて外方の(一一)遊棍を停宿せしむ、偏に爾を放過とは難道。〔扯く介〕

【解說】「冰壺月朗」は、無欲にして穢無きに喩ふ、「輕相」云云以下は、汝は何故に我が若若しき姿を罵るか、汝の如き半老の婆婆(佳人といへるは諧謔なり)よりは當然我は容姿を存すとの意なり、「倒つて俺を」云云は、卻つて此方のあらさがしを爲すかとの意なり、「端詳せよ」は、善く考へ見よとの意なり、「箇の書生を放著」云云は、書生を一人住ましむるは問題の種ならずやとなり、「帳有り」とは「私有り」の意なり。【一封書】〔末上る〕閑步す白雲の(一二)除、問ふ柳先生何處に居ると、梅花院主に扣さん。

【九】道錄司。道士を管轄する役所なり。
【一〇】前官。前任の官なり、上文にて杜寶をいふ、香火院は祈願のために建てたる寺觀なり。
【一一】遊棍。浮浪の無賴漢なり。
【一二】除は階段なり。

〔扯くを見る介〕呀。怎で兩箇の姑姑・施主を爭ふか、(一三)元牝同門・道・道とす可し、怎で(一四)櫝に韞して藏し姑・姑を待たざるか、俺知道爾は是れ大姑他は是れ小姑、箇の(一五)彭郎に嫁的港口無からん。

〔淨〕先生知らず、柳秀才半夜門を開き、不住的唧噥するを聽的、俺好意兒にて這の小姑に問へり、敢是爾柳秀才と共に話を講來かと、便罷、倒つて這の小姑は則答應著、誰か秀才と共に話を講哩と、嘴骨弄的說ふ俺箇の秀才を養著と、陳先生、爾の說ふことに憑らん、誰か這の秀才を引き來れる、他を扯きて道錄司に明白しに去かん、俺は是れ(一六)石的。

〔貼〕俺は是れ(一七)水的とは難道。

【解說】「白雲の除」とは道觀の階段をいふ、「道道とす可し」は老子に道可レ道非二常道一(道の道とす可きは常道に非ず)とあるを引きたるものなれど、右の場合にては、孰れも女子なれば人と通ずる

【一三】元牝。玄牝なり、玄字は清朝の諱なる故清版の書は元と作せり、老子に谷神不死是謂玄牝とあり、但し上文にては女子を云ふ。
【一四】論語に有美玉於斯韞櫝而藏諸、求善賈而沽諸の語あり。
【一五】江西彭澤縣大江の中に小姑山有り、江側に一石磯あり彭郎磯といふ、蘇東坡の詩に舟中估客莫漫狂、小姑前年嫁彭郎の句あり。港口は小姑の港口なり。
【一六】石は音實に通ず、卽ちまことなり、而して實は充ち塞がるの意あり。
【一七】水は音虛に通ずうそなり而して又落花流水の水なり。

に可なりとの意なり、「怎で櫝に」云云は論語の句に依りて、姑と沽と音相通せしめ別意を寓したり、卽ち買手あらば賣れよとなり、「儞は是れ大姑」云云は、汝は大姑なれば致方なし、此際小姑が男子に嫁せば議論無からんとの意なり、(彭郎磯は港口無し)又港は講と音相通じ講口は議論の意あり、「俺は是れ石的」に於ける石は石女の意味にもかかれり、次句の「水的」は多情の意味をも有す。】

〔末〕 噤聲、柳秀才の體面を壞了、俺儞に勸む。

〔前腔〕 儞に敎ふ(八)姑徐徐たれ、撒月招風質也虛、早則是れ(九)者也之乎せよ、那の柳下先生は君子の儒、道錄司に到らば儞を牒し俗に去り俗に還らしめ、敢儒流們儞の姑にして姑ならざるを笑はん。

〔貼〕 正に是れ雅相ならず。好く冠子兒を把り(一〇)水雲梳を扶らん、這の仙衣(一一)四五銖を裂了。

〔淨〕 便ち說ふことに依りて、開手罷、陳先生箇の齋を吃しに去かん。

【解說 「姑徐徐たれ」とは靜に溫和にせよとの意なり、「撒月」云云は、むだ口をたたき合ふ

【八】 姑徐徐。もと孔子の語なり、姑は暫くなり、又道姑の意にかかる。

【九】 者也。斷定の助辭、之乎は疑問の助辭、何れも句尾に用ゐらるる助辭なり。

【一〇】 水雲梳。女道士の用ゐる梳。

【一一】 四五銖。量目の輕きこと、乃ち僅少なる意なり、女道士の服なれば仙衣に似て輕きなり、佛經に天人の衣は重さ數銖より半銖に至るとあり。

との意なり、「早則」云云は、口論は終決すべしとの意なり、「君子の儒」はもと論語に出でたる語にして、茲にては柳生は有德の學者なりとの意なり、「儞を牒し」云云以下は、道錄司に於ては汝等の道士たるを禁じ俗家に歸らしめん、儒學の人人は汝等が女道士らしからざるを笑はんとなり、「雅相ならず」とは善き狀ならずとの意、「開手」は爭を止むるの意なり。】

〔末〕 柳秀才の在る時を待ちて又來らん。

〔尾聲〕 淸絕の處再に躑躅す。

〔淚する介〕 咳。

糝たり東風窮淚撲つこと疏疏。

道姑よ、杜小姐の墳兒は上去る可きか。

〔淨〕 雨哩。

〔末歎く介〕 則恨的春寒を鎖し。

這の幾點の杜鵑花下の雨。〔下る〕

〔淨・貼弔場す〕

〔淨〕 陳老兒去了、小姑姑好に嚥す。

〔貼〕 儞に和ひ再に打聽ん、誰か秀才と說話來か。

煙水何ぞ曾て世機を息めん、
高情雅淡世間稀なり、
隴山の鸚鵡能く言語し、
亂に金籠に向ひ是非を說く。

【解說 「清絕の處」とは道觀の中をいふ、「糝たり」とは散り亂るる狀なり、「小姑姑好に嚥す」とは、若き女道士は甚だ饒舌なりとなり、自己に都合よきやうに巧に喋るとの意なり。】

第三十齣 (一)懽撓

〔搗練子〕〔生上る〕 (二)漏を聽けば下半更多し、月影中に向つて那る、恁る時節夜香燒罷る麼。一點の猩紅一點の金、十箇の春纖十箇の針、只世上美人の面に因りて、改盡す人間君子の心。俺柳夢梅は是れ箇の讀書の君子にして、一味に志誠なり、止南安に北上するに因つて、東鄰の西子が嫣然一笑するに湊著、遂に暮雨の來るを成し、未だ是れ五更ならざるに、便ち曉風を逐ひて去れり、今宵約有り、未だ遲早を知らず、正に是れ (三)金蓮若し三寸を移すを肯せば、銀燭先づ五分を刻せしむ。則一件姐姐若し到らば、精神に他に對付せんと要す、一會偸盹も何の不可か有らん。

〔睡る介〕

【解說 「漏を」云云は、夜深くなりたるの意なり、「一點の」云云は、女子の朱脣に喩ふ、「十箇の」云云は、女子の十指に比したり、「東鄰の西子」とは、余を思ふ美人の意なり、もと東鄰」は、宋玉の文に出づ、「西子」は越の美人西施なり、「暮雨」は高唐賦の朝雲暮雨に由來せる

【一】 懽撓。歡樂の場所騷擾すること。
【二】 漏は漏壺の滴る音。
【三】 金蓮。女子の足なり。

語にして、美人に喩へたるなり、「未だ遲早を知らず」とは、早く來るか遲く來るか分らぬとなり。】

〔稱人心〕〔魂旦。上る〕　冥途に(四)掙挫し、死なんと要し卻つて心兒那んともする無し、也則俺が那の人兒忒だ可なる爲、他をして悶房頭に閑燈火を守著しむ。

〔門に入る介〕　呀。

他端然として睡磕す、恁る春寒に也繡衾を把り來つて摸せず、多應他祇んで我を候著ならん。

待他を叫醒さん、秀才秀才よ。

〔生醒むる介〕　姐姐失敬也。〔起つて揖する介〕〔生〕

衣羅を整へて、遠遠相迎へんと待(五)箇るも、這の二更の天・風露多く、還則夜深くして花睡る麼を怕る。

〔旦〕　秀才よ。

俺は那裏に長夜好に過ぎ難く、儞に繾著て眠無く淸坐せり。

〔生〕　姐姐よ。儞の來的腳蹤兒恁く輕きは是れ怎的か。

〔集唐〕〔旦〕　自然は跡無く又塵無し。

【四】掙挫。辛苦を忍ぶこと。
【五】箇は助字なり。

〔生〕　白日尋思し夜夢頻りなり。

〔旦〕　行きて窗前に到り未だ寢ねざるを知る。

〔生〕　一心惟待つ月夫人。姐姐よ、今夜來的些しく遲し。

【解說　「他をして悶房頭に」云云は、柳生をして狹小なる室內に在りて燈火を守らしむとなり。】

〔繡帶兒〕〔旦〕　(六)鎭に消停す、俺閑情忒だ慢俄なるに不是、那些兒か俺が(七)懽哥を忘卻せんや、夜香殘り、(八)尊親を迴避了、(九)繡牀偎り、生活を收拾起、停脫し、風兒に順ひ斜に金佩をば拖き、緊摘離百忙的淡妝明抹す。

〔生〕　儞の高情を費す、良夜酒無し奈何せん。

〔旦〕　都て忘了、俺、酒一壺、花果二色を携へ、栖欄の上に在けり、取り來りて消遣せん。〔旦〕

〔生〕　生受了、是れ甚の果ぞや。

〔旦〕　靑梅數粒。

【六】鎭は儘なり、一事に沒頭する意。
【七】懽哥。戀しき男なり。
【八】尊親。自れの父母。
【九】繡牀。刺繡臺なり。偎はよりかかる也。

〔生〕 這の花は。

〔旦〕 美人蕉。

〔生〕 梅子は酸にして俺秀才に似たり、蕉花は紅にして俺が姐姐に似たり、串飲一杯せん。〔杯を共にして飲む介〕

【解說 「鎭に消停す」は、ひたすら忘るる間なく人を思ふの意なり、「生活を」云云以下二句は、女子の仕事（裁縫刺繡）を爲し了り、すべて一切を終了してとの意なり、「淡妝明抹」は化粧するなり、「串飲」とは共飲なり。】

〔白練序〕〔旦〕 (一〇)金荷、香糯を斟む。〔生〕 (一一)玉液波、微酡を挿へ東風の外翠香り紅醱す。〔旦〕 爾春心を醞釀す。也奇花果を摘不下、這の一點の蕉花と梅豆と呵、君知る麼、愛的人は風韻を全うし花に根有(一二)科。〔醉太平〕〔生〕 (一三)細哦す、這の(一四)子兒・花朵は、美人憔悴し酸子情多きに似たり、喜きは蕉心暗に展き、一夜梅犀點汚する如何、酒・微暈を潮し笑・渦を生ず、臉を瞰著て恣情的嗚嘬せんと待せば、些兒箇、翠・情波に偃了、紅蕉を潤し點じ、香・梅唾に生ず。

【一〇】金荷。荷葉形の金杯なり。
【一一】玉液。酒に喩ふ。波は助字。
【一二】科は助字なり。
【一三】細哦。詳かに評するなり。
【一四】子兒。青梅を指す。

〔白練序〕〔旦〕 (一五)活潑、(一六)死騰那、這是第一所人間風月の窩、昨宵箇は微茫なる暗影輕羅、把勢兒忒だ顯轄、爲甚麼人幽期に到り話轉つて多きか。

〔生〕 睡るに好也。

〔旦〕 好き月なる也。

消停し坐す、色を妒まざる嫦娥、俺と和に人三箇。

【解說 「微酡を挿へ」とは、酒のため少しく顏に赤味を呈することなり、「東風の外」云云は、草木春風に吹かれて芽を出し花を發するが如く、小姐は春風吹かざるも滿面に春色を呈せりとなり、「也奇花果を」云云は、別に珍奇なる花果を摘み取るに及ばずとなり、此句は、他の女子に心を向くる勿れとの意をも含めり、「花に根有り」とは、小姐は來歷不明の女に非ずして立派なる家庭の人なりとの意を含めり、「酸子」は青梅の意にかかりて又別に貧士（卽ち柳生）に喩ふ、「梅犀點汚す」は、宋の武帝の女が早春簷下に臥して梅花額に落ちたる故事に因める句にして梅は額を意味し、「梅を點ずる」は、額の化粧汗に剝げ白粉の殘れるをいふ、また「犀」は、詩經に齒瓠犀の如しとあり、玆に女の齒に喩ふ、「汚」は齒の汚るること、卽ち此の一句は化粧のくづるる意なり、

【一五】活潑。活動なり。
【一六】死騰那。靜止なり。

「翠情波に偃了」とは、眉が眼上に在りとの意、（翠は翠黛、）「梅睡」とは睡梅花に似たるをいふ、「把勢兒」云云は、身體のこなし甚だ靈骨なるの意なり、「消停し坐す」は心に安んじて居るの意なり。】

〔醉太平〕〔生〕 多き無し、花影阿那たり、(十七)奴奴に勸む睡らん也、睡らん也奴哥、春宵美滿、一霎にして暮鐘敲破せん、嬌娥、前宵の似きは、雨雲羞怯し顫聲訛せしも、敢今夜は翠顰輕可ならん、(十八)睡則那、膩乳をば微搓し、酥胸汗帖し、細腰春鎖さん。

〔淨・貼・悄に上る〕

〔貼〕 道の道とす可きは、道を知る可し、名の名く可きは、名を聞く可し。〔生・旦・笑ふ介〕

〔貼〕 老姑姑よ、爾聽け秀才の房裏に人有り、這れ俺小姑姑に不是了。

〔淨聽く介を作す〕 是れ女人の聲なり、快く門を敲き去れ。〔門を敲く介〕

【解說 「雨雲」とは、懽會なり、「顫聲訛す」とは音ふるひて語を爲さざるの意なり、「翠顰輕可」は、眉をひそむること少なきなり、「微搓」は、輕く弄ぶの意なり、「道の道とす可き」云云以下は、老子の句を變じたるなり、而して此の場合に於ける意味は、道通ずる所あれば必

【十七】 奴奴。小姐を呼ぶ語。
奴哥は柳生自ら呼ぶ語。
【十八】 則那。助字なり。

ず之に由りて知る所あり、物有れば名あり、名あれば必ず人に聞ゆとの意にして、如何に掩ふとも事實は尋ねて之を知り得べしとなり。】

〔生〕 誰か。

〔淨〕 老道姑、茶を送る。

〔生〕 夜深了。

〔淨〕 相公の房裏に客有哩。

〔生〕 沒有。

〔淨〕 女客哩。

〔生・旦・慌つる介〕 怎にせば好からん。

〔淨急ぎ門を敲く介〕 相公よ、快く門を開け、(十九)地方巡警す、聲揚るを免的哩。

〔生慌つる介〕 怎了、怎了。

〔旦笑ふ介〕 不妨、俺は是れ鄰家の女子なり、道姑・干休を肯んぜざる時は、便ち他に一箇の勾引の罪名兒を與へん。

〔隔尾〕〔旦〕 便ち開呵、須らく(二〇)撒和なれ、紗窗を隔て怎で守的て(二一)參兒の趕るに到らんや。

【十九】 地方。警吏なり。
【二〇】 撒和。徐徐の意なり、荒しくせざること。
【二一】 參兒。あけの明星。

柳郎よ、則管門兒を鬆了。
俺這の一幅の美人圖に影著那邊に躲れん。
〔生・門を開き、旦・躲るるを作し、生・身を將つて旦を遮ふ、淨・貼・搶ひ進み笑ふ介〕　喜也。
〔生〕　什麼が喜きか。〔淨前みて看る、生・身に攔る介〕
〔滾徧〕〔淨・貼〕　這更天一點の鑼、仙院・門闔を重ぬ、何處の嬌娥ぞや、乾柴火を惹的を怕る。〔生〕
儞便や(三三)打睃するも、甚の著科か有らん、是れ牀兒裏に窩し、箱兒裏に那し、袖兒裏に閣かんや。

【解說】「干休を肯んせず」とは、此の儘に捨て置くを肯んせずとの意なり、「紗窗を隔て」云云は、夜の明くるまで窗の外に立ちつくしては居られまじとの意なり、「這更天」以下四句は、初更の鑼聲と同時に各門を閉づる道觀の內に何處の婦人か入り來れる、我は道觀の內に情事の起らんことを恐るとなり。【

【三三】打睃。見廻はすなり。

〔淨・貼・前に向む、生・攔不住、內・風起り旦閃下する介を作す〕
〔生〕　燈昏了也。
〔淨〕　分明に一箇の影兒、只這軸美女の圖此に在りて、古畫・精と成了。
〔前腔〕　畫屏に人踏歌し、曾て儞書生の和するを許す、妖魔に不是ば、甚の影兒か風を望んで躲

けんや。
相公よ、這是什麼の畫ぞや。〔生〕
這の(三三)妙姿婆、秀才家に隨行的香火なり、俺寂靜裏に、暗に祈求せるに、儞莽に邀喝す。
〔淨〕　是了、說はずんば知らず、俺前晚相公の房內に啾啾唧唧たるを聽見、這の小姑姑を疑惑へり、如今明白了、相公、權く小姑姑を留めて伴話せよ。
〔生〕　請了。

【解說】「古畫精と成了」とは畫が年經て靈を生じ妖變したりとの意なり、「秀才家」とは秀才たる者なり、「香火」は護持祈願するものなり、「莽に邀喝す」は、無遠慮にわめき立つるの意なり。【
〔尾聲〕〔貼〕　動不動道錄司官・私和に了す。〔生〕
則俺分外ならざるの書生を欺負め別箇をも欺む、姑姑よ這多半覺りて美斯斯たりしに、則儞が我を奚落殺了を被けたり。〔淨貼下る〕
〔生笑ふ介〕　一天の好事、兩箇の(三四)瓦剌姑、掃與掃與、那の美人呵、好に喫驚也。
應に陪して燭を秉り夜深くして遊ぶべし、

【三三】妙姿婆。妙世界なり、好景趣の意なり。
【三四】瓦剌姑。醜なる姑なり。瓦剌はもと蒙古の一種族なり此の族容貌醜惡なり、清代の額魯特は瓦剌族なり。

惱亂す春風卒に未だ休まず、
大姑山遠くして小姑出で、
更に飛夢に憑りて(三五)瀛洲に到る。

【解說　「私和に了す」とは、表面上の訴訟と爲らずして、話合ひにて事件の和解するをいふ、此句は道錄司官に訴ふる程の事も表沙汰にせざることありとの意なり、「分外ならざるの書生」とは、書生として其の本分を守れる者との意なり、「別箇」とは、別の人なり、暗に小姐を指すとも解すべく、小姑姑を指すと做すも不可なし、「這多半」云云は、暫くぐつすりと眠り居たりとの意なり。】

【三五】瀛洲。仙島なり。

第三十一齣　(一)繕備

【番ト算】【末、文官に扮し、淨、武官に扮して上る】邊海一邊の江、胡塵の漲るを隔不斷、維揚新に築く兩城牆、酒を釃みて江上に臨む。

請了、俺們は揚州府の文武官寮是也、安撫杜老大人は、李全が地方を騷擾するに因るが爲に、(二)外羅城一座を加築し、今日落成して宴を開く、杜老大人早くも到也。

【前腔】【衆、外を擁して上る】三千の客兩行、百二の關重壯。

【文武迎ふる介】【外】維揚の風景世に雙無し、直ちに層樓に上つて望まん。【見る介】

【衆】北門の(三)臥護・耆英を要す。

【外】恨むらくは胸中十萬の兵を少く。

【衆】天・金山を借り底柱と爲し。

【一】繕備。防備を整ふるなり。
【二】外羅城。外城なり。
【三】臥護。臥して守護するなり。晉の羊祜病めるとき帝は祜をして臥して諸將を護せしめしことあり。耆英は老人中の英物なり、宋の文潞公西京を留守し耆英會を起せることあり。

〔外〕身・鐵甕に當り長城と作る。揚州表裏重城、不日成就せるは、皆文武諸公士民の力なり。

〔衆〕此れ皆㈤老安撫の遠畧奇謀なり、屬官竊に下風に在りて、敢て一杯を獻じ、古人の城隅の宴に效はん。

〔外〕正に好し、且つ新樓に向いて一望せん。

〔望む介〕壯なる哉城也、眞に乃ち江北無雙の塹、淮南第一の樓。

〔衆〕請ふ酒を進めん。

【解說　「請了」は衆人に挨拶する語なり、「恨むらくは」云云は、智謀の足らざるを憂ふるなり、「身鐵甕に」云云は、我が身鐵の如く堅固と爲り國を護るの長城と爲らんとの意なり。】

〔山花子〕〔末〕賀す層城頓に雲霄を挿し敞き、㈥雉・飛騰し映じて寒江を壓す。

〔淨〕表裏山河の一方に據り、長淮萬里の㈦金湯を控ふ。

〔合〕

【四】老安撫。安撫使杜寶を指す。

【五】雉。雉堞なり、城上の小壁なり。

【六】金湯。金城湯池なり、堅固なる地形に喩ふ。

㈧敵樓高く窺ひ女牆に臨み、風に臨み酒を釃み旌旆揚る、乍ち想起す㈨瓊花當年暗香を吹くを、幾點の新亭、無限の滄桑。

〔外〕前面に高起し霜の如く雪の似き四五十堆は、是れ何山也。

〔衆〕都是各場積む所の鹽にして、衆商人の㈩中納なり。

〔外〕商人何くに在りや。

〔貼・老旦、商人に扮して上る〕海田に占種し白玉を高うし、鹽井を掀翻し黃金を橫ふ、商人見ゆ。

〔外〕商人麽、則怕らくは早晚兵糧を(一〇)動支せんことを要するを、償緊(一一)上納せよ。

〔前腔〕這の鹽呵、是れ銀山雪障・天に連りて海に晃く、夏草秋糧を煎成し、平に看取す鹽花竈場、儘く(一二)支排す中納邊商。〔合前〕

〔外〕酒を罷了、喜的に廣く兵糧有り、則要衆文武・(一三)關防・法の如くせよ。

〔解說　「表裏」云云は、一面山に據り一面河に臨めるなり、「想起す」云云以下は、榮華の跡の荒廢せるを歎く意なり、「海田」云云二句は、鹽を製することを形容したるなり。】

【七】敵樓。望樓なり。女牆。小壁なり。

【八】昔維揚州の后土祠に珍花木あり、瓊花といふ、宋の時無雙亭を花側に築けり。

【九】中納。中等の納入品なり。(鹽は官の專賣なり)

【一〇】動支。支出すること。

【一一】上納。上等品を納入するなり。

【一二】支排。排列なり。

【一三】關防。取締を爲すの意なり。

〔舞霓裳〕〔末淨〕　文武官寮・邊疆に立ち、好く關防せよ、這の農桑、士工商を壞了しむる休れ。

〔合〕

敢金家早晚來つて無狀ならん、砲箭旗槍を(一四)打貼起よ、聽く邊聲風沙迭ば蕩き、猛に驚起するを、見る　(一五)蟠花戰袍舊邊將を。

〔紅繡鞋〕〔衆〕　吉日(一六)城隍を祭賽す、城隍よ、神を歸し土の安康を謝す、安康にして旗纛を祭り、軍裝を犒ふ、陣頭兒、敢て抵當し、箭眼裏、好く遮蔽せん。

〔尾聲〕〔外〕　三韜を按じ、(一七)六出旗門をば放たん、文と武と肅靜端詳なれ、則海西頭邊烽を動かす那の一聲砲兒響くを等待たん。

(一八)夾城雲煖かにして霓旄を下す、
千里の(一九)崤函一夢の勞、
意はざりき新城連嶂して起り、
夜來(二〇)斗に沖して氣何ぞ高き。

【解說　「金家早晚」云云は、金朝の兵不日押寄せ來つて狼藉せんとの意なり、「陣頭兒」以下

【一四】打貼。打點に同じ、準備する點檢するの意。起は動詞の助字なり。
【一五】蟠花。戰袍の服飾なり。
【一六】城隍。一城の守護神なり、道教の神なり。
【一七】六出旗門。兵法の語なり世俗に諸葛亮六出祁山の傳あり。
【一八】夾城。重城なり。
【一九】崤函。函谷關。
【二〇】斗。北斗星。

四句は、陣頭に在りては勇敢に防戰し、箭眼に身を遮蔽して保護せんとの意なり、「三韜」は兵書なり、此句は屢〻城を出でて敵を惱ますの意なり。】

第三十二齣　(一)冥誓

〔月雲高〕〔生上る〕　暮雲金闕、風旛淡く搖拽す、但鐘聲の絶ゆるを聽的、早くも則是心兒熱す、紙帳の書生、分有りて蘭麝を氳む。

　嗜時還早し。

花陰を蕩し、單則是れ月痕をば遮る。

〔鐙を整ふる介〕

溜たる風光、穩に(二)鐙兒の爇を護著。

〔笑ふ介〕　好書讀みて盡き易く、佳人期して未だ來らず。前夕美人此に到り、竝く隄防せずして、姑姑攪攘せり、今宵他未だ來らざるの時を趁として、先づ(三)雲堂の上に到り、一回攀話し、疑惑を生ずるを免れん。〔門を掩うて行く介を作す〕

此の處人に留めて戶半ば斜く。

【一】冥誓。魂魄の盟なり。
【二】鐙兒は有脚の油盞なり。爇は燈蕊なり。
【三】雲堂。道士の房。

天呵。

俺那んぞ心期那些に在る有らんや。〔下る〕

【解說　「金闕」は道觀に比す、「紙帳の」云云以下二句は、貧書生なれど自然の氣高さにて蘭麝の清香を放てるが如しとなり、「並く隄防せずして」とは、油斷したるの意なり、「人に留めて」云云は、人の入るに便にせんが爲め扉を半ば開けりとなり、「俺那んぞ」云云は、我心豈他（道姑）に在らんやとの意なり。】

〔前腔〕〔魂旦上る〕　孤神(四)害怯す、佩環風定るの夜。〔驚く介〕則道ふ是れ人の行く影と、原來是れ雲・月を偷めり。

〔到る介〕　這是柳郎の書舍了、呀、柳郎何處也。

閃閃として幽齋に、影を弄して燈明滅し、魂再に黯なり、燈油接へ、情一點燈頭に結す。

〔歎く介〕　奴家と柳郎との幽期は、除是人知らざるのみ、鬼は都て知道り。〔泣く介〕

竹影の寺風聲怎的遮らん、黃泉の路夫妻怎で當に賒かなるべき。

說はんと待するも何ぞ曾て說はんや、(五)嚬するが如きも嚬を奈んともせず、花下の意を把持し、猶恐る夢中の身を。奴家・鬼錄に登ると雖、未だ人身を損せず陽祿將に回らんとし、陰數已に

【四】害怯の害は害怕害羞等の害の如く惱みわづらふの意に用ゐらる。
【五】嚬。顰なり、眉をひそむるなり。

盡きぬ、前日柳郎の爲にして死し、今日柳郎の爲にして生く、夫婦の分緣・去來明白なり、今宵說はずんば、只管人鬼混纏して甚の時節に到らん、只怕る說ふ時は、柳郎が那の一驚呵を、也避不得了、正に是れ、夜傳ふ人鬼三分の話、早く定む夫妻百歲の恩。

【解說　「孤神害怯す」とは、孤魂怯ゆるなり、「鬼は都て知道り」とは、幽冥に在る者はすべて之を知れりとの意なり、「陽祿」云云は、將に再生せんとの意なり、「夫婦の分緣」とは、夫婦たる當然の因緣なり、「人鬼混纏」は、人と幽靈との差別無きことの意なり。】

〔懶畫眉〕〔生上る〕　畫闌風擺り竹橫斜。
〔內、鳥聲を作し驚く介〕
驚鴉閃び殘紅の樹に落在たり。
呀、門兒開也。
玉天仙光降了紫雲車。
〔旦出で迎ふる介〕　柳郎來也。
〔生揖する介〕　姐姐來也。〔旦〕
燈花を剔り這噌郎爺を望む。〔生〕

直に恁的志誠なる親姐姐。
〔旦〕　秀才よ、儞を等不來、俺は唐詩一首を集下了。
〔生〕　耳を洗はん。
〔旦念む介〕　良媒に託せんことを擬し亦自ら傷む、月寒山色兩に蒼蒼、知らず誰か唱ふ春歸の曲、又人間に向つて（六）阮郎を魅す。
〔生〕　姐姐高才なり。
〔旦〕　柳郎よ、這の更深に何處より來也か。
〔生〕　昨夜姑姑の被めに與を敗らる、俺・儞が未だ來らざるの時に乘じて、姑姑の房頭に去き、他が動定を看了、來りて儞を迎接するを好くせり、想はざりき姐姐今夜來ること恁く早からん哩。
〔旦〕　月兒の上るを盼不到也。
【解說　「玉天仙」云云は、天上の女仙が紫雲の車に乘じて下降せりとの意にて、小姐の來れるに喩ふ、「直に恁的」は、まあこんなに誠心の深い戀しき女との意なり、「耳を洗はん」とは、謹んで拜聽せんとなり、「他が動定を看了」とは、道姑の樣子を窺ひたりとなり。】

【六】阮郎。阮肇なり、劉晨と共に天台山にて仙女に會へり。